うに崇められたテーベの王達のやうに崇められた。ビザンチウム教會の宣教師達が新らしい活動の地を求めた時には、東方へ向つて行つて、ビザンチウムの文明を廣漠としたロシヤの曠野へ運んだ。

一方西の方は、まつたく野蠻人の好き自由に委された。凡そ四百年近くの間、殺人、戰爭、放火、掠奪が毎日の仕事であつた。一つのものが——本當にただ一つのものが——ヨーロッパが根こそぎ崩れて、再び穴居人と鬣狗との時代に逆戻りすることから救つた。

それは教會であつた。——昔、大ローマ帝國がどこかシリヤの國境邊の小さな町に暴動が起つたりして面倒な思ひをしまいがために殺してしまつた、あのナザレの大工イエスの弟子であると幾世紀もの間言ひ通して來た謙遜な男女の一團であつた。

教會の勃興

ローマがキリスト教世界の中心となつた所以

普通の智慧を持つたローマ人で帝國の治下に住んでゐたものは、父祖の崇めた神々にはほとんど何の興味をも持つてゐなかつた。年に何回かは神殿へも行つたが、それとてただ習慣としてに過ぎなかつた。人々が嚴かな行列をして宗教上の祭をしたりする時には我慢して見てはゐた。けれども、ジュピター（註。ローマの主神）やミネルヴァ（註。智慧、發明、思想等）やネプチューン（註。ローマを掌るローマの女神。）（の海の神。）やを拜むことは、何となく子供らしい事であつて、未開な初期共和國時代の遺物としての外に、ストア派やエピキュラス派やその他のアテネの大哲學者達の著書に精通してゐるものが研究する問題としては不似合であると思つてゐた。

この態度がローマ人を非常に寛大な人間にした。政府は、人民はみんな、ローマ人も、外國人も、ギリシヤ人も、バビロニヤ人も、ユダヤ人も、一切の神殿に置かれることになつてゐた皇帝の像に對して必ず相當の敬意を表するやうにと布告した。

けれども、これはたゞ形式だけのことであつて別段深い意味はなかつた。一般から言へば、誰でも

自分の好きな神々を拜み、尊み、敬つてよかつた。で、自然、ローマはエジプトやアフリカやアジヤの神々を拜むために建てられたあらゆる種類の不思議な恰好をした小さな神殿や會堂で一ぱいになつた。

イエスの最初の弟子達がローマに着いて、四海同胞の新らしい敎を說き出した時にも、誰も反對などしなかつた。道行く人は足をとどめて耳を傾けた。ローマは、世界の首都だけあつて、いつも到るところに風來の說敎者がゐて、めい〳〵わが田に水の「神祕」を宣べてゐた。この自分免許の司祭達は、大抵、感覺に訴へて、それ〴〵彼等の神に從ふものにはお金がどつさり出來て、盡きぬ快樂が與へられると言つて約束した。間もなく道行く人々の群は、キリスト敎徒といはれる人達の話すことが獨り非常に違つてゐるのに氣がついた。彼等は財產の多いことや身分の高いことには心を動かされないらしかつた。彼等は貧乏と謙遜と柔和との美しさを褒めたたへた。これらの美德があつてローマが世界の主となつたのでないことは明かだつた。その光輝赫奕たる全盛時代にある人々に向つて、この世の成功は決して永續きする幸福を齎すことが出來ないと告げてゐる一つの「神祕」に耳を傾けることはむしろ面白いことだつた。

のみならず、キリスト敎の神祕の說敎者たちは、まことの神の言葉を聽かうとしない人々の行手にはこれ〳〵の運命が待つてゐるといふ恐ろしい話をした。もうぐづ〳〵してはゐられなかつた。勿論、

古いローマの神々はまだ存在してゐたが、しかし、この神々に、遠いアジヤからヨーロッパに連れられて來たこの新らしい神の力に對して自分達の信者を守るだけの力が果してあつたか？　人々は疑を持ちはじめた。で、もう一度立歸つてこの新らしい信條にぢつと耳を傾けた。間もなく、彼等はイエスの言葉を說いてゐる男達や女達と一しよに會合しはじめた。彼等はこの人々が普通のローマの司祭達とは非常に違つてゐるのを知つた。第一に、みんながみんな恐ろしく貧乏だつた。奴隷にも動物にもやさしかつた。富を得ようとなどしないばかりか、却つて持つてゐるものは何でもくれた。この人々の私心のない生活の手本を見て、多くのローマ人は古い宗敎を棄てた。そして、キリスト敎徒の小さな團體にはひつて私人の家の奧の間か、どこかの廣い野原かなどに集つた。で、神殿は次第にさびれた。

かうして年一年と經つにつれてキリスト敎徒の數はます〳〵增した。敎會監理者、卽ち長老が選ばれて小さな敎會の世話を見た。一人の司敎が一つの州內にあるすべての團體の頭におかれた。パウロについてローマへ來たペテロが、ローマの最初の司敎であつた。その後、彼れの繼承者達は法王として知られるやうになつた。

敎會は帝國內で一つの有力な機關となつた。キリスト敎の敎義はこの世に諦めをつけた人々の心に強く響いた。そしてまた、帝國政府の下では花々しい生活をすることも出來ないやうな氣がしてゐた

が、ナザレの先生の謙遜な弟子達の中なら持つて生れた統率の才を揮ふことが出來ようといふ多くの強い人達の心をも惹きつけた。たうとう國家も氣を留めずにはゐられなくなつた。ローマ帝國は（前にも言つたやうに）無頓着なあまりに寛大であつた。誰にでも自分の好き自由に濟度を求めさせた。ただ異つた宗派が互の間に平和を保つて、「持ちつ持たれつ」といふ賢い規律に從ふやうにと言つた。

ところが、キリスト教徒はどんな堪忍をもすることを拒んだ。彼等は自分達の神が、自分達の神だけが、天と地のまことの支配者であつて、その餘の神々はみんな騙兒であると公然と言ひ觸らした。これは他の宗派に對して不公平に思はれたので、警察はさういふ言ひ方を差止めた。キリスト教徒は頑張つた。

間もなく更に一層面倒な事が起つて來た。キリスト教徒は皇帝に敬意を表するといふ形式を取ることを拒んだ。彼等はまた軍隊にはひるやうに呼び出されても出て行くことを拒んだ。ローマの役人達は罰するぞと言つて嚇かした。ところがキリスト教徒達は、このみじめな世界は非常に樂しい天國へ行くまでの待合室に過ぎないのだから、自分達の主義のために死を受けるのは願つてもないことであると答へた。ローマ人は、かういふ仕打に困り拔いて、時には言ふ事を肯かないものを殺したけれど、しかし、さうたび〳〵は殺さなかつた。教會の初期の頃にはいくらか私刑も行はれたが、しかし、これは一部の暴民共が、思ひつくだけの惡い事を、（例へば、赤兒を殺したり食つたりしたとか、病氣や

傳染病を持ち込んだとか、危急な秋に敵に內通したとかいふやうな事を）近所にゐるおとなしいキリスト教徒達がやつた事にして、その報いとしてやつたことであつた。といふのは、キリスト教徒は決して抵抗しなかつたので、まつたく危險のない遊びであつたからである。

さういふ間も、ローマは絕えず蠻族から侵略されてゐた。で、ローマ軍が負けると、キリスト教の宣教師達は野蠻なチュートン人に平和の福音を說くために出かけて行つた。彼等は死を恐れない强い人々であつた。彼等は悔改めない人々の未來がどうなるかといふことを一點の疑ひをも殘さぬやうに話した。チュートン人は深く心を動かされた。彼等はなほ古いローマの都の文化に對して深い尊敬を持つてゐた。しかるに、それらの人々はローマ人である。話してゐることは多分眞理であらう。と言つたところから、間もなくキリスト教の宣教師はチュートン人やフランク人やの野蠻な地方で一つの勢力となつた。五六人の宣教師は一聯隊の兵士と同じ値打があつた。皇帝達もはじめてキリスト教が自分達のために非常に役に立つことを知つた。或る州では、昔の神々を信じてゐるものと同等の權利をキリスト教徒に與へたりした。けれども、大きな變化が起つたのは四世紀の後半である。

コンスタンチヌス（時としては、なぜか知らぬが、コンスタンチヌス大帝と呼ばれる）が時の皇帝であつた。彼れは恐ろしい惡漢であつた。が、しかし氣の弱い人々などはとてもあの激しい戰亂の世に生き殘らうと望むことは出來なかつたであらう。長い、變化に富んだ生涯の間に、コンスタンチヌ

スは幾度か榮枯盛衰を味つた。ある時、ほとんど敵のために破られた時に、彼れはそのころ誰も彼もが話してゐたこの新らしいアジヤの神の力を試して見ようと考へた。彼れは、もし今度の戰に勝つたならば自分もキリスト教徒にならうと約束した。と、勝利を得たので、その後はキリスト教の神の力を信じて進んで洗禮をも受けた。

その時から以後、キリスト教會は公然と認められて、これがためにこの新らしい信仰の地位が非常に鞏固にされた。

けれども、キリスト教徒はまだ全國民のごく少數（五六分ぐらゐ）にしかならなかつたので、勝利を占めるためには、すべての妥協を退けねばならなかつた。古い神々は滅されねばならなかつた。ちよつと一時、ギリシヤの智慧を愛した皇帝ジュリヤンが異教の神々をそれ以上に壞させまいとした。けれども、ジュリヤンがペルシヤの遠征中に負傷して死ぬと、その繼承者のジョヴィヤンはまた教會を大に盛んにした。一つまた一つといふやうに古い神殿の扉はその時閉ぢられた。ついで皇帝ユスチニヤヌス（コンスタンチノープルにセント・ソフィヤ會堂を建てた人）の代になつて、その昔、プラトーが創立したアテネの哲學の學校を止めさせた。

ここに至つて、古いギリシヤの世界はまつたく終を告げた。そこでは人間がめい〳〵自分の欲するままに自分の夢を見、自分の考を考へることが許されてゐたのであつた。が、この哲學者達の立てた

どこか漠然とした行爲の法則では、野蠻と無智との大洪水が押寄せて昔からの物のきまりを根こそぎ洗ひ去つてしまつた後の人生の進路を示す羅針盤として不足であることが分つたのである。何かもつとしつかりした、もつとはつきりしたものが欲しかつた。それを教會が提供したのである。

何事も不安定な時代にあつて、獨り教會は巖のやうに立つて、自分が眞實であり神聖であると信じてゐる主義を執つて一歩も退かなかつた。この確乎とした勇氣があつたればこそ多數の者の讃仰の的ともなつて、ローマの國家を滅したあの艱難の中をさへローマの教會は安全に切り抜けて來たのである。

けれども、キリスト教の最後の成功にはいくらか僥倖の氣味もあつた。五世紀に、テオドリックのローマゴート王國がなくなつた後は、イタリヤは割合に外敵の侵略を受けなかつた。ゴート族のあとから來たロンバルヂヤ人やサクス人やスラヴ人は弱いぐづぐづした部族であつた。であつたればこそ、ローマの司教達は彼等の都の獨立を維持することが出來たのである。で、間もなく半島中に散らばつてゐた帝國の殘黨はローマ大公（卽ち司教）を認めて自分達の政治上及び精神上の支配者とした。

舞臺はすでに裝置されて强者の出現を待つた。その人は五九〇年に出て來た。名はグレゴリーと言つた。古代ローマの支配階級の出身で、その市の「長官」卽ち市長であつた。やがて彼れは修道士となり司教となつて、そしてつひに、ひどく不本意な氣がしながら、（といふのは、彼れは宣教師になつ

てイングランドの異教徒にキリスト教を傳へたいと思つてゐたからである）セント・ペートル教會へ引きずられて行つて法王にされた。彼れはただ十四年間支配しただけだつたが、死んだ時には西ヨーロッパのキリスト教世界はみんなローマの司教、卽ち法王を教會全體の頭として正式に認めてゐた。

この勢力は、しかし、東方には及ばなかつた。コンスタンチノープルでは、皇帝達が古來の慣例をつゞけて、アウグスツスとチベリウスとの繼承者を政府の頭とすると同時に國教の大主教としてゐた。一四五三年に、東ローマ帝國はトルコ人に征服された。コンスタンチノープルは占領せられ、最後のローマ皇帝コンスタンチン・パレオローグはセント・ソフィヤ會堂の階段で殺された。

その數年前に、彼れの兄弟トマスの娘ツオエがロシヤのイワン三世に嫁してゐた。そこで、モスコー大公がコンスタンチノープルの傳統を承け繼ぐことになつた。そして、昔のビザンチウムの双頭鷲の紋は（ローマ帝國が東と西とに分たれた時代の名殘であるが）近代ロシヤの紋章となつた。ザー（註。ロシヤ皇帝の稱號。）もまた、それまでは單にロシヤの貴族の筆頭であるといふに過ぎなかつたが、それからはローマ皇帝と同樣、獨りかけはなれて嚴めしい態度を執つて、その前では臣民はみんな、高いも低いも、取るに足らない奴隸となつた。

宮廷もまた、東ローマの皇帝達がアジヤやエジプトから輸入して、そして（自惚れて）アレクサンドル大王の宮廷に似てゐるといつてゐた東洋風の型にならつて作りかへられた。この瀕死のビザンチ

ウム帝國が疑ふといふことをしない世界に遺したこの不思議な遺產は、その後また更に六世紀の間、ロシヤの廣漠とした平野の中で非常に生き〳〵と榮えてゐた。コンスタンチノープルの双頭鷲のついた王冠を戴いた最後の人ザー・ニコラスが殺されたのは、いはゞ、ついこの間の事である。彼れの死體は井戸の中へ投げ込まれた。彼れの息子も娘達もみんな殺された。彼れの昔からの權利も特權もみんな廢されて、そして敎會はコンスタンチヌスの時代以前にローマで持つてゐたと同じ地位に落された。

マホメット

アラビヤ沙漠の豫言者となつた駱駝追ひアーメッドと唯一のまことの神アラーの榮光を增さんがためにほとんど全世界を征服したその教徒

カルタゴやハンニバルのことを話して以來、われ〳〵はセム人種のことを何も言はなかつた。君達は覺えてゐるであらう、古代の世界の話をした時には、どの章もどの章も彼等で持ちきりであつたことを。バビロニヤ人、アッシリヤ人、フェニキヤ人、ユダヤ人、アラメイ人、カルデヤ人など、彼等はみんなセム人種であつて、三四千年の間西アジヤの支配者であつた。彼等は東から來た印度歐羅巴人種のペルシヤ人と西から來た印度歐羅巴人種のギリシヤ人とに征服された。アレクサンドル大王の死後一百年には、セム人種のフェニキヤ人の植民市であつたカルタゴが、印度歐羅巴人種のローマ人と地中海の覇權を爭つた。カルタゴが敗北して滅されて、その後八百年の間はローマ人が世界を左右した。ところが、七世紀になつて、別のセム人種が舞臺に現はれて西方の勢力に戰ひを挑んだ。それは

アラビヤ人といふ、開闢以來沙漠をさまよひまはつて天下を爭ふ野心などは毛ほども見せずにゐた平和な遊牧の民であつた。

その時、彼等はマホメットの言ふことに從つて、馬に乘つて、一世紀足らずのうちにヨーロッパの中心にまで突進して、唯一の神アラーと唯一の神の豫言者マホメットとの榮光を恐れをののいてゐるフランスの百姓達に宣べ示した。

アブダラとアミナの子アーメッド（普通にはマホメット、卽ち、讃めたたへられる人として知られてゐる）の物語を讀むと、まるで『千一夜物語』の中の一章のやうな氣がする。彼れはメッカで生れた駱駝追ひであつた。癲癇持であつたらしく、時々魔にさされでもしたやうに夢中になつて變な夢を見たり天使ガブリエルの聲を聞いたりした。このガブリエルのお告げといふのは後に『コーラン』（註。マホメット教の聖典。）といふ書物に書き記された。彼れは隊商の先達をしてゐたので、自然とアラビヤ中を歩きまはつて、絕えずユダヤの商人達やキリスト教徒の商人達と落ち合つた。そして、一人の神を拜むことが非常に立派なことであるのを知るやうになつた。ところが、彼れの國の人達であるアラビヤ人は、何萬年も前に彼等の祖先がやつたと同じやうに、今でもなほ變な恰好をした石や木の幹やを拜んでゐた。彼等の聖都であるメッカには、「カーバ」といふ小さな四角な堂があつて、中には偶像や魔教崇拜の變な遺物が一ぱいはひつてゐた。

マホメット

マホメットはアラビヤ人のモーゼにならうと思つた。が、豫言者であると同時に駱駝追ひであることはうまく行かなかつた。そこで、雇主のカヂヂャといふ富裕な寡婦と結婚して先づ獨立した。そして、メッカの町の人達に向つて、自分は長く待たれた豫言者である、世界を救ふためにアラーから遣されたものであると告げた。町の人達は心底から嘲り笑つて、それでもマホメッットがうるさくその說敎をつゞけてゐるのを見ると彼れを殺さうとした。彼れは氣狂で世間の厄介者である、少しも用捨するには及ばない、かう彼等は思つたのである。マホメットはこのもくろみを聞くと、夜の闇に乘じて、賴みにしてゐた弟子のアブベクルと共にメヂナへ逃げた。これは六二二年のことである。マホメット敎の歷史では非常に大切な年であつて、ヘジラ紀元——畏き遁走の年——として知られてゐる。

メヂナでは、マホメットは誰にも見知られてゐなかつたので、誰も彼もがただの駱駝追ひとしての彼れを知つてゐた故鄕の町でよりも豫言者であると觸れ宣べるのがずつと容易であつた。間もなく彼れのまはりにはめき〳〵と信者の數が殖えて行つて、彼等はみんな、マホメットがあらゆる美德のうちで最高のものとして讃めたたへた「神意に從ふ」といふイスラム敎（卽ちマホメット敎）を受け容れた。七年の間彼れはメヂナの人々に敎を說いた。やがて、彼れは自分がむかし駱駝追ひをしてゐた時分に、彼れと彼れとの神聖な使命とを冷笑した以前の町の人達に對して戰爭をしかけるだけの强味が自分にあるのを知つた。で、メヂナ人の軍隊の先頭に立つて彼れは沙漠を越えて進んで行つた。彼れの

部下は大した困難もなくメッカを占領して、そして若干の住民を殺したあとで、他の者達に何の造作もなくマホメットが本當に大豫言者であることを信じさせた。

この時からずつと死んだ年までマホメットはする事なす事がみんなうまく行つた。

イスラム敎の成功には二つの理由がある。第一には、マホメットが敎徒に敎へた信條がいかにも簡單であつたことである。弟子達の敎へられたのは、先づ、世界の支配者である大慈大悲の神アラーを愛さなければならないこと。親達を敬つてその言ふ事に從はなければならないこと。隣人と取引するのに不正直であつてはならないことと貧乏な者や病人にはやさしく深切にしてやらなければならないこと。そして最後に、酒は飲まないやうに、食べるものはうんとつましくするやうにと命ぜられた。ただそれだけであつた。信者の世話を燒いて公費で扶持されようとしたりするやうな司祭などといふものは一人もなかつた。マホメット敎の敎會卽ち會堂は、ただ大きな石造の廣間であつて椅子もなければ繪畫もなく、信者は（もし氣が向いたならば）いつでもそこに集つて、『コーラン』の中のどの章でも讀んだり話し合つたりすることが出來た。けれども、普通のマホメット敎徒はいつも宗敎を自分と共に持ち歩いて、狹苦しい窮屈な敎會といふ建物の中に閉ぢ込められてゐようとはしなかつた。一日に五回彼れは顏を聖都メッカの方へ向けて簡單な祈りを捧げた。そしてその餘の時間はアラーがいいと思つたやうに世界を支配させて、よしんばどんな羽目に自分が陷らうともぢつと諦めてそれを受けた。

勿論、人生に對するかやうな態度は、信者を鼓舞して、進んで電氣機械を發明したり鐵道や汽船の航路のことで頭をひねつたりはさせなかつた。けれども、これがためにマホメット教徒はみんな或る程度の安心を得た。そしてそれがために自分に對しても自分が住んでゐる世界に對しても安んじた氣持でゐられた。これは非常にいゝ事であつた。

キリスト教徒との戰ひにマホメット教徒が成功した第二の理由は、まことの信仰のために戰場へ出かけて行つたマホメット教徒の兵士達の働きにかかつてゐる。マホメットは、敵前で殪れたものはすぐに天國へ行けるといふ保證をつけた。これがために、この世で長い、が、物憂い生存をしてゐるよりはむしろ戰場で一と思ひに死んだ方が增しだといふ氣を起させた。これがマホメット教徒の方を、暗い未來に絕えず恐れを抱きながら出來るだけ長くこの世の中に執著しようとしてゐた十字軍の兵士達よりずつと優れたものにしたのである。延いてはまた、それが今日でもなほ回教（註。マホメット教のこと。）の兵士達が、なぜ目の前に待つ運命を物ともせずにヨーロッパ人の機關銃の砲火の中へ突進するか、なぜ彼等があゝも危險な頑强な敵であるかといふことをも說明してゐるのである。

自分の宗旨の方のきまりをちやんとつけたあとで、マホメットは今度は多數のアラビヤ人の部族の上に立つて押しも押されもしない支配者としてその權力を揮ひはじめた。けれども、成功したとなると、逆境に在つた時には偉大であつた人々もつい氣の弛むものである。彼れは富裕な人々の機嫌を取

らうとして金持の氣に入るやうな規則を多く作つた。彼れは信者に四人の妻を持つことを許した。が、この古い時代に在つては、花嫁達は親達からぢかに買ふことになつてゐたので、一人の妻でさへ高い元手がかゝつた。況して四人の妻は、大慾張の夢も及ばぬほどの駱駝や乘用駱駝や椰子の畠やを持つてゐるものなら知らず、その他のものにはたしかに贅澤な話であつた。かくして、はじめは空の高い沙漠に暮らす剛健な獵師達を目當にしてゐた宗教も次第に形を變へて、今は都會の盛り場に住むおしやれの商人達の好みに副ふやうになつた。これは本來の趣意から言へば悲しむべき變化であつて、マホメット教のためには少しもならなかつた。一方マホメット自身はどうしたかといふと、彼れは引續いてアラーの眞理を說いたり新らしい道德を宣べ傳へたりしてゐたが、たうとう、六三二年六月七日、熱病に罹つてまつたく不意に死んだ。

回教徒のカリフ（卽ち首領）として彼れの後を嗣いだものは、マホメットとその初期の艱難を共にした舅のアブベクルであつた。二年の後に、アブベクルが死んでオマール・イブン・アルカッタブがその後を承けた。十年も經たないうちに、彼れはエジプト、ペルシヤ、フェニキヤ、シリヤ、パレスチナを征服して、ダマスクスを最初のマホメット教世界帝國の首府とした。

オマールの後は、マホメットの娘ファチマの夫アリが嗣いだ。ところが、回教の教義のことで爭ひが起つてアリは暗殺された。彼れの死後、カリフの位は世襲となつて、一宗派の精神上の首領としてそ

の生涯をはじめた信者の指導者達が廣大な帝國の支配者となつた。彼等はバビロンの廢墟に近く、エウフラテス河の岸邊に新らしい都を建ててそれをバグダードと呼んだ。そしてアラビヤの馬乘達を騎兵聯隊に編成して、回教を信ずることの幸福をすべての不信者に分つてやるために軍を進めた。紀元七〇〇年には、タリクといふ回教軍の大將が昔のハーキュレスの門を越えてヨーロッパ側の高い岩まで達した。そしてその岩を彼れはジベルアルタリク（卽ち、タリクの丘）と呼んだ。今のジブラルタルである。

十一年後に、ヘレス・ド・ラ・フロンテラの戰で彼れは西ゴート族の王を破つた。そこで回教軍は北方へ向つて、ハンニバルが通つた道を辿つてピレネー山の隘路を越えた。そしてアクイタニヤ公がボルドー附近で喰止めようとしたのを破つてパリーを指して進んだ。ところが、七三二年（教祖の死後ちやうど一百年）に、ツールとポアチエーの間の戰で彼等は破られた。實に、その日に、フランク人の酋長チャールス・マルテル（チャールス鐵槌）がヨーロッパを回教徒の手から救つたのである。彼れは回教徒をフランスから逐ひ出したが、しかし、彼等はイスパニヤにその勢力を保つて、やがてアブダルラーマンがそこにコルドヴァのカリフ王朝の基を定めた。そして、このコルドヴァは中世ヨーロッパの學問や藝術の最も大きな中心となつた。

このムーア王國（と呼ばれるのは、人民がモロッコのモーレタニヤから來たからである）は七百年

間つゞいた。コロンブスが發見の航海に上れるやうに王室の許可を得たのは、一四九二年に回教徒の最後の要害であつたグラナダが略取されたそのすぐ後であつた。回教徒は間もなくまたその勢力を盛返して、アジヤとアフリカとで新たに勝利を占めた。そして今日では、マホメット教の信者の數はちやうどキリスト教の信者の數と同じくらゐある。

シャーレマン

フランク人の王シャーレマンが皇帝の稱號を帶ぶるに至つた次第と昔の世界帝國の理想を復活させようとした次第

ポアチエーの戰はヨーロッパを回教徒の手から救つた。けれども、內部の敵は――ローマの警察官がゐなくなつたあとに起つた手もつけられない混亂、といふ敵はまだ殘つてゐた。いかにも北ヨーロッパで新しくキリスト教に歸依したものはローマの大司教に對して深い尊敬の念を抱いてゐた。けれども、この哀れな司教は、遠くの山々の方を眺めたりする毎に、とても安心してなどゐられない氣がした。どんな新手の野蠻人の軍勢が今にもアルプスを越えてローマにまた攻め込んで來ようとしてゐるか分らなかつたからである。で、世界の精神上の頭に取つて、一朝事ある時に進んで大司教の一身を護らうといふ強い劍と力のある拳とを持つてゐる味方を見つけることが必要で――非常に必要であつた。

そこで法王達は、非常に神聖であつたばかりか、一面また非常に世間的でもあつたので、味方はないかと物色して、やがてローマの沒落後、西北ヨーロッパを占領してゐたゲルマニヤ民族の中で一番

賴もしさうなものに言寄つた。それはフランク人と呼ばれてゐた部族であつた。そのはじめのころの王の一人であつたメロヴィスは、四五一年にローマ軍がカタラウヌムの原で、フン族を擊破つた時に加勢したことがあつた。彼れの子孫であるメロヴィンガ朝の人達は、その後帝國の領土を少しづゝ侵略しつゞけてゐたが、たうとう、四八六年には、時の王クロヴィスがローマ人を堂々と打破ることが出來るほどに強くなつたと思ふに至つた。けれども、その子孫は弱い人達だつたので、國事は一切その宰相、卽ち「宮宰」に委してゐた。

有名なチャールス鐵槌の子ピピン短王（註。生れつき短軀で風采が揚らなかつた所から出た渾名。）が父の後を嗣いで宮宰となつた時に、彼れは時の形勢にどう處していゝかに迷つた。主君の王は敬虔な神學者であつて、政治には何の興味をも持つてゐなかつた。ピピンは法王に意見を求めた。法王は實際的の人だつたので、「國家の權力は現にそれを持つてゐる者のものである」と答へた。ピピンは暗示を得た。彼れはメロヴィンガ朝の最後の王チルデリックを說いて修道士にして、そして他のゲルマニヤ族の酋長達の贊成を得て自分が王となつた。けれども、これだけでは老獪なピピンは滿足しなかつた。彼れは蠻族の一酋長より以上の何者かになりたかつた。そこで念の入つた儀式を擧げたが、その式場で、ヨーロッパ西北部の大宣教師ボニフェースが彼れに油を灌いで、彼れを「神の惠みによつて王」とした。この「神の惠みによつて」といふ言葉を戴冠式にすべり込ますのは造作もなかつた。が、それをまた取り出すのにはほとん

ど千五百年もかかつたのである。

ピピンは教會側のこの深切を心からありがたく思つた。そこで、二度までもイタリヤへ兵を出して法王のために敵を防いだ。そしてラヴェンナやその他の幾つかの都市をロンバルヂヤ人から奪ひ取つて法王に獻じた。法王はこれらの新領土を一つにして所謂法王領としたが、それはつい半世紀前まで獨立國としてつづいてゐた。

ピピンの死後は、ローマとエイラシヤペル或ひはニムヴェーゲン或ひはインゲルハイム（フランクの王達はこれと定つた政廳を持たないで、そこからそこへと部下一切の大官小官を引連れて移り歩いた）との間柄はいよ〳〵ます〳〵親しくなつた。そしてつひに、法王と國王とが一歩を進めて、ヨーロッパの歴史に非常に深い影響を及ぼすことになつた。

普通カロロ大帝またはシャーレマンとして知られてゐるチャールスが七六八年にピピンの後を嗣いだ。彼れは東ドイツのサクス族の地を征服して、北ヨーロッパの大半にわたつてあまねく町と修道院とを建てた。アブダルラーマンの敵方の者の願を容れて、彼れはムーア人と戰ふためにイスパニヤへ侵入した。ところが、ピレネー山中で野蠻なバスク族のために襲はれたので餘儀なく退却した。この時のことである、かのブリタニーの大侯ローランが、そのころのフランクの酋長が國王に忠誠であることを誓つた時の意氣を示して、王の軍隊の退却を掩護するために自分の生命と自分の親みにしてゐ

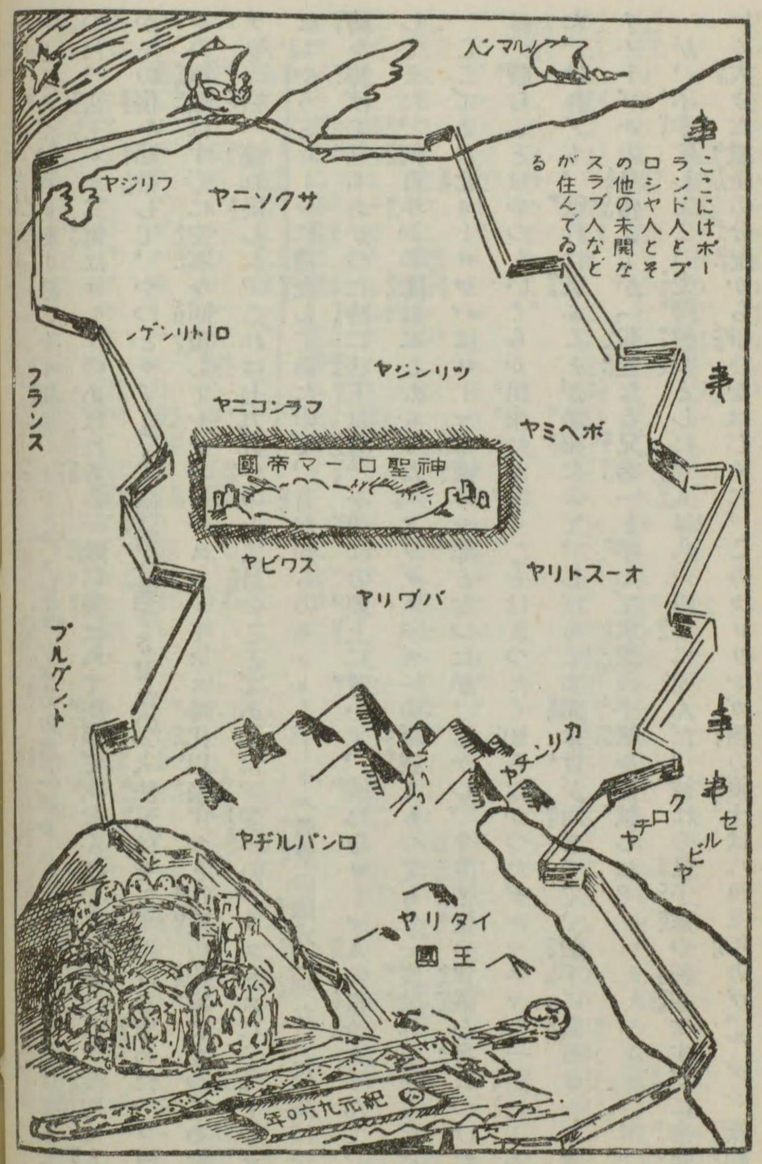
た部下の生命とを捧げたのは。

ところが、八世紀の終の十年間は、チャールスは專ら南方の事にばかり身を入れなければならなかつた。法王レオ三世はローマのあばれ者の一隊に襲はれて街頭で死なんばかりにされた。深切な人達がその傷を繃帶して、やつとチャールスの陣營へ逃げさせたので、法王はそこで助けを求めた。フランクの軍隊はすぐに安寧を回復してレオをコンスタンチヌス時代以來ずつと法王の住家になつてゐたラテラン宮へ連れ戻した。これは七九九年の十二月のことであつた。翌年のクリスマスに、シャーレマンはちやうどローマに滯在してゐたので、昔ながらのセント・ペートル教堂の儀式に列なつた。彼れが祈禱を捧げて立ちあがつた時に法王は冠を彼れの頭上に置いて、彼れをローマ人の皇帝と呼んで、そしてまた、何百年かの間耳にしなかつた「アウグスツス」の稱號でもつてもう一度彼れを呼んだ。

ここでまた北ヨーロッパはローマ帝國の一部となつたが、しかし、今度帝位の尊嚴を身につけたのは、讀むことはやつといくらか出來たが書くことはまつたく知らなかつたゲルマニヤの一酋長であつた。けれども、彼れは戰ふことが出來たので、しばらくの間は世が治まつて、敵手に當るコンスタンチノープルの皇帝までが「親愛なる兄弟」と呼んで承認の手紙を寄越した。

シヤーレマン

が、不幸にしてこの光輝赫奕とした老人は八一四年に死んだ。彼れの息子達や孫達はすぐに帝國といふ大きな遺産の分配から爭ひをはじめた。このカロリンガ朝の領土は八四三年のヴェルダン條約と



ドイツ國民の神聖ローマ帝國

八七〇年のミューズ河畔のメルセン條約とで二度まで分たれた。後の條約は全フランク王國を二つに分つた。チャールス禿王が西の半分を受けた。これには古代ローマの屬領でガリヤと呼ばれた地方が含まれてゐたが、そこでは人民の言葉がまつたくローマ風になつてゐた。フランク人は間もなくこの言葉を話すことを覺えたので、これが、今日、フランスのやうなケルト人とゲルマニヤ人との混つた國で、ラテン系の言葉を使つてゐるといふ奇妙な事實の説明にもなつてゐる。

他の孫が東の半分、ローマ人がゲルマニヤと呼んでゐた地方を得た。これらの荒涼とした地方は一度も古い帝國の領土とはならなかつたところである。アウグスツスがこの「極東」を征服しようとしたことはあつたが、その軍勢が紀元九年にトイトブルグの森で屠殺にされてしまつたので、人民は進んだローマの文明には少しも影響されなかつた。彼等は一般に通用されてゐるゲルマニヤ語で話してゐた。そのゲルマニヤ語で「人民」のことを「ティオット」と言つた。で、キリスト教の司祭達はゲルマニヤ語を、「人民語」といふ意味で、「テオチスカ語」または「トイチスカ語」と呼んだ。この「トイチスカ」といふ言葉が變じて「ドイッチュ」になつて、それが「ドイツチュランド」(ドイツ國)といふ名の起源になつたのである。

一方有名な帝冠はどうなつたかといふに、すぐと間もなくカロリンガ朝の後繼者達の頭からすべり落ちて、イタリヤ平野へ轉げかへつて、そこで幾多の小君主達のおもちや見たいなものになつてゐる

た。その人達は互に多くの血を流し合つて、その帝冠を盜んでは（法王の許しを得たり得なかつたりしながら）かぶつてゐたが、たうとう、或るずつと大きな野心を抱いた者の番に移つた。といふのは、法王が、またもや敵に手痛く惱まされて、助けを北方に求めたからである。けれども、今度は西フランクの國王には賴まなかつた。彼れの使者達はアルプスを越えて、ゲルマニヤのいろんな種族の中で一番えらい酋長として認められてゐたサクソニヤ公オットのところへ話を持つて行つた。

オットはその人民と共にイタリヤ半島の青い空と陽氣な美しい人々とに心を寄せてゐたので、急いで救ひに赴いた。その忠勤の報いとして、法王レオ三世はオットを「皇帝」とした。で、その時以來チャールスの古い王國の東半部が「ドイツ國民の神聖ローマ帝國」として知られるやうになつたのである。

この不思議な政治上の創造物は爾來八百三十九年の大年寄になるまで生き續けた。が、一八〇一年に（ちやうど一新紀元がはじまらうとしてゐた時に）極めて手輕に歷史の屑溜へ捨てられた。この古いゲルマニヤ帝國を叩き潰した亂暴者はコルシカ島の公證人の子と生れて、フランス共和國の爲に華々しい手柄をしたものである。彼れはその有名な近衞聯隊のお蔭でヨーロッパの支配者となつたが、何か尙それ以上のものにならうと思つた。で、ローマ法王を呼びにやつて、そして法王が來るとその立つてゐるそばで、將軍ナポレオンは帝冠を自分で自分の頭に載せて、自分はシャーレマンの傳統を繼ぐものであると宣言した。實に歷史は人生と同じである。物事が變れば變るほどますゝ昔のままである。

ノルマン人

十世紀の人々がノルマン人の狂暴から自分達を守るやうにと主に祈つた所以

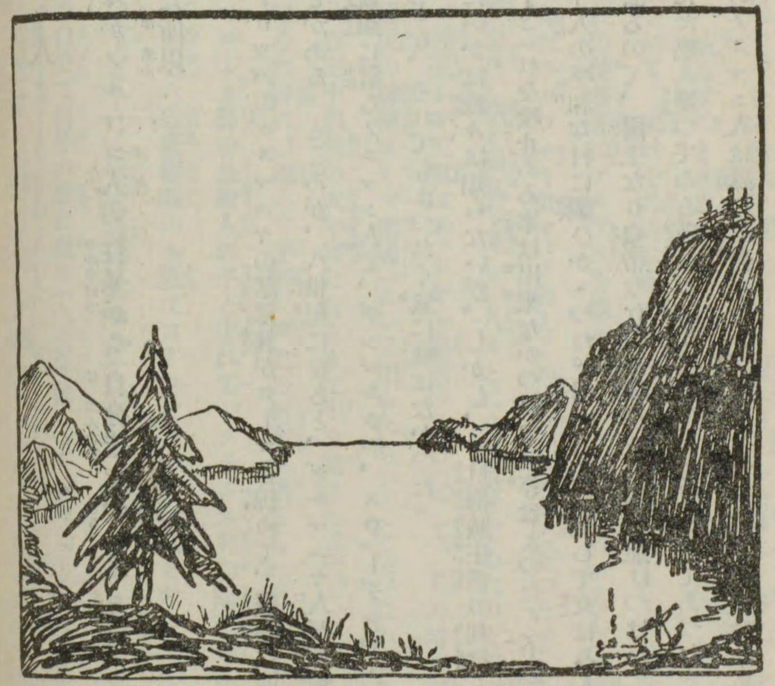
三世紀から四世紀にかけて、中部ヨーロッパのゲルマニヤの諸部族がローマを掠めて、豐饒な地で暮らさうとして帝國の守りを破つたことがある。ところが、八世紀になると、ゲルマニヤ人が掠奪を受ける番になつた。敵は自分達と近い親類に當るノルマン人で、デンマルクや、スウェーデンやノルウェーやに住んでゐた者達であつたけれども、それでもまつたく氣に喰はなかつた。

この勇敢な水夫達が何で海賊になつたのかは我々は知らないが、しかし、一旦海賊生活の利益と愉快とを知つてしまつてからは、もう何人もこれを喰止める事は出來なかつた。彼等はまつたく不意に、ノルマン河口に位してゐるフランク人やフリジイ人の平和な村に襲ひかゝつた。男はみんな殺して女はみんな攫つて行く。そして輕舟に乘つて逃げ去るので、國王なり皇帝なりの軍隊がその場に駈けつけたころには、賊はすでに姿を消してあとにはただ燃え燻つてゐる破壞の跡が殘つてゐるばかりであつた。

シャーレマン死後の混亂時代に、このノルマン人は殊に目覺ましい活動をした。彼等の船隊はあら

ゆる國を襲つて、その水夫達は小さな獨立王國をオランダ、フランス、イギリス、ドイツの沿岸に幾つも建てて、そして更にイタリヤにまで手を延ばした。ノルマン人は非常に怜悧であつた。彼等は間もなくその征服した人民達の言葉を話すことを覺えて、初期の海王達の一面非常に華麗ではあつたがまた非常に下等で恐ろしく殘忍であつた未開の風習を捨てた。

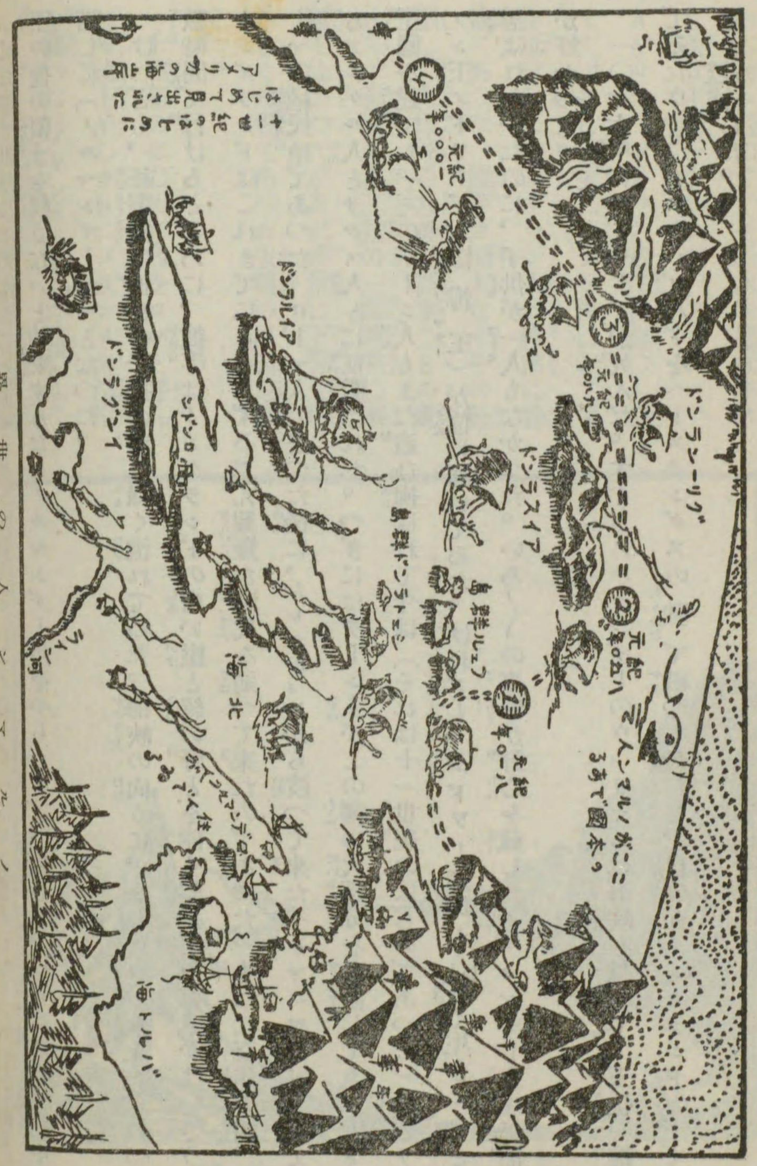
十世紀のはじめに名をロロと呼んだ海賊王がしきりにフランスの海岸を襲つた。フランスの國王は弱くて、とてもこの北方の海賊どもを追ひ拂ふことなど出來なかつたので、賄賂を使つて彼等を「おとなしく」させようとした。で、もし彼等が王の他の領土を侵さないと約束するならノルマンヂー州をやらうと言ひ出した。ロロはこの契約を承諾して「ノルマンヂー公」となつた。



ノルマン人の故郷

けれども、征服慾は彼れの子孫の血に強く流れてゐた。海峽の向うに、ヨーロッパ本土からわづか數時間で行けるところに、彼等はイングランドの白い崖と緑の野とを能く望んでゐた。かはいさうにイングランドはこれまでにもうずるぶん艱難な時代を通つて來たのであつた。先づ二百年の間、ローマの植民地であつた。ローマ人の去つた後に、シレスウィヒから渡つて來たゲルマニヤの二部族であるアングル人とサクス人とに征服された。つぎにはデーン人がこの國の大部分を占領してカヌートの王國を建てた。そのデーン人もまた追ひ拂はれて今は（それは十一世紀のはじめであつた）他のサクソン王エドワード（懺悔王）が位に卽いてゐた。けれども、エドワードはもう長く生きようとは思はれなかつたのに、子供が一人もなかつた。いろ〳〵の事情が野心を藏したノルマンヂー公達に都合が好かつた。

一〇六六年にエドワードが死んだ。すぐとノルマンヂーのウィリヤムは海峽を越えて、王位を繼いでゐたウェセックスのハロルドをヘースチングスの戰で破つて殺して、自分がイングランドの王であると宣言した。


ドンラビーリグ
ドンラスイア
ドンラフランドル
ドンラクマイ
ドンラトニジ
ドンラトニジ
ドンラトニジ

封建制度

中央ヨーロッパが三方から攻撃されたために一個の武裝陣地となつた次第と、封建制度の一部であつた職業軍人や諸侯がなかつたならばヨーロッパは滅びたかも知れなかつたと思はれる所以

ところで、今度述べるのは紀元一千年ごろのヨーロッパの狀態である。當時、多くの人々はいかにも不幸な目にばかり遭つてゐたので、世界の終が近づいて來たといふ豫言を却つて歡迎して、最後の審判の日には御信心をしてゐるところで出會ふやうにしようとして爭つて修道院へ駈け込んだくらゐであつた。

いつの時代とも知れない頃に、ゲルマニヤ民族はアジヤの故鄕を去つて西へ西へとヨーロッパへ移つて來た。ただもう人數の多いだけを力にして彼等はローマ帝國へ無理に蹈み込んで來たのであつた。そして大きな西ローマ帝國を滅したが、しかし、東の帝國は、大移動の本道から外れてゐたので、幸

ひに生き殘つてローマの昔の榮華をかすかながらも傳へて來た。

つづいて來た混亂時代（歷史上の本當の「暗黑時代」で、紀元六、七世紀）に、ゲルマニヤ民族は說き伏せられてキリスト敎の信者となつて、ローマの司敎を法王卽ち世界の精神界の頭として認めた。九世紀に、組織的天才のシャーレマンがローマ帝國を復活させて、西ヨーロッパの大部分を合せて一國とした。十世紀に、この帝國は崩れて割れた。西の方は別の王國フランスとなつた。東の半分はドイツ國民の神聖ローマ帝國として知られて、そして、その聯邦の主權者達は自分達こそケーザルやアウグスツスの嫡流であると僭稱した。

不幸にしてフランスの國王達の權力がその王宮の壕の外へは及ばなかつたのに、一方、神聖ローマ皇帝もまた、その有力な臣下達から彼等の氣の向かなかつた時や利益にならなかつた時にはいつでも公然と無視された。

大多數の人民の艱難は、三角形をした西ヨーロッパが絕えず三方から攻擊されてゐたので一層增した。南方にはいつも危險なマホメット敎徒がゐた。西の海岸はノルマン人のために荒らされた。東方の國境は（カルパチヤ山脈のちよつとした一帶を除いた外は防備がまつたくなかつたので）フン族や、ホンガリヤ人や、スラヴ人や、韃靼人やの群に自由にされた。

ローマの平和は遠い過去の事と、去つて再び歸らぬ「なつかしい昔」の夢となつた。今はもう「戰

ふかしからずんば死ぬか」の問題となつたので、勢ひ人々は戰ふことを選んだ。止むを得ない事情の下に、ヨーロッパは一個の武裝された陣地となつてしまつたので、そこで強い統御の才が必要になつた。國王も皇帝も共に遠く離れ過ぎてゐた。國境に住む人々は（しかも紀元一千年のヨーロッパは大部分が國境同樣であつた）自分達の力に賴らなければならなかつた。彼等はこの僻遠な地方を治めるために派遣された國王の代理者達に、もしその人達が自分達を敵から守つてくれさへすれば、喜んで服從した。

間もなく中央ヨーロッパは小さな諸侯の國で點綴された。これらの小侯國はそれ〴〵その場の事情によつて、或は公、或は伯、或は男、或は司敎の支配の下に、何れも戰爭の一單位として組織されてゐた。そして、これらの公や伯や男やはその盡す忠義と納める一定額の稅との代りに、「封土」（これから「封建」といふ言葉が出て來た）を彼等に與へた國王に忠誠であることを誓つたのだつた。けれども、その時代には旅行は手間がかかるし通信の機關は貧弱であつた。で、國王や皇帝から派遣された役人達はまつたく獨立の思ひをして、自分達の領土のうちでは實は國王に屬してゐる權利をも大抵自分のものとして振舞つた。

しかし、もし君達が十一世紀の人々がかういふ政治組織に反對したと思つたら間違ひである。彼等が封建制度を支持したのは、それが非常に實際的で必要な制度であつたからである。領主がふだん住

んでゐた大きな石造の家は、嶮しい岩の上か深い壕の間かで、しかも臣民達の目につくところに建てられてゐた。で、一朝事ある時には、臣民達は領主の城寨の塀のうしろに避難した。これが臣民達が出來るだけ城の近くに住まはうとした所以であつて、同時にまた、多くのヨーロッパの都市が領主の砦のまはりから發展し出した理由の說明にもなつてゐる。

しかし、中世のはじめのころの騎士は職業軍人よりはずつとすぐれてゐた。彼れはその時代の文官であつた。その社會の裁判官でもあればまた警察の署長でもあつた。追剝共を引捕へて、十一世紀の唯一の商人であつた行商人達の保護にも當つた。また、部落の民を水害に遭はせないやうにしようとして堤防の番をもした。（ちやうど四千年前にナイルの谷で最初の貴族達がしたやうに。）また、方々を經めぐりながら民族移動の大戰爭で戰つた昔の英雄達の物語をして歩いた抒情詩人達を勵ましもした。のみならず、自分の領內にある敎會や修道院を保護して、そして自分は讀むことも書くことも出來なかつたが、（そんな事を知るのは男らしくないと思はれてゐた）多くの修道士を雇つて自分の會計をつけさせたり領內に起つた結婚や出產や死亡やを記させたりした。

十五世紀になつて、國王達は再び勢ひを盛返して、「神に淨められた」身であるから彼等に屬してゐるといふその權力をまた揮ひはじめた。そこで、封建の騎士達は以前の獨立を失つた。鄕士に身分を下げられて、もはや何の役にも立たせられなくなつて、間もなく無用の長物となつた。けれども、もし

この暗黑時代に、「封建制度」がなかつたならば、ヨーロッパは滅びてゐたであらう。騎士達に惡いのも大勢あつたことは、ちやうど今日の世に惡い人々も大勢あると同じである。けれども、一般から言へば、十二三世紀の毛むくぢやらの拳をした領主達は熱心に務めた役人であつて、進歩の上に非常に有用な奉仕をしたのである。この時代には、エジプト人やギリシヤ人やローマ人やの世界を照らしたあの尊い學問藝術の炬火は極めてかすかにしか燃えてゐなかつた。もし騎士達とその良友であつた修道士達とがなかつたならば、文明はまつたく滅びてしまつたであらうし、人類はもう一度また穴居人が濟ましてしまつたところから出直さなければならなかつたであらう。

騎士道

中世の職業戰士達が相互の利益と保護とのために何等かの組織を立てようとして見たのはまつたく自然であつた。この親密な團結の必要から生れたのが卽ち騎士道である。

われ〳〵は騎士道の起源に就いてはほとんど何も知らない。けれども、その制度は發達するにつれて、當時の世界が非常に切實に求めてゐたもの、卽ち、一定の行爲の規範を與へて、それによつて、當時の野蠻な風習を柔らげ、暗黑時代の五百年間よりはずつと世の中を生きがひのあるやうにした。尤も、あらくれた國境の住民達で、マホメット敎徒やフン族や北方人との戰にその時間の大部分を費してゐた者達を敎化するのは容易な業ではなかつた。ともすれば彼等は逆戻りして罪を犯した。朝にありとあらゆる誓を立てて慈悲仁愛を誓ひながら、夕を待たずしてその捕虜を悉く虐殺したりした。けれども、進歩は常に遲々として絕え間のない努力の結果である。つひには最も無法を極めた騎士までがその仲間の規約に從ふか、さもなければその制裁を受けなければならなくなつた。

これらの規約はヨーロッパの場所々々で違つてゐたが、しかし、「奉仕」の精神と「義務に忠實」なことを重んじたことは變りがなかつた。中世紀には人に仕へることを何か非常に氣高い美しい事と思

つてゐた。例へば、自分が善良な下僕であつて職務を怠りさへしなければ、下僕であることは少しも恥ではなかつた。忠義にしてもさうである。多くのいやな義務を忠實に果さなければ生活が出來なかつた時代にあつては、それは武士の第一の美德であつた。

で、若い騎士は神の下僕として、また國王の下僕として、忠誠を渝へないといふ誓をさせられた。その上に自分よりももつと困つてゐる人達のためには決して物惜みをしないことをも約束した。また自分の一身のことでは謙遜に振舞つて、決して自分の功には矜るまいといふことや、苦しみ惱んでゐるすべてのものの（たゞマホメット教徒だけは、見つけ次第に殺すことになつてゐたので、それは除いて）味方にならうといふことをも誓つた。

これらの誓は、たゞ、十誡（註。モーゼが神から受けた十ケ條の誡。）を中世紀の人々にも解るやうな言葉で言ひ現はしただけのものであつたが、それをめぐつて複雜な行儀作法の制度が出來た。騎士達はめい〳〵自分達の生活を、かの抒情詩人達が語つて聞かせたアーサー王の圓卓を取りまいた勇士達やシャーレマンの宮廷に仕へた勇士達やの手本に倣つて立てようとした。彼等はランスロットのやうに勇ましく、ローランのやうに忠義でありたいと思つた。よんばその衣服の仕立は古く、その財布のかさは小さくとも「ことの騎士」と言はれんがためにいつも成儀堂々と振舞つて言葉遣ひも氣をつけて慇懃にした。

かういふ工合で、騎士の階級は社會といふ機械の油ともいふべき良風美俗の學校となつた。騎士道

は禮儀を意味することになつて、領主の城はその餘の社會に對して着る物の選び方や、物の食べ方や、貴婦人にダンスの賴み方や、その他、日常萬端の瑣細なことで生活を面白く氣持よくする役に立つことは何でも敎へた。

が、この世のすべての制度と同じやうに、騎士道もまたその役に立つ時期を通り越すや否や忽ち滅ばなければならなかつた。

十字軍――それに就いては後の章でお話しするが――に次いで商業が大に復活した。都市は一夜にして起つた。町の人々は富裕になつて、良い學校敎師を傭つて間もなく騎士と對等の地位に立つた。火藥が發明されて、重苦しい武裝をした「騎士」は今までの强味をまつたく失つた。そして、傭兵を使ふやうになつたために、將棋を差すやうな優長な仕方で戰爭を指揮することが出來なくなつた。騎士は不用になつた。間もなく彼れは滑稽な姿をしたものになつて、實際にはもう何の値打をも持つてゐない理想を熱心に追つたりした。あの豪俠なマンツアのドン・キホーテこそはまことの騎士の最後のものであつたといはれてゐる。彼れの死んだあとで、その大事にしてゐた劍と甲冑とは彼れの借金を拂ふために賣拂はれた。

ところが、どういふ譯か、その劍は多くの人の手に渡つたらしい。ウォシントンはフォーヂの谷の絕望時代にそれを持つてゐた。ゴルドンがその手に託された人々を見捨てることを拒んで包圍されたカ

ルツームの要塞に死を覺悟して蹈止まつた時に、彼れを護つたものはただこの劍ばかりであつた。

だが、今度の大戰爭で勝利を得るのにそれが絶大の力を發揮したかどうかは、わたしは知らない。

法王と皇帝との對抗

中世の人々の不思議な二重の忠義と、そのために法王と神聖ローマ皇帝との間に果てしのない爭ひの起つた所以

過ぎ去つた時代の人々を理解するのはずゐぶんむづかしいものである。君達が毎日見てゐる君達のおぢいさんでさへ、考へも違へば着物も作法も違ふ世界に住んでゐる不思議な人である。況して、今ここに話さうとしてゐるのは二十五世代も前に隔たつてゐる君達の先祖のことである。わたしが書くことの意味を取るためには、君達は何回も何回もこの章を繰返して讀まなければならないであらう。

中世の普通の人はきはめて單純な、無事な生活をしてゐた。心のままに往き來の出來る自由民でも、めつたに自分の近所から外へは出なかつた。印刷された書物は一冊もなく、ただ寫本がいくらかあつたばかりである。あちらこちらで、幾人づゝかの勤勉な修道士達が讀み書きや多少の算術やを敎へてゐた。けれども、科學や歷史や地理やはギリシャとローマの廢墟の下に埋もれてゐた。

過去の事で人々が知つてゐたのはみんな物語や傳說やを聽いて覺えたのであつた。父から子へと傳はつて行くかういふ知識は、こまかい點ではともすればいくらか間違ふことはあつても、歷史の主要

な事實は驚くほど正確に保存されてゐるものである。二千年以上も經つた今日、印度の母親達はまだ腕白な子供達を嚇かすのに、「イスカンドルが連れて行くよ」と言つてゐる。イスカンドルは外でもない、アレクサンドル大王である。彼れが印度に侵入したのは實に基督降誕前三三〇年であつたが、それ以來その話はずつと今日まで傳はつてゐるのである。

中世初期の人々はローマ史の教科書などは見なかつた。彼等は今日の學生なら豫備校を出る前に誰でも知つてゐるやうな多くの事を何にも知らなかつた。けれども、ローマ帝國は君達に取つては單に名前であるに過ぎないが、彼等に取つては非常に生き〳〵としたものであつた。彼等はそれを感じてゐた。彼等は、法王がローマに住んでローマは權力以上のものであるといふ觀念をその身を以て示してゐたので、喜んで彼れを精神界の首長として認めた。そしてまた、さきにはシャーレマンが、後にはオット大帝が、世界を再び昔あつたやうにしようとして、世界帝國の觀念を復活して神聖ローマ帝國を創めた時には心から感謝した。

けれども、ローマの傳統の繼承者に二人の異つたものがあつたといふ事は中世の忠實な市民達を困難な立場に置いた。中世の政治組織の背後にあつた理論は健全で且つ單純であつた。現世の支配者(卽ち皇帝)が臣民達の物質上の幸福に氣をつけてくれると、一方では精神界の支配者(卽ち法王)が彼等の靈魂を護つてくれるといふのであつた。

ところが、實際には、その制度はうまく行かなかつた。皇帝はいつも教會の事に干渉しようとするし、法王はまた竹箆返しに皇帝に向つて、その領土の治め方をかう〳〵せよなどと言つた。そこで、互に自分の頭の蠅を追へと無禮を極めた言葉で言ひ合つて、その避け難い結果は戰爭であつた。

かういふ事情の下にあつて、人民はどうしたらよかつたか？　善良な基督教徒は法王と國王との双方に從つた。けれども、法王と皇帝とは敵同士であつた。忠良な臣民であると同時に等しく忠良な基督教徒であるためにはどちらに就いたらよいであらうか？

正しい答を與へるのは決して容易なことではなかつた。たま〳〵皇帝が元氣旺盛な人であつて、軍隊を組織するに必要な金の準備が十分にあつた時には、彼れは忽ちアルプスを越えてローマへ進んで、もし必要があれば法王をその宮殿に包圍して、そして無理强ひに法王を皇帝の指圖に從はせるか、さもなければ制裁を受けさせた。

けれども、法王の强かつた場合の方が一層多かつた。さういふ時には皇帝なり國王なりはその臣民全體と共に破門された。さうなるとすべての教會が閉されて、何人も洗禮を受けることが出來ず、死にかけてゐる者も罪の赦しを受けることが出來なくなるのである。――つまり中世政府の機能が半分失くなつてしまふのである。

そればかりではなかつた、人民は自分達の君主に立てた忠義の誓を免除されて、却つて君主に對し

て謀叛することを勸められた。けれども、もし彼等が遠くにゐる法王のこの勸めに從つて、そして捕へられると、近くにゐる領主のために絞罪に處せられたので、これもまた頗る不愉快なことであつた。

實際、この哀れな人民達は困難な立場に置かれてゐたが、中でも、十一世紀の後半の人民達ほどひどい目に遭つたものはなかつた。ちやうどゲルマニヤの皇帝ヘンリー四世と法王グレゴリー七世とが二回勝負の戰爭をして、しかも何事も決することなく、たゞ徒らにほとんど五十年の間ヨーロッパの平和を擾した時に出會つたからである。

これよりさき、十一世紀の中ごろに、敎會に猛烈な改革運動があつた。法王の選擧は、それまでは極めてだらしのないものであつた。神聖ローマ皇帝達に取つては素直な司敎を法王職に就かせておく方が都合がよかつたので、彼等は選擧の時にはたびたびローマへ出かけて行つて、自分達の味方の者のためにその勢力を用ひたりした。

ところが、一〇五九年にこれが變更された。法王ニコラス二世の法令に依つて、ローマ市内外の敎會の重立つた司祭と執事とで所謂樞機院會議が組織されて、この重立つた司祭達の團體に將來の法王を選擧する特權が與へられた。

一〇七三年に、樞機院會議はタスカニイの非常に身分の低い親達の子であるヒルデブランドといふ司祭を法王に選んだ。て、彼れはグレゴリー七世を名告つた。彼れの精力は絕倫だつた。法王廳に無

上な權力があるといふことを彼れは花崗岩のやうな確信と勇氣とを以て信じてゐた。グレゴリーの考へでは、法王は單に基督敎會の絕對首長であるばかりでなく、あらゆる俗界の事においても最高の裁判權を持つてゐるといふのであつた。ゲルマニヤの一諸侯を皇帝の榮位に擧げてやつた法王は、勝手にこれを廢することも出來る。公や王や皇帝やの裁可した法律は法王はこれを否認することが出來るが、法王の法令に異議を唱へたりするものがあれば何人といへども立ちどころに用捨なく所罰するからそのつもりでゐるがいゝといふのであつた。

グレゴリーは使節をヨーロッパぢゆうの宮廷に送つて、ヨーロッパの君主達に彼れの新らしい法律を傳へ、その內容によく留意することを求めた。ウィリヤム勝王は忠順を誓つたが、六歲の時からその臣民と戰つて來たヘンリー四世は、法王の意志に從はうとする考は少しもなかつた。彼れはドイツの司敎會議を召集して、グレゴリーの犯したあらゆる罪をあからさまに數へ立てて、そしてウォルムスの會議で彼れを廢することにした。

法王は破門を以てこれに報いて、且つドイツの諸侯達に向つて此値打のない支配者の下から脫するやうにと要求した。ドイツの諸侯達はヘンリーの束縛から脫せられるのをただよい仕合せに思つて、法王に對してアウグスブルグへ來て新しい皇帝を選ばんとする彼等を援助してくれるやうにと賴んだ。

グレゴリーはローマを立つて北を指して進んだ。ヘンリーは馬鹿ではなかつたので、自分の地位の

危いのに感づいた。どんな犧牲を拂つても法王と和睦しなければならない。しかも、それは一刻の猶豫もならなかつた。で、眞冬の中だといふのに彼れはアルプスを越えて、法王がしばらくの休養のために逗留してゐたカノッサへ急いだ。一〇七七年の一月二十五日から二十八日までの長い三日の間、ヘンリーは、悔改めた巡禮の姿をして、(だが、その修道服の下には暖かなスウェーターを着て)カノッサ城の門の外に待ち盡した。そこで、やつと彼れは中へ入れられてその罪を許された。けれども、この悔改めは長くつゞかなかつた。ヘンリーはドイツへ歸るや否や以前とまつたく同じに振舞つた。再び彼れは破門された。で、再びドイツの司教會議はグレゴリーを廢したが、しかし、今度はヘンリーがアルプスを越えた時には、彼れは大軍の將であつて、進んでローマを圍んで、無理にグレゴリーをサレルノに引退させた。グレゴリーはそこで流竄の身で果てた。が、この最初の大騷亂では何事も定らなかつた。ヘンリーがドイツに歸るや否や、法王と皇帝との爭ひはまた續けられた。

その後間もなくドイツの帝位を手中に收めたホーヘンスタウフェン家はその前代の人々よりももつとずつと獨立心に富んでゐた。グレゴリーは嘗て主張してかう言つた、法王がすべての國王よりも優れてゐるといふのは、最後の審判の日が來た時に、法王こそ一切の「羊の群」の行爲に對して責を負ふべき身であつて、そして神の目から見れば、國王もまたこの忠實な「群」の一人に過ぎないからであると。

ところが、ホーヘンスタウフェン家のフレデリック——普通にはバルバロッサ卽ち赤髯帝として知られてゐる——はそれに反對の主張を唱へて、帝國は「神親ら」自分の先代に授けられたものであつて、そしてその帝國の內にはイタリヤもローマも含んでゐるのであるから、これらの「失はれた領土」は當然北方の國土に合せなければならないと、戰爭をはじめた。赤髯帝は第二回の十字軍の時に小アジヤで過つて溺死したが、その子のフレデリック二世は、少年時代をシシリー島のマホメット敎徒の文明の中で送つて來た才氣煥發の若者であつて、彼れがその戰をつゞけた。法王達は彼れを異端だと言つて罪を鳴らした。實際またフレデリックは北方の粗暴なキリスト敎世界に對して、また野卑なドイツの騎士達や權謀に長けたイタリヤの司祭達に對して心からまじめな輕蔑を抱いてゐたやうである。けれども、彼れは口を噤んで、十字軍を率ゐて行つて、エルサレムを異敎徒の手から奪つて、立派に聖都の王ともなつた。が、かうまでしてもまだ法王達の心を宥めることが出來なかつた。彼等はフレデリックを廢してそのイタリヤの領土を聖ルイとして有名になつたフランスの國王ルイの兄弟であるアンジウ公チャールスに與へた。これがためにまた戰爭が惹き起された。コンラッド五世は、コンラッド四世の子で、ホーヘンスタウフェン家の最後の人であつたが、彼れはその領土を取返さうとして、敗北して、ナポリで首を刎ねられた。けれども、それから二十年經つた後に、シシリーでまつたく人望を墜してしまつたフランス人は、いはゆる「シシリーの祈の夕」(註。一二八三年、夕の祈禱の鐘を相圖に、シシリー人が同島にゐたフランス

人を虐殺)に悉く虐殺されて、そしてその事は終つた。

が、法王達と皇帝達との爭ひは決して收まりはしなかつたが、しかし、そのうちに双方共に互に相手を打遣つて置き出した。

一二七三年に、ハプスブルグ家のルドルフが皇帝に選ばれた。彼れは冠を戴かされにわざ〳〵ローマへ行くことをしなかつた。法王達も反對しなかつたが、その代りに彼等もドイツから遠ざかつた。これで平和にはなつた譯であつたが、しかし、内部の組織のために使へば使へたと思はれるまる二世紀間といふものが、まつたく何にもならない戰爭のうちに空しく過されてしまつたのであつた。

が、どんな惡いことでも誰かの役に立たないことはないものである。イタリヤの小さな諸都市は巧みにその間を立ちまはつて、皇帝達と法王達とが双方損をしてゐる間に自分達の勢力と獨立とを次第に强めて行つた。聖地へ向つての突進がはじまると、これらの諸都市は喧々囂々として渡航を求める數千の熱心な巡禮達の輸送問題を巧みに處理して、そして十字軍の終つた時には、彼等は强い煉瓦の防備と黄金のまもりとを自分達で築きあげて、法王をも皇帝をも等しく冷然と無視することが出來るやうになつてゐた。

教會と國家とが互に爭つてゐるうちに、第三者——中世の都市——が獲物を持つて逃げてしまつたのである。

十字軍

しかし、かういふさま〳〵な爭ひも、一旦トルコ人が聖地を占領して、神聖な場所を瀆したり東西の貿易に容易ならぬ妨害を加へたりすると、すべて忘れられた。ヨーロッパは擧つて聖戰に赴いた。

これまで三世紀の間は、ヨーロッパの關門を守つてゐるイスパニアと東ローマ帝國との二ケ國だけは除いてその外のところでは、キリスト教徒と回教徒との間は平和であつた。回教徒は七世紀にシリヤを征服して聖地(註。西パレスチナ、特にユダヤを指す。)を掌中に收めてゐた。けれども、イエスを偉大な豫言者(よしんばマホメットと同じほどには偉大でないにしても)と認めてゐたので、コンスタンチヌス皇帝の母であるセント・ヘレナが聖墓のところに建てた教會に參拜しようとして來る巡禮達の邪魔は少しもしなかつた。ところが、十一世紀のはじめごろに、アジヤの曠野から來たセルジュック・トルコ人と呼ばれた韃靼の一部族が西アジヤの回教國の支配者となるに及んで、異教默認の時代は終つた。トルコ人は小

アジヤ全部を東ローマ皇帝から奪ひ取つて、そして東西の貿易を途絶えさせた。

皇帝アレクシウスは、これまで西方のキリスト教徒の事など滅多に思つて見たことすらなかつたのだが、援を求めて、もしトルコ人がコンスタンチノープルを占領したならばヨーロッパも危險に脅かされるであらうと言つた。

小アジヤやパレスチナの沿岸に植民市を建てゐたイタリヤの諸都市もまた、その領地のことを氣遣つて、トルコ人の狂暴とキリスト教徒の遭難とに就いての恐ろしい噂を傳へた。ヨーロッパ全體は激昂した。

時の法王ウルバン二世は、ランスから來たフランス人で、グレゴリー七世を仕立てあげた有名なクルニイの修道院でやはり教育された人だつたが、乘ずべき時こそ來たと考へた。當時、ヨーロッパの一般の狀態はとても滿足どころではなかつた。そのころの農業の仕方は幼稚な（ローマ時代からかはらなかつた）もので、食物はいつも不足してゐた。失業と飢餓とは到るところにあつて、さういふことから、ともすると不滿の聲や暴動が起り易かつた。ところが、西アジヤは、むかし數百萬の人々を養つたところである。移住地として絶好なところである。

そこで、一〇九五年に開かれたフランスのクレルモンの會議で、法王は起つて、邪教徒が聖地に加へた恐ろしい事の數々を述べ、モーゼの時代このかた乳と蜂蜜との溢れ漲つてゐるこの國の狀態を熱

烈な調子で說いて、フランスの騎士をはじめヨーロッパの一般の民衆に、妻子を捨ててパレスチナをトルコ人の手から救ひ出すやうにと說き勸めた。

大浪のやうな宗教的興奮がさつと大陸の上を洗つて過ぎた。一切の理性が失はれた。人々は槌や鋸を捨てて、仕事場から飛び出して、一番近い道を束に取つてトルコ人を殺しに出かけた。子供達は子供達で、「パレスチナへ行く」と言つて家を出た。彼等は恐ろしいトルコ人を、自分達の若い熱情と基督教徒の敬虔な心とでもつて說き落して、降參させようと思つたのである。が、かういふ熱狂した人達の九分通りは聖地の見えるところまですら行くことが出來なかつた。彼等は金を持つてゐなかつた。生命をつなぐためには乞食をするか、さもなければ盜まなければならなかつた。で、勢ひ往來の安全を脅かすことになつたので、地方の人達が怒つて殺してしまつた。

第一回の十字軍は正直な基督教徒や借金を拂はない破產者や貧乏な貴族や逃亡罪人などから成立つた亂暴な烏合の衆で、半氣違ひのペートル隱者と文なしワルテルとが先導のあとについて進みながら、邪教徒征伐の手はじめに、途で行き逢ふユダヤ人を片つぱしから虐殺した。彼等はホンガリヤまで行つて、そこでみんな殺された。

この經驗で教會は一つの教訓を得た。熱狂だけでは聖地は取戻せない。熱心や勇氣と共に組織が伴はなければならないといふことである。そこで一年を費して、二十萬の軍隊を訓練して出征の準備を

第一回十字軍

させた。そして、ブイヨンのゴッドフリード、ノルマンヂー公ロバート、フランドル伯ロバート、及び多くの他の貴族達で、みんな戰術に長けてゐる人達に指揮を執らせた。

一〇九六年にこの第二回の十字軍はその長い征途にのぼつた。コンスタンチノープルで騎士達は皇帝に臣下となる誓の禮をした。（といふのは、前にすでに話したやうに、傳統といふものは中々滅びないもので、ローマ皇帝といへば、いかに貧しく無力であつても、やはり非常に尊敬されてゐたからである。）それからアジヤへ渡つて、行く〳〵手に落ちた回教徒をみんな殺して、エルサレムを襲擊して、回教徒の住民を虐殺して、そして聖墓のところまで進んで行つて敬虔と滿足との涙にくれながら讃美と感謝とを捧げた。ところが、間もなくトルコ軍は新手の軍勢を得て勢ひを盛返した。そこで、彼等はエルサレ

ムを取返してあべこべに忠實な十字架の信徒を殺した。

つぎの二世紀の間に、更に七回の十字軍が起つた。だん〳〵十字軍士達は遠征のこつをのみこんだ。陸路を行くのはいかにも面倒な上に危險もまた多かつた。彼等はアルプスを越えてジェノアかヴェニスへ行つて、そこから船で東へ向ふことにした。ジェノア人とヴェニス人とはこの地中海航行の旅客輸送を非常によい儲け仕事にした。彼等は法外な船賃を要求して、そして十字軍士達が（その大多數は非常に少ししか金を持つてゐなかつたので）その金を拂ふことが出來なかつた時には、このイタリヤの「暴利屋達」は同情して、働きながら行けるやうにしてやつた。ヴェニスからアクルまで渡る船賃のかはりとして、その十字軍士は乘つた船の持主のために定められただけの戰ひをするといふ約束をして行つたのである。かくしてヴェニスはアドリヤ海の沿岸やギリシヤやキプルス、クリート、ローヅスの諸島やに大に領土を增した。ギリシヤではアテネがヴェニスの植民市となつた。

けれども、かういふことはみんな聖地の問題を解決する上には何の役にも立たなかつた。最初の熱狂が消え失せてしまつてからも、短期間の十字軍旅行は育ちのよいすべての青年の高等普通教育の一部となつてゐたので、パレスチナ出征の志願者に事缺くやうなことは少しもなかつた。けれども、當初の熱情は消え果ててゐた。十字軍士達は、はじめは回教徒に對する深い憎みと東ローマ帝國やアルメニヤのキリスト教徒に對する強い愛とから戰爭を起したのであつたが、今はすつかり氣持が變つて

ゐた。彼等は、自分達を欺いて十字架の味方をしば〳〵裏切つたりしたビザンチウムのギリシヤ人をはじめとして、アルメニヤ人やその他の地中海東岸の人のすべてを輕蔑するやうになつて、そして反對に、敵の方が寛大で堂々とした相手であることが分つたので、その人達の美德に感心しはじめた。

勿論、これを公然と口に出して言はうとなどしなかつた。けれども、十字軍士は故鄕に歸ると、異教の敵から覺えて來た風習をまねる風があつた。この異教の敵に比べて見ると、西方の普通の騎士はまだ〳〵ずつと田舍の田吾作だつたからである。十字軍士はまた、桃だのはうれん草だのといふやうな新らしい食料品を幾いろも持ち歸つて、それを自分の畠に植ゑて自家用のために大きくしたりした。彼れはまた一としよひもある重い甲冑を身につける野蠻な風習を棄てて、マホメット教徒の傳來の衣服であつてトルコ人がもとから着てゐた絹や木綿のすらりとした法衣を着はじめた。かうして、かつては異教徒に對する膺懲の遠征としてはじまつた十字軍が、今は實に、何百萬といふ若いヨーロッパ人のために文明の一般知識を與へる一つの課程となつたのである。

軍事上や政事上から見れば十字軍は失敗であつた。エルサレムをはじめとして多くの都市は取返された。十二三の小さな王國をシリヤやパレスチナや小アジアに打建てたが、それをもまたトルコ人に征服しかへされて、一二四四年（エルサレムがたしかにトルコのものとなつた時）以後は、聖地の狀態は一〇九五年以前とまつたく同じになつた。

けれども、ヨーロッパはたいへんな變化を受けた。西方の人々は東方の光と日光と美とを一と目見て來たのである。彼等の陰氣な城ではもう彼等は滿足しなかつた。もつと廣々とした生活を望んだ。教會も國家も共にこれを與へることが出來なかつた。

彼等はそれを都市に見出した。

中世の都市

中世の人々が「都市の空氣は自由な空氣である」と言つた所以

中世のはじめのころは開拓と移住との時代であつた。これまでローマ帝國の東北の國境の守りをなしてゐた荒涼とした森林や山や沼地の外に住んでゐた新らしい一民族が、西ヨーロッパの平原に無理やり侵入して來て、大部分の土地を占領した。が、彼等もまた、開闢以來のすべての開拓者がさうであつたやうに、落ちついてはゐなかつた。いつも「動いて」ゐるのを好んだ。森林を伐り倒したり、同じ元氣で互に首を斬り合つたりした。ほとんど誰もが都市に住まうとなどしなかつた。彼等はどこまでも「自由」であることを望んだ。牛馬の群を追つて風の吹く牧場をむかうへ行く時などに山腹の新鮮な空氣が肺に一ぱいになる氣持を好んだ。彼等は古い住家がいやになると、すぐに棒杭を引き拔いて、また新らしい冒險の途に就いた。

弱い者は死んだ。豪膽な戰士とその男達について荒野の中へ入り込んで行つた勇氣のある女達とだけが生き殘つた。かうして彼等はしだいに強い人種となつて行つた。彼等は人生の優美な方面にはほ

とんど氣を留めなかつた。提琴を彈いたり詩句を書いたりしてゐる暇などなかつたのである。彼等は議論をもほとんど好まなかつた。村の「學者」である司祭が、(十三世紀の中ごろまでは、俗人で讀み書きの出來るものは「鈍物」だと思はれてゐた) 直接に實際の値打のない問題はみんな解決するものとされてゐた。そのうちに、ゲルマニヤの酋長だの、フランクの男爵だの、ノルマンの公爵だのといふやうなものが所在に起つて、嘗て大ローマ帝國の一部であつた領土を勝手に分け取つて、過去の榮華の廢墟の中にめい〳〵自分の氣に入つた世界を建てて、そしてそれを全く完全なものと思つてゐた。

彼等は自分の城とその周圍の地方との事は全力を盡して處理した。教會の誡律を忠實に守つたことは、いかに弱い人間でもこれ以上は望まれまいと思はれるほどだつた。國王なり皇帝なりには十分に忠義を表して、それらの遠くにゐながらしかも常に危險な君主達との折合をよくしてゐた。要するに、彼等は他人に對して正しくし公平にしようと力めた代りに自分達の事をもまた決して不公平にされないやうにしたのである。

が、理想的な世界に彼等が住んでゐた譯ではなかつた。當時、人民の大部分は農奴、卽ち、農場人夫であつて、彼等は牛や羊とまつたく同じやうにその住んでゐる土地の一部となつて小舍をも牛や羊と共にしてゐた。彼等の運命は特に幸福ではなかつたが、と言つて特に不幸でもなかつた。だつて、どうしやうがあらう？　中世の世界を支配してゐた善い神は勿論萬事を最もよいやうに定めておいた

に違ひない。もし神が、その神慮で、世の中には騎士と農奴とが共になければならないと定めたのであつたなら、それをとやかう言ふのは教會の忠實な子等の道ではない。といふので、農奴は不平は言はなかつたが、しかし、あまりひどく追ひ使はれると、適度に食物や小舍を與へられない家畜と同じやうに死んでしまつたりする。と、そこで、彼等の境遇をよくしてやらうと急いで何か手段が講じられる。けれども、もし世界の進歩が農奴とその領主とに委されてゐたとしたら、われ〳〵は今でも十二世紀のやうなくらしをしてゐて、齒の痛むのを止めようとするのに、「アブラカダブラ」と禁呪を唱へたりして、齒醫者がその「學問」で癒してくれようと言ふのを頭からさげすみ憎むことだらう。「學問」は大抵マホメット教徒卽ち異教徒から起つて來たものだつたので、從つて邪惡な無用なものとされてゐたからである。

今に君達が大人になると、「進歩」といふことを信じない人達に澤山出つくはすだらう。その人達はわれ〳〵と同時代の或人々の恐ろしい行爲を擧げて、「世界が變らない」のはこれこの通りだと君達に證明するであらう。けれども、わたしは君達がさういふ話にはあまり氣を留めないやうにして貰ひたいのだ。知つての通り、われ〳〵の先祖達が後脚で歩くことを覺えるのにはほとんど百萬年もかかつたのである。また、あの動物のやうなぶう〳〵聲が發達して意味の分る言葉になるまでには更に何世紀かが經過しなければならなかつたのである。字を書くことが――われ〳〵の考へを後々の時代のた

めに保存しておく術で、それがなければ何の進歩も出來ないのだが――發明されたのも僅に四千年以前である。自然の力を變じて人間の從順な下僕にするといふ考は君達の祖父の時代にはまだまつたく新らしいものであつた。して見れば、われ〳〵は曾て聞いたこともないほどの速さで進歩をしてゐるやうにわたしには思はれる。或ひは、われ〳〵は、多少、人生の物質的快樂に過ぎないものにばかり氣を留め過ぎた嫌ひがあるかも知れない。が、それは時が進めば變るであらう。そしてその時には、われ〳〵は健康だの賃銀だの鉛管敷設だの機械だのといふものとは關係のない問題に取りかゝるであらう。

が、しかし、「なつかしい昔」のことを思つて、あまりめそ〳〵なんかしてくれたまふな。中世が殘して行つた美しい教會や偉大な藝術品などばかり見てゐる多くの人達は、むやみに雄辯を揮つて、現代の醜い文明がそのあわただしさと騷々しさと後から火を噴く貨物自動車の惡臭などをいつも伴なつてゐるのを一千年前の都市とよく比較する。けれども、これらの中世の教會はいつもきまつてあはれなあばらやに取りかこまれてゐたもので、そのあばらやに比べれば、今日の共同長屋はまるで贅澤な宮殿でもあるやうに立ちまさつてゐる。いかにも、かの氣高いランスロットや、同じく氣高いパルシファルといふ、かの聖杯を搜しに出かけた純潔な若い勇士やは、ガソリンの臭に惱まされはしなかつた。けれども、そこには納屋庭の雜多な物の臭や、往來に投げ出された殘物の腐れかゝつてゐる臭

や、司教の御殿のまはりにある豚小屋の臭や、着物や帽子は祖父の代から傳へ古して、そして石鹼の難有味はまつたく知らなかつた穢苦しい人々の臭やがあつた。わたしはあまり不愉快な光景を描かうとは思はない。けれども、君達が古い年代記で、御殿の窓から外を眺めてゐたフランスの國王が、パリーの街で食を搜すために鼻で土を掘つてゐる豚の群の發する惡臭で氣絕したことを讀んだり、また、古い寫本にペストなり天然痘なりの流行したことがいくらか巨細に渉つて書いてあるのを見たりすれば、その時こそ君達もはじめて「進歩」が强ち今日の廣告屋連中に使はれる合言葉だけのものではないことを理解するだらう。

否、この最後の六百年間の進歩は、都市が存在しなかつたならば或ひはなかつたかも知れないのである。であるから、わたしはこの章を他の多くの章よりも少し長くしなければならぬであらう。事がいかにも重要であるから、三ページや四ページに縮めたりして單に政治上の事件ばかりを書く譯に行かないからである。

エジプトやバビロニヤやアッシリヤの古代世界は都市の世界であつた。ギリシャは都市國家の國であつた。フェニキヤの歷史はシドンとチルスといふ二つの都市の歷史であつた。ローマ帝國は一つの町の「背負つてゐる國」であつた。書くことも、美術も、科學も、天文學も、建築も、文學も、劇場も——擧げて來ればはてしがないが——みんな都市の產物であつた。

ほとんど四千年の間はわれ〳〵が町と呼んでゐる木造の蜂の巢が世界の仕事場であつた。そのうちに、ゲルマニヤ民族の大移動がやつて來た。ローマ帝國は滅された。都市はみんな燒き拂はれてヨーロッパは再びもとの牧場と小さな農村との國になつた。暗黑時代の間、文明の野は耕されずにおかれてゐた。

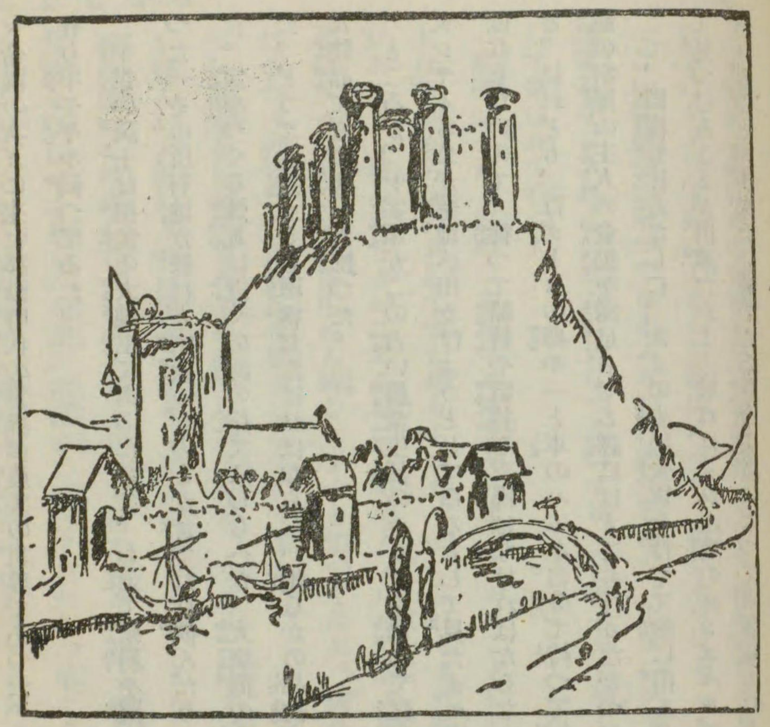
十字軍が土地をならして新たに收穫を得ようとした。やがて收穫の時は來たが、作物は自由都市の市民達に引つたくられた。

わたしは先きに、重い石の垣をめぐらした城と修道院との——人間の肉體と靈魂とをそれ〴〵守つてゐた騎士と修道士との住居の話をした。で、君達も知つての通り、少數の職人達が（肉屋やパン屋や時々燭臺造りになつたりする者やが）城の近くに來て住んで、領主の御用を足してそして危險な時には保護して貰つてゐた。時には領主がさういふ人達にその家のまはりに柵を結ふことを許したこともある。けれども、彼等は御城主さまの好意に縋つてその生計を立ててゐた。で、城主が出歩いたりする時にはその前に跪いて、その手に接吻した。

そのうちに十字軍が起つて多くの事が變つた。これより先き、大移動の時に人々は東北から西の方へ追はれて來てゐた。ところが、今度は十字軍が何百萬といふ人々を西から文化の高い東南の地方へ旅行させたのである。そこで、彼等は、世界は自分達の小さな居住地の四壁に依つて限られてゐなか

つたことを發見した。そして、これまでよりももつと良い着物だの、もつと住み心地のよい家だの、新らしい御馳走だのと言つたやうな、不思議な氣のする東洋の産物を喜び好むやうになつた。故郷に歸つて來てから後も、彼等はそれらの品々を欲しがつた。で、荷を背負ひ歩いてゐた行商人――暗黑時代の唯一の商人――がこれらの品物を在來の商品に加へて、荷馬車を買つて、十字軍士のなれの果てを幾人か傭つて、この大きな國際戰爭のあとの恐ろしく物騷な世間から自分の身を護らせながら、もつとずつと近代的な大規模な商賣をしに出かけた。が、この渡世も生やさしいものではなかつた。城主の違つた領地へはひる毎に通行稅と租稅とを拂はなければならなかつた。けれども、商賣はそれでもなほ儲かつたので行商人はまはり歩くのを止めなかつた。

間もなく根氣のいゝ幾人かの商人が、これまで遠くから輸入してゐた商品がうちで造れることを發見した。彼等は自分の家の一部を變へて工場にした。彼等は商人でなくなつて製造人となつた。そして、その製作品を城主や修道院長に賣つたばかりでなく、附近の町々へも送り出した。城主や修道院長は自分達の田畑の作物や、卵だの葡萄酒だのや、そのころ砂糖の代りに用ひられてゐた蜂蜜などでその支拂をした。けれども、遠くの町々の市民達は現金で支拂はなければならなかつたので、製造人や商人ははじめて小さな金貨を持つことになつた。そして、この金貨のために中世初期の社會における彼等の地位がすつかり變つて來た。



君達に取つてお金のない世界を想像するのはむづかしい。近代の都市ではお金がなければとても暮して行くことが出來ない。一日ぢゆう、君達はポケットに一ぱい小さな丸い平たい金屬を持ち歩いて、「途々拂つてゆく」のである。新聞を買ふにしろ、汽車なり電車なりに乘るにしろ、晝飯を食べるにしろ、銅貨か、白銅か、銀貨か、金貨かが要るのである。ところが、中世初期の多くの人達は生れた時から死ぬ日まで鑄造したお金など一つも見なかつたのである。ギリシヤやローマの金銀貨はその諸都市の廢墟の下に埋もれてゐた。ロー

城と町

マ帝國の次ぎに來た移動時代の世界は農業の世界であつた。百姓はめい〳〵自分が使ふだけの穀物を作り羊や牛を飼つてゐた。

中世の騎士は田舍の大地主であつたので、お金で原料を買はなければならないことなど滅多になかつた。その所有地が彼れと家族のものとが食つたり飲んだり着たりするだけのものはみんな產出した。家をつくる煉瓦は近くの河の岸でこしらへた。大廣間の垂木にする木は領地の森から伐つて來た。どうでも遠くから取寄せなければならない幾らかの品物は、蜂蜜とか、卵とか、薪とかいふやうな物品でその代を支拂つた。

ところが、十字軍がこの古い農業生活のきまりを極めて猛烈にくつがへしたのである。例へばヒルデシャイム公が聖地へ出かけようとしてゐるとして見たまへ。彼れは數千マイルを旅して行かなければならないので、從つて船賃や宿賃を支拂はなければならない。うちでならば田畑の作物で支拂へる。けれども、百ダースの卵や一と車のハムを自分で持つて行つてヴェニスの回漕問屋やブレンネル越の宿屋の主人の貪慾を滿足させる譯にはとても行かなかつた。これらの連中は現金を要求した。そこで、殿樣も仕方なしに、かさの少い金貨を持つて旅に出ることにした。ところで、この金貨はどこで見つけることが出來たか？　彼れはそれを昔のロンゴバルヂヤ人の子孫であるロンバルヂヤ人から借りることが出來た。そのころ貸金業者になつて兩替臺のむかうに坐つてゐたロンバルヂヤ人は、喜

んで殿樣に幾百かの金貨を用立てたが、その代りに殿樣の地所を抵當に取つて、もし殿樣がトルコ人の手にかゝつて死にでもした時にはそれで償ひを受けることにした。

これは借手に取つてはあぶない仕事であつた。しまひの果てには、ロンバルヂヤ人がきまつてその地所を手に入れて、文なしになつた騎士は、自分よりも強くて用心深い仲間のもののところへ軍人として傭はれて行つた。

殿樣はまた、町のうちでユダヤ人を住ましておくことにしてあるところへ行つてもよかつた。そこでは五割か六割の利息で金が借りられた。が、これもまた割の惡いことだつた。と言つてどうしやうがある？　城を取りまいてゐる小さな町の人々の中に金を持つてゐるものがあるといふ噂があつた。その人々は若い城主を生れる時からずつと知つてゐた。彼れの父親と彼等の父親達とは仲のいゝ友達だつた。彼等ならば無茶な要求はしないであらう。うまいぞ、といふので、殿樣の執事で、字を書いたり勘定をしたりする事の出來る修道士が、中でも一等名の知れた商人達に手紙をやつて少しの融通を賴んだ。町の人達は附近の敎會で使ふ聖餐杯を拵へたりしてゐる寶石商の仕事部屋に集つてこの要求に就いて相談した。うまく斷る譯にも行かなかつた。「利息」を求めるのも駄目な氣がした。第一、利息を取るのは多くの人達の宗敎心に反してゐたし、第二に、農產物で支拂つて貰ふ外はなかつたが、さういふものは人々にも澤山あつて有りあまつてゐた。

「しかし、」と毎日テーブルに向つて靜かに日を暮してゐる何處か哲學者めいたところのある仕立屋が言ひ出した。「われ〳〵がお金を用立ててあげる代りに何かお許しを受けたらどうだらう。われ〳〵はみんな釣が好きだ。ところが、殿樣はわれ〳〵に小川で釣らせない。われ〳〵が百ダカット融通してあげる代りに、御領内のどこの河ででもわれ〳〵が欲しいだけ釣つてい、といふ誓文を一通書いて貰ふことにしたらどうだらう。さうすれば、殿樣は入用なお金が手にはひるし、われ〳〵は魚が取れるのだから、双方共に儲かるだらう。」

殿樣がこの提案を（こんなにも容易く百ダカットの金貨が得られるものかと思つて）容れた日こそは、實は自分の權力を削ぎ取る命令を承認したのである。先づ、彼れの執事が契約書を作つた。殿樣は自分の印を（といふのは、自分の名前が書けなかつたから）書いて、そして東方へ出かけて行つた。二年後に、彼れはさん〴〵に敗れて歸つて來た。町の者達がお城の池で釣をしてゐた。この釣魚者達が默つて並んでゐるのを見ると殿樣はいやな氣がした。で、厩番の者に言ひつけてその者共を追拂はせた。釣魚者達は出て行つたが、その晩、商人達の代表者がお城へやつて來た。彼等は非常に慇懃であつた。先づ殿樣の無事の御歸着を祝した。そして殿樣が釣魚者達のためにいやな思ひをなされたのはお氣の毒であるが、しかし、殿樣は釣をしてよろしいといふお許しを御自身で出されたことをよもやお忘れではあるまいと言つて、城主が聖地へ出かけて行つた時からずつと寶石商の金庫の中に

しまつておいた特許狀を仕立屋が出して見せた。

殿樣はいよ〳〵いやな氣がした。けれども、またもや彼れはどうでも金がなければならないことになつてゐた。イタリヤで彼れが署名した何枚かの證書が、今は、有名な銀行家であるメヂチのサルヴェストロの手にはひつてゐるのである。これらの證書は「約束手形」であつて、日附から二ヶ月以内に支拂ふことになつてゐた。その總額はフランドル金貨で三百四十磅にのぼつた。かういふ事情があるので、さすがの騎士もその高慢な胸に一ぱいになつた憤りを現はすことが出來なかつた。それどころか、却つてまた借金を言ひ出した。商人達は引きさがつて相談した。

三日後に、彼等は戻つて來て「承知しました」と言つた。が、かう言ひ添へた。御領主さまの御難儀をお救ひすることの出來るのはわれ〳〵に取つて身に餘る仕合せであるが、しかし、三百四十磅のお金の代りにもう一つの契約を、――それは、町の者達が自分達の委員會を設けて、委員は町の商人と自由市民とで選擧していゝといふ、つまり、町の事は一切御城主の方からは干渉されずにその委員會で定めていゝといふ、もう一つの特許狀を書いて頂けますまいか、と。

殿樣は心から怒つた。けれども、またもや金が入用になつてゐた。で、「可し」と言つて、特許狀に署名した。が、次ぎの週になると後悔した。彼れは兵を率ゐて寶石商の家へ行つて、狡猾な人民共がのつぴきならぬ事情の下にあつた自分から瞞し取つた證書をみんな返せと言つた。そしてそれを取

り返して燒き棄てた。町の人達はそばで見てゐて何も言はなかつた。ところが、つぎに殿樣が娘の嫁入道具を買ふのに金が要つた時には、ただの一錢も手に入れることが出來なかつた。あの寶石商の家での事件があつて以來、彼れの信用はなくなつたのである。仕方なしに彼れはまつたく下手に出て何なり償ひをするからと言ひ出した。で、殿樣が約束の金の第一回の拂込をも受けない前に、町の人達は再び以前の特許狀をみんな取つた上に更に出來立ての新證文で、「市公會堂」と堅固な塔とを建てることを許したものを手に入れた。塔には特許狀をみんなしまつておいて火災や盜難に遭はないやうにするといふのであつたが、それが、實は、城主やその武裝した部下の者らに、この先き無理にまた奪ひ返されまいとしたのであることはいふまでもなかつた。

これが、ごく一般に言つて、十字軍のあとの數世紀の間に起つた狀態である。この城から都市へだん〳〵勢力が移つた經過は、まことに遲々としたものだつた。戰爭も少しはあつた。仕立屋や寶石商の幾人か殺されたところもあれば城が煙になつたところも多少はあつた。けれども、さういふ事が普通ではなかつた。ほとんど氣も附かないうちに町々はまた〳〵富裕になつて領主達はまた〳〵貧しくなつたのである。で、體面を保つためには彼等は絕えず市民に自由を許す特許狀を與へてその代りに現金を得るやうにしなければならなかつた。都市はまた〳〵大きくなつた。のみならず、逃げて來た農奴をかくまつてやつたりしたので、その人達も何年間か市の城壁のうしろに住んでゐてから自由を

得た。かくして都市はその周圍の地方の、わけても元氣旺盛な人達の住家となるに至つた。そこで自分の新らしい地位を誇つて、その勢力を示すために敎會や公共の建物を古い市場のまはりに建てた。その市場は、實に何世紀か前には卵や羊や蜂蜜や鹽などの物々交換が行はれたところである。彼等はまた子供達には、自分達が經て來たよりももつと樂しい思ひをこの世でさせたいと思つた。そこで、修道士を町へ傭つて來て學校の敎師になつて貰つた。板に繪を書くことの出來る人があると聞くと、彼等はその人に、手當を出すから町へ來て禮拜堂や公會堂の壁に聖書の中の場面を描いてくれないかと賴んだ。

一方では殿樣が、お城の陰氣な吹きさらしの大廣間で、この成上り者の華美なさまを目にしながら、自分が君主としての權利や特權の中のただ一つをはじめて讓渡した日のことを思つて後悔してゐたけれども、どうしようもなかつた。町の人達は一ぱいはひつた金箱を抱へて彼れを見くびつてゐた。彼等は今は自由の民であつて、その額の汗で、しかも十世代以上にもわたつた爭ひの後にやつと手に入れたものを守つて行く力を十分に備へてゐた。

2,30,

○中世の自治

都市の人民がその權利を主張して王の諮問會に出席するやうになつた次第

人民が「遊牧の民」、卽ち水草を追うて移り歩いてゐた羊飼の部族であつた間は、人々はみんな平等で、めい〳〵がその團體全部の安寧に對して責任を持つてゐた。

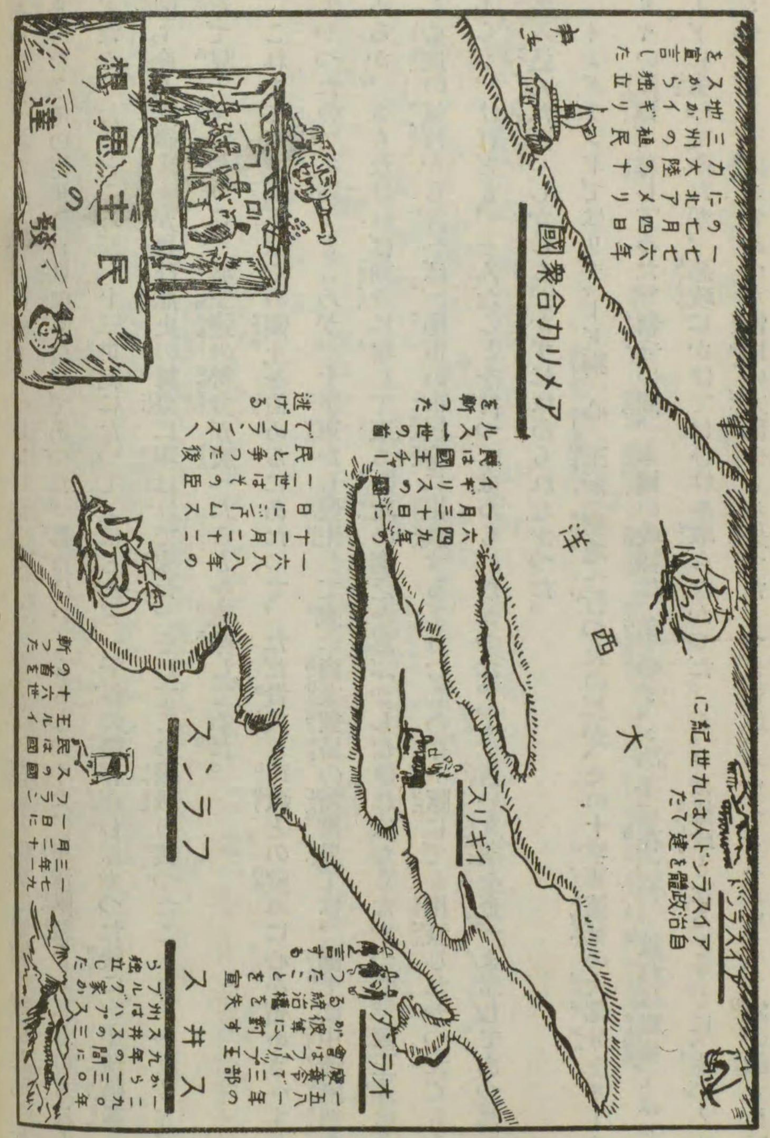
ところが、一定の地に落ちついて或者は金持となり或者は貧乏となつてからは、政權はやゝともすれば生活のために働かなければならないといふことのない、從つて政治に一身を委ねることの出來る人々の手に落ち易くなつた。

わたしはすでにこれがエジプトやメソポタミヤやギリシヤやローマで起つたことは君達に話した。西ヨーロッパのゲルマニヤ民族の間でもまた秩序が回復するや否やそれが起つた。西ヨーロッパの世界を支配してゐたものは、先づ第一には皇帝であつたが、しかしこの皇帝は、ゲルマニヤ民族の老大なローマ帝國の内で最も有力な七八人の國王達に依つて選ばれたので、從つて、その權利は想像の上では非常に大きかつたが實際の上では非常に小さかつた。で、實際に支配してゐたのは若干の國王達で

あつたが、彼等の王位も始終ぐらついてゐた。で、その日〳〵の實際の政權は無數の封建諸侯の手にあつた。その臣民は百姓卽ち農奴であつた。都市はいくらもなかつた。中流階級といふものもほとんどなかつた。ところが、十三世紀になつて（ほとんど一千年の間存在しなかつた後に）中流階級——卽ち商人階級——が再び歷史の舞臺に現はれて來た。そしてこの階級の興つたことは、われ〳〵が前章で見て來たやうに、城主達の勢力が衰へたことを意味してゐた。

これまでは、國王はその領土を治めるにあたつて、ただ貴族と司敎との望みに心を留めさへすればよかつたのである。ところが、十字軍から發生して來た商業貿易の新世界では、國王は中流階級を認めるか、さもなければ刻々に增して來る財政の窮乏を忍ぶかしなければならなかつた。國王達は（もし心底の氣持から言へば）都市の市民達に相談するよりむしろ牛や豚にでも相談したかつたくらゐであらう。けれども、そんなことを言つてはゐられなかつた。で、苦い丸藥を金がまぶしてあつたのを呑み込んだが、しかしもがかずにはゐられなかつた。

イングランドではリチャード獅心王が（聖地へ行つたのだが、その十字軍遠征の大部分をオーストリヤの監獄で暮してゐた）留守の間、本國の政權は弟のジョンの手に在つた。彼れは戰術ではリチャードに劣つてゐたが、惡政にかけてはひけを取らなかつた。ジョンは攝政となるとすぐに、先づノルマンヂーとフランスにあつた領地の大部分とを失つた。つぎには、ホウヘンスタウフェン家の敵として有



名な法王インノセント三世と爭ひを起した。法王はジョンを破門した。（ちやうど二世紀前にグレゴリー七世が皇帝ヘンリー四世を破門したやうに。）一二一三年にジョンは不名譽な講和をしなければならなかつたが、それもまた丁度ヘンリー四世が一〇七七年にしなければならなかつたのと同じであつた。

この不成功にも懲りないで、ジョンはなほも續けてその王權を濫用したので、たうとう從臣達は不平を起して、主君を囚人同樣の身とした上で、以後は善政を行つて二度と再び臣民の古來の權利を蹂躙したりしないやうにすることを誓はせた。これはみんなラニミード村に近いテームス河の小さな島で起つたことで、時は一二一五年六月十五日であつた。かうして、ジョンがその名を署した證書こそは實に大憲章（Magna Carta）と呼ばれるものである。が、これには新らしいことはほとんど含まれてゐなかつた。たゞ國王の古來の義務を簡單明瞭な言葉に言ひかへたり從臣達の特權を列擧したりしただけであつた。大多數の人民、卽ち農民の權利には（もしあるとすれば）少しも留意しなかつたが、しかし、新興の商人階級には多少の保障を與へてゐた。しかも、これが非常に重要な意義を持つた特許狀になつた所以は、これほど精確に國王の權限を定めたものが今まで曾てなかつたからである。けれども、これはまだ〳〵純然たる中世の證書であつた。一般の人間に就いては、たま〳〵彼等が從臣の所有物であつて、ちやうど男爵領の木や牛が王の林務官達の過度の取立から保護されてゐたやうに、王の暴虐から保護されなければならない場合の外は、何も規定されてゐなかつた。

ところが、それから數年の後には、王の諮問會に非常に違つた調子が聞えはじめた。

ジョンは、もと〳〵生れも性癖も惡かつたので、大憲章に從ふことを嚴かに誓つておきながら、やがてその多くの個條のどれをもこれをも破つた。が、幸ひに、彼れは間もなく死んだので、その子のヘンリー三世が後を繼いで、改めて大憲章を認めさせられた。そのうちに、十字軍に出征した伯父のリチャードが國に巨額の失費をかけてゐたので、王はユダヤ人の金貸し達にその債務を果すために若干の公債を募らなければならなくなつた。ところが、王の顧問官をしてゐた大地主達や司教達はその必要な金額を王に用立てることが出來なかつた。そこで、王は命令を發して、都市々々からも數名の代表者を王の諮問會の會議に出席させることにした。この代表者達は一二六五年にはじめて出席した。彼等は財政上の專門家としてのみ勤めて、一般の國政の論議には參與せずに、ただ租稅の問題にだけ專ら意見を述べるものと想はれてゐた。

ところが、だん〳〵と、これらの「平民」の代表者達は多くの問題に就いて諮問されるやうになつて、そしてこの貴族、司教及び都市の代表者の會合は發達して正式の國會（註。parliament といふ言葉は "Ou l'on parlait" (話し合ふところ)といふフランス語から來たものである。）卽ち重要な國家の政務が決定される前に人民が集つて話し合ふところとなつた。

けれども、かういふ多少の執行權を持つた全般的の諮問機關はイギリスの發明のやうに一般には信じられてゐるらしいが、さうではない。「國王とその國會」とで行ふ政治も決してイギリスにのみ限られたものではなかつた。君達はヨーロッパの到るところでそれを見出すだらう。或る國々では、たとへばフランスのやうに、中世以後に王權が急に增大して、「國會」の勢力がまつたく無くなつてしまつたところもある。一三〇二年に都市の代表者達はフランス國會の會議に列することを許されたが、しかし、この「國會」が中流階級、卽ちいはゆる第三階級（註。革命前のフランス平民のこと。）の權利を主張して國王の權力を打破するだけの力を備へるまでには五世紀の時日を經ねばならなかつた。が、その時になつて彼等は失つた時日を取返して、フランス革命の間は、國王、僧侶及び貴族を廢して平民の代表者達を國の支配者とした。イスパニヤでは「議會」（王の諮問會）が夙に十二世紀の前半から平民に開放されてゐた。ドイツ帝國では、いくつかの重要な都市が「帝國都市」の地位を得てゐて、その代表者達は必ず帝國議會に列席することになつてゐた。

スカンヂナヴィヤ人の國では、代議政治の話が殊に面白い。スウェーデンでは、一三五九年にはじめて國會が開かれた時から人民の代表者が出席してゐた。デンマルクでは、「デーンホーフ」といふ昔の國民議會が一三一四年に再興されて以來、貴族が幾度か國王や人民を無視して國家を支配したことはあつたが、都市の代表者がその權力をまつたく奪はれたことはなかつた。

アイスランドでは、島内の政務を處理してゐた「アルシング」といふ全自由地主會議が九世紀には

じめて正規の會合を開いてから一千年以上もそれをつゞけてゐる。

スキスでは、各州の自由民が幾多の封建諸侯の襲撃に對抗しながら固く自分達の會議を守つて首尾よく成功した。

最後に、オランダでは、各公領や各州の諸問會に第三階級の代表者が夙に十三世紀から出席してゐた。十六世紀にはこれらの小さな諸州が一團となつて國王に叛き、「三部會」の嚴かな會議で國王の統治から脱することを誓つて、僧侶を會議から除外し、貴族の權力を挫いて、新たに建てたネーデルランド七州聯合共和國の完全な行政權を握つた。二世紀の間、市會の代表者達は國王もなければ司教も貴族もなしに國を支配した。都市が最上權を有するものとなつて市民が國の支配者となつたのである。

中世の世界

中世の人々は自分達が住んでゐた世界を何と考へたか

「年代」といふものはまことに調法なものである。われ〳〵はそれがなければどうすることも出來なかつたのだが、と言つて、よくよく注意してゐないと、とんだぺてんにかけられないものでもない。「年代」はやゝともすれば歴史を窮屈なものにする嫌ひがある。たとへば、今、わたしが中世人の見方に就いて話すにしても、何も四七六年の十二月三十一日に、不意にヨーロッパぢうの人が、「あゝ、今、ローマ帝國が滅びたのでわれ〳〵は中世に住んでゐる。なんと面白いではないか！」と言つたといふ譯ではない。

君達はシャーレマンのフランク宮廷で、その習慣なり、その作法なり、人生の見方なりがローマ人と同じであつた人々を見ることが出來る。が、また一方では、君達が今に大人になれば、今日の世界の人々の中にもまだ穴居人の域を一歩も脱しないものがあるのを見出すだらう。あらゆる時代は時代と折重なつて、つぎ〳〵に來る時代の思想は思想とつながつてゐるのである。けれども、中世の眞の代表者の大多數のものの心持を研究して、そして、人生と生きて行く上の多くの困難な問題とに對する

普通人の態度がどんなものであつたかを君達に知らせることは出來る。

まづ第一に記憶してゐて貰ひたいのは、中世の人々が自分達を生れながらにして自由な市民、卽ち、行くも歸るも心のままで、自分達の運命は自分達の才能なり根氣なり運なりで、どうにでも作つて行くことが出來るものであるなどとは決して考へなかつたといふことである。却つて反對に、彼等はみんな自分達を、豫て設計した通りに置かれた事物の一部であつて、その中には皇帝も農奴も、法王も異敎徒も、英雄も僞英雄も、富める者も、貧しい者も、乞食も泥棒も含まれてゐるものと思つてゐた。彼等はこの神の命令を承認して何の疑をも起さなかつた。この點において、勿論、彼等は今日の人々が何者をも承認せずに、永久に自分の經濟上や政治上の地位をよくしようとしてゐるのとは根本的に異つてゐるのである。

十三世紀の男女に取つては、來世は――驚くべき歡喜に滿ちた天國と刼火や苦惱やに滿ちた地獄とは――決して空虛な言葉や漠とした神學上の辭句などではなかつた。それはたしかな事實であつた。で、中世の市民や騎士はその生涯の大部分を來世へ行く準備のために費した。われわれ近代人は、一生を善く暮したあとで立派に死んで行くことを、昔のギリシヤ人やローマ人と同じやうな落ちついた靜かな氣持で考へる。六十年の間せつせと働いたあとで、何もかもよくなるだらうといつた氣持で眠りに就くのである。

ところが、中世の間は、齒をむきだした頭蓋骨とがた〳〵鳴る骨とで出來てゐる死神がいつも人間に附きまとつてゐた。彼れは死人達をその搔き鳴らす提琴の恐ろしい音色で呼び覺ましたり――彼等と共に食卓に就いたり――彼等が少女を連れて散歩に出たりすると樹蔭や藪蔭などからにや〳〵しながら見てゐたりした。たとへば君達にしても、ずつと子供の時分に、アンデルゼンやグリムのお伽噺を聞く代りに墓場だの棺桶だの恐ろしい病氣だのの身の毛もよだつやうな噺ばかり聞かされてゐたとしたら、やはり、死ぬ時の事や恐ろしい審判の日の事やを考へてびく〳〵しながら一生涯を送ることであらう。中世の子供達にはそれがちやうどさうだつたのである。彼等は惡魔や幽靈ばかりで天使はたまにしかゐない世界へ移つて行つたのである。時には、この來世の恐ろしさから彼等の心が謙遜になり敬虔になつたこともあつたが、しかしさうならないで、殘忍な感傷的な氣持になつたこともしばしばだつた。彼等は先づ第一に占領した都市の女や子供をみんな虐殺してから、しを〳〵と聖壇へ進んで行つて、無辜の者の血で塗れた手でもつて、慈悲深き天にその罪の赦しを祈るのであつた。否、祈るばかりではなかつた。彼等は傷ましい涙を流して泣いて、極惡の罪人であると自ら懺悔するのであつた。けれども、つぎの日になると、彼等はまたもや心に一點のなさけもなくサラセン人の陣營を屠るのであつた。

勿論、十字軍士は騎士だつたので、普通人とはいくらか違つた道德に從つてゐた。けれども、かう

いふ點では普通人もその主人とまつたく同じであつた。彼れもまた臆病な馬に似てゐて、影や下らぬ紙片などに容易くおびやかされたり、あつぱれ忠實な勤めも出來るが、ふと熱病じみた想像で幽靈を見でもすると忽ち逃げ出して恐ろしい損害を與へたりするといふ風だつた。

けれども、かういふ善良な人々を批判するには、彼等が恐ろしく不利益な狀態の下に住んでゐたことを記憶してゐなければいけない。彼等は實は文明人のやうな姿をしてゐた野蠻人であつた。シャーレマンやオット大帝は「ローマ皇帝」と呼ばれてゐたが、しかし彼等が眞のローマ皇帝（たとへばアウグスツスやマルクス・アウレリウスのやうな）と似ても似つかなかつたことは、ちやうど王は王でも、今日上のコンゴーのウンバ・ウンバがスウェーデンやデンマルクの教養の高い支配者達と似ても似つかぬのと同じであつた。彼等は野蠻人であつて、榮華の址にこそ住んではゐたが、文明の恩惠には、彼等の父や祖父がすでにそれを破壞してしまつてゐたので與からなかつた。彼等は何も知らなかつた。今日なら十二歲の少年が知つてゐるやうなことをもほとんどまつたく知らなかつた。彼等はたゞ一冊の書物に就いてあらゆる知識を求めなければならなかつた。それは聖書であつた。けれども、聖書の中で人類の歷史によい影響を與へたところといへば、ただ新約全書の中の愛と仁慈と許容との道德的教訓をわれ〳〵に教へる章だけである。天文學や動物學や植物學や幾何學やその他一切の科學の入門書としては、この尊い書物もまつたく纏むに足らない。十二世紀になつて、第二の書物が中世の文庫

に加へられた。それはキリスト降誕前四世紀のギリシャの哲學者アリストートルが編纂した有用な知識の大百科辭典であつた。なぜキリスト教會が一方で他のギリシャの哲學者達を異端の教義を說くものとして責め咎めながら、アレクサンドル大王の教師だけをかやうに優遇することになつたのであらうか、わたしも實は知らないのである。が、とにかく聖書について、アリストートルが唯一の信賴すべき教師として認められて、その著書は安心してまことのキリスト教徒の手に渡せるものとされたのである。

彼れの著書はやゝ迂回してヨーロッパに達したのであつた。それはギリシャからアレクサンドリヤへ行つた。そこで、七世紀にエジプトを征服したマホメット教徒の手でギリシャ語からアラビヤ語に翻譯された。そして回教徒の軍隊に附いてイスパニヤへ渡つて、その哲學がコルドヴァのムーア人の大學で教へられた。アラビヤ語の原文が、そこで、遠くピレネー山を越えて高等教育を受けに來てゐたキリスト教徒の學生達の手でラテン語に翻譯されて、かくして、この有名な書物の諸所方々を經めぐつて來た譯文が、たうとう西北ヨーロッパの各學校で教へられるやうになつたのである。それはあまりはつきりは分らなかつたが、それがために却つてます〳〵興味があつた。

そこで、今度は、聖書とアリストートルとの助けを藉りて、中世の最も才智のある人達が天地間の一切の事を神の意志の現れと關係させて說明しようとしはじめた。これらの才智のある人達は、卽ち、

煩瑣哲學者と言はれる人達であつて、實際また非常に聰明でもあつたのだが、彼等はその知識を專ら書物からのみ求めて、決して實際の觀察から得ようとはしなかつた。で、もし蝶鮫なり毛蟲なりのことを講義しようとした時には、彼等は舊新約全書とアリストートルとを讀んで、それらの書物の中に書かれてある毛蟲と蝶鮫とに關する一切の事を學生達に話すのであつた。ぢきそばの川へすら蝶鮫を捕りに出かけて行きはしなかつた。書齋を出て裏庭へ行つて、幾匹かの毛蟲を捕つたり、それらの動物をその本來の住處にゐるまゝで見たり研究したりはしなかつた。かの有名なアルベルツス・マグヌスやトマス・アクイナスのやうな學者でさへ、パレスチナの蝶鮫やマケドニアの毛蟲が西ヨーロッパの蝶鮫や毛蟲と違つてゐやしないかどうかを調べもしなかつた。

時たまロージャー・ベーコンのやうな途方もない變り者が學者の會議に出席して、擴大鏡や可笑しな小さい望遠鏡で實驗をはじめたり、また實際に蝶鮫や毛蟲を講義室に持込んで、舊約全書やアリストートルに書いてあるものとはちがつてゐることを證明したりすると、煩瑣哲學者達はその勿體ぶつた頭を振つた。ベーコンは進み過ぎてゐたのである。彼れが大膽にも實際の觀察を一時間することはアリストートルを十年讀むよりもつとねうちがあると言つたり、この有名なギリシャ人の著書も、これまでのやうな利益の與へ方ならむしろ翻譯されずにゐた方がよかつたと言つたりした時には、煩瑣哲學者達は警察へ行つて言つた。「あの男は國家の安寧を害するものである。ギリシャ語を學んでアリス

トートルを原語で讀むやうにしろとわれ〳〵に言つてゐる。なぜあの男は數百年の間わが忠實な人達が滿足して來たアラビヤ語からラテン語に譯した書物で滿足しないのだらう？　なぜあの男は魚の腹の中や蟲の腹の中のことなどをあんなに知りたがるのか？　あの男は多分惡い魔法使で、ちやんとしてゐる物事のきまりを惡い魔法で引つくり返さうとしてゐるのだらう。」と、いかにも仔細らしく彼等が訴へ出たので、驚いた保安掛のものはベーコンにたゞの一字をも書くことを禁じて十年以上に及んだ。で、彼れが再びその研究をはじめた時にはうまい事を一つ覺えてゐた。それは書物を書くのに妙な符號を使つて同時代の者にはどうしても讀むことが出來ないやうにしたことである。かういふずるい手段が考へ出されて來ると、敎會はます〳〵必死になつて疑惑や不信に導くやうな事を人々に訊かせまいとした。

けれども、これは人々を無智のままにしておかうといふ惡い心からなされたのではなかつた。當時の異敎探求者を見まもつてゐた氣持は實際非常に深切なものであつた。彼等はこの世が次ぎの世の本當の生活にはひる準備に過ぎないといふことをかたく信じて——といふよりも、むしろ知つてゐた。知識が多過ぎると人々を不愉快にしたり、その心を危險な考へで一ぱいにしたり、つひには疑惑を抱かせて、延いては地獄に墮ちて行かせるやうになつたりすると信じてゐた。中世の煩瑣哲學者がその弟子の誰かが聖書やアリストートルの神聖な敎から離れて自分で物事を研究しようとするのを見て不

愉快な氣持がしたのは、ちやうど、やさしい母親が自分の小さな子供が熱いストーヴに近づいて行くのを見る時のやうなものであつた。子供がもしそれにさはらうものなら小さな指をやけどすることが分つてゐるので、母親はそれを引きとめようとする。もし必要ならば暴力をも用ひるだらう。けれども、ほんたうは子供を愛してゐるので、すなほに從ひさへすれば出來るだけやさしくしてやるだらう。それと同じやうに、中世の人々の靈魂の保護者達は、一方で信仰に關した一切の事に嚴格であつた代りに、教會員の爲になるやうにと出來るかぎりの力を盡して日夜骨折つた。彼等は折さへあれば救ひの手を差しのべたので、當時の社會を見ると、普通人の運命を出來るだけ堪へ易いものにしようとした數千の善良な男と敬虔な女との感化がよく現はれてゐる。

たとへば、農奴は農奴であつてその身分は決して變らなかつた。けれども、中世の善い神樣は農奴を一生奴隷としておいたと同時に、不滅の靈魂をこの卑しいものにも與へてゐたので、彼れは當然の權利として保護されて、善良なキリスト教徒として生きもし死んでも行けるやうにして貰はなければならなかつた。で、彼れが年老いてなり弱くなつてなり働けなくなつた時には、それまで彼れを働かしてゐた領主がその世話を見なければならなかつた。であるから、農奴は單調な味氣ない生活はしてゐたが、決して明日の心配などで煩はされることはなかつた。彼れは自分が「安全」であることを——即ち、解雇される筈もなければ、いつも屋根の下に（多分、雨の漏るやうな屋根であつたらうが、

でも、屋根には屋根だつた）住んでゐられて、いつも何か知ら食べるものをも持つてゐられることを知つてゐた。

この「安定」と「安全」との氣持は社會のあらゆる階級に見出された。都市では商人達や職人達が同業組合を設けて各組合員に一定の收入を保證するやうにした。で、野心のある者にも仲間の者よりうまくやつてやらうといふやうな氣を起させることはなかつた。尤も、ともすればその組合がずるけようとしてゐる「なまけ者」を保護することになつた場合はあつた。けれども、それが勞働階級の間に與へた滿足と大丈夫と言つた氣持は、今日の自由競爭の世の中ではとても見られない。中世にもわれ〳〵近代人が「買占」と呼んでゐる——即ち、一人の金持が儲かりさうな穀物なり石鹼なり鹽鰊なりをすつかり一手に握つておいて、そして世間の者に、その人の言ひ値で買はなければならなくするといふ危險はよくあつた。で、官憲は大規模の取引を禁じて、値段をも調節して、その値で商人達に彼等の品物を賣らせるやうにした。

中世は競爭を嫌つた。なぜつて、今や審判の日が近づいて、その時になれば富は何の足しにもならず、農奴でも善良なものは天國の黃金の門をはひれるのに、騎士でも惡いものは地獄のどん底に墮ちて罪滅しのために苦行をしなければならないといふのに、徒らに競爭などして、この世であわてたりいがみ合つたり押し合ひへし合ひしたりしてゐられようないではないか？

要するに、中世の人々は思想と行動との自由の一部を棄てて、肉體の貧しさと心の貧しさとから來るもつと大きな安全を樂しむやうにしろと言はれたのである。

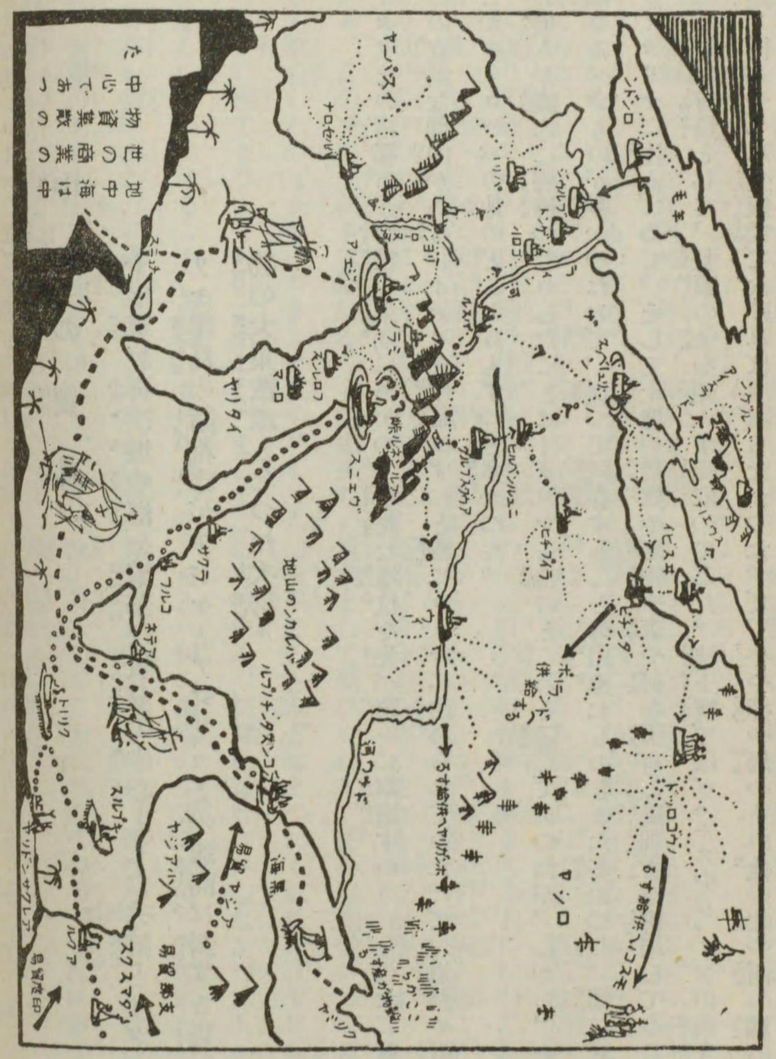
そして極めて僅かな例外の外は、彼等は反對しなかつた。自分達はただこの遊星に立ち寄つただけのもので――ここにゐるのはもつと大きなもつと重要な生活にはひる準備をするためであるとかたく信じてゐた。わざと彼等はその背を惱みや不德や不正に充ちてゐる世界に向けた。彼等は鎧戸を締めて、太陽の光線のために自分達の注意を、永遠につゞく自分達の幸福を照らすことになつてゐる天國の光に就いて語つてゐた默示錄のその章から轉ぜしめられまいとした。彼等は自分達が現に住んでゐるこの世の喜びの大部分には目をふさいで、近い將來に自分達を待つてゐる喜びを享けようとしたのである。この世の生活をば避けることの出來ない災禍として受けいれて、死をば光榮の日のはじまりとして歡迎したのである。ギリシヤ人やローマ人は未來のことなどはまつたく氣にかけずに天國をばこの地上に建てようとしたのであつた。そしてこの世の中を、奴隷になりさへしなかつた人々には極めて樂しいものにすることに成功したのであつた。そこへ別の極端の中世が來て、人間は自分で天國を一等高い雲のあなたに建てて、この世をば高いものにも低いものにも、富めるものにも貧しいものにも、智慧のあるものにも愚なものにも、等しく涙の谷としてしまつたのである。今度は振子が別の方向へ搖れ戻つて來る時であつた。それはつぎの章で話すとしよう。

中世の貿易

十字軍が再び地中海を繁華な貿易の中心とした次第とイタリヤ半島の諸都市がアジヤとアフリカとの通商に對する貨物の大集散地となつた次第

イタリヤの諸都市が中世の末期にあたつて樞要な地位を先づ第一に取返すやうになつたに就いては三つの立派な理由がある。イタリヤ半島はずつと昔にローマに治められてゐた。で、道路や町や學校などがヨーロッパの他のどこよりもずつと多かつた。

野蠻人が盛んに燒拂つたりしたことはイタリヤも他のところと同じであつたが、しかし、そこには破壞さるべきものが多かつたので、從つて殘存することの出來たものもまた多かつた。第二には、法王がイタリヤに住んでゐて、そして土地や農奴や建物や森や河を所有し裁判所を管理してゐる尨大な政治機關の首長として、巨額の金を絕えず受取つてゐた。法王廳ではヴェニスやジェノアの商人達や船主達と同じやうに金銀貨でなければ受取らなかつた。で、牛や卵や馬やその他の北や西の國の農產物


シンドン
ロ
モキ
シガルン
ジャンクション
イビスキ
ピキング
ポロ
ジンバ
ロ
ヤシロ
ペキン
ロロウ
ジャンクション
ペルシヤ
ペルシヤ
ペルシヤ

ければならなかつた。

十四世紀の末ごろには、人口は二十萬にのぼつてヴェニスは中世の最も大きな都となつた。が、人民は政治の上には何の勢力もなく、政治は少數の富裕な商人達の私事となつてゐた。彼等は元老院と總督とを選んだが、しかし、町の實際の支配者は有名な十人會の議員達であつた。——彼等の下には、その手足となつて働いた探偵と刺客との祕密團體があつて、常に市民全體の上に目を配つて、もしこの壓制で無法な公安委員會の安全に危險を及ぼしさうなものがあればそつとそれを取除いた。

これとは別の極端の政治は、卽ち非常に混亂を極めた民主政治は、フロレンスにおいて行はれた。この町は北ヨーロッパからローマへ通ずる大道にあたつてゐたので、この地の利を占めたところから集めた金を工業に投じてゐた。フロレンス人はアテネの例にならはうとした。貴族も、技師も、同業組合員もみんなが市政の議に與つた。これがために市は大混亂に陷つた。人民はいつも政治上の黨派黨派に分れてゐて、そしてこれらの黨派は常に互に烈しく相爭つて、ある黨派が市會で勝利を得るや否や忽ち反對派のものを追放してその財產を沒收した。幾世紀かかうした群民黨の支配の後に、當然の事が起つた。ある有力な一家が自ら立つて町の首長となつて、ちやうど昔のギリシャの「僭主」のやうに町と周圍の地方とを治めたのである。それはメヂチ家と言つた。一等はじめの主人は醫者であつたが、(メヂクスといふのが醫者といふラテン語なので、この家名はそこから來たのであつた)後の人達は銀行家になつた。この一家の銀行と質屋とは重なる商業の中心地にはどこにでも見出された。今日でもなほわれ〳〵は質屋が三つの金の球を出してゐるのを見るが、これは、昔フロレンスの支配者となつて、娘達をフランスの國王のところへ嫁入らせたり、また、ローマ皇帝にでもふさはしいやうな墓に葬られたりした偉大なメヂチ家の紋章の一部だつたのである。

つぎには、ヴェニスの大なる敵手であつたジェノアがある。この地の商人達は專らアフリカのチュニスや黑海の穀物倉庫と取引してゐた。その外にまだ二百以上の都市があつて、或るものは大きく或るものは小さかつたが、いづれも商業上には完全に獨立して、それらのすべてが互に利益を奪ひ合ふ仲間同士のものに決して消えることのない憎みを抱きながら仲間や競爭者と爭つてゐた。

東洋やアフリカの產物は一旦これらの集散地に持つて來られた上で、西や北へ送られなければならなかつた。

ジェノアはその貨物を水路によつてマルセイユへ送つた。と、そこから貨物は再び船積されてローヌ河に沿つた都市々々へ送られた。と、今度はそれらの都市が北フランスや西フランスの市場としての役をした。

ヴェニスは陸路によつて北ヨーロッパへ送つた。この當時の路は、昔、蠻族がイタリヤへ侵入して來た時の門戶であつたブレンネル越を越えて行くのであつた。そして、インスブルックを經て商品はバー

ゼルへ運ばれた。そこからライン河を船で下つて北海からイングランドへ行くか、さもなければアウグスブルグへ運ばれて、そこからフッガア家（銀行家であると同時に製造業者であつた）の手で更にまたニュルンベルヒやライプチヒやバルト海の諸都市やゴトランド島のキスビイへ送られた。キスビイは北バルト海の需用に應じたり、ノヴゴロド共和國と直接に取引したりした。ノヴゴロドは當時のロシヤの商業の中心地であつたが、後、十六世紀の中頃になつてイワン雷帝ののために滅された。

西北ヨーロッパの沿岸の小さな町々に就いては面白い物語がある。中世の人々は魚を澤山食べた。斷食の日が澤山あつて、その時には人々は肉を食べることを許されなかつた。で、海邊や河から遠いところに住んでゐた人達は、卵ばかり食べてゐるか、さもなければ何も食べずにゐなければならなかつた。ところが、十三世紀のはじめに、オランダの一漁夫が鰊の貯藏法を發見して遠いところへも運んで行けるやうにした。そこで、北海の鰊漁は非常に重要なものになつた。ところが、十三世紀のうちの或時に、この有用な小魚が（なぜかは知らぬが）北海からバルト海へ移つたので、この内海の諸都市がにはかに金を儲けはじめた。そこで、全世界が鰊を捕りにバルト海へ船を出したが、しかし、この魚は毎年ただ數ヶ月の間しか捕れなかつたので、（その餘の間は深い水の中に沈んで非常に多くの子を育ててゐた）何か他の仕事を見つけなければ船はその餘の間を空しく遊ばせておかなければならなかつた。そこで、北ロシヤや中央ロシヤの小麥を南ヨーロッパや西ヨーロッパへ運ぶために使ふこ

とにした。そして、その歸りの航海で香料や絹や絨緞や東洋の毛布などをヴェニスやジェノアからブリュージやハンブルグやブレーメンに持つて來させた。

かういふ簡單なはじまりから國際貿易の重要な組織が發達して、それは工業都市のブリュージやガン（ここには全能の同業組合があつて、フランスやイングランドの王達と正々堂々の陣を張つて戰つて、勞働專制政治を建てたが、それがまた雇主をも勞働者をもまつたく零落させた）から遠く北ロシヤのノヴゴロド共和國にまで及んだ。（このノヴゴロドは強い都市であつたが、後に、イワン雷帝が商人全體を疑つて、町を占領して一と月足らずのうちに六萬の人を殺し、生き殘つた者をみんな乞食の境涯におとしてしまつた時に滅びた。）

で、北方の商人達は、海賊や過重な稅金や小面倒な法規などから自分達を保護するために、「ハンザ」といふ保護同盟を結んだ。このハンザ同盟は、その本部をリューベックにおいてゐたが、實に百以上の都市の自發的聯盟であつた。この聯盟には所屬の海軍があつて、常に海を見まはつて、イングランドやデンマルクの王達がハンザ同盟の有力な商人達の權利や特權やを侵害したりした時には彼等と戰つてこれを破つた。

わたしはもつと紙面を取つて、君達に話したいと思ふのは、航海といふ航海がすばらしい冒險となつたやうな危險の中を、深い海を越えたり高い山を越えたりして行つて取引したこの不思議な商業に

就いてのめづらしい物語の數々である。けれども、さうしてゐると幾卷かの書物になるであらう。で、ここでは割愛する。

中世は今までお話しして來たやうに、非常に進歩ののろい時代であつた。勢力のあつた人達が「進歩」は惡魔の發明した非常に惡いものであるが故に、是非とも堰き止めなければならないと信じてゐたので、そして、その人達が權力の座を占めてゐたので、辛抱强い農奴や無學の騎士やを容易に自分達の意のままにしたのであつた。時々、あちらこちらに勇敢な人が幾人か出て來て、禁じられた科學の領分に蹈み込んだこともあつたが、みんなひどい目に遭はされた。生命が助かつて二十年の禁錮に處せられたくらゐのところは先づ運の好い方だつた。

十二三世紀に國際貿易が洪水のやうに西ヨーロッパに漲つたのは、ちやうどナイル河が古代エジプトの谷に氾濫したやうなものであつた。それがあとに繁榮といふ肥沃な沈澱物を殘して行つた。繁榮がひまな時間を生んだ。このひまな時間が男にも女にも寫本を買つたり文學や美術や音樂に興味を持つたりする機會を與へた。

そこで、またもや世界は、昔、人間をその遠い親類でありながら未だに口が利けずにゐる他の哺乳動物の列から引きあげた、あの靈妙な好奇心で充たされた。そして都市が（その發生と發達との跡は前への章で君達に話しておいた）、いかにも狹い在來の事物のきまりを打破つて進まうとした勇敢な開拓

者達の安全な隱れ家となつた。

彼等は働きはじめた。先づ、その閉ぢこもつてゐた學究的な庵の窓を開いた。さつと洪水のやうな日光が埃だらけの部屋へはひつて來て長い間の半暗闇のうちにかゝつてゐた蜘蛛の巢を照らして見せた。

彼等は家を掃除しはじめた。つぎには庭を掃除した。

そこで、彼等は平野の方へ、崩れかゝつてゐる町の城壁の外へ出て行つて、そして言つた。「これはいゝ世界だ。かういふところに住んでゐるのは嬉しい」と。

その瞬間に、中世は終つて新らしい世界がはじまつたのである。

文藝復興

人々は生きてゐるといふ事だけで幸福にならうともう一度やつて見た。彼等はローマやギリシヤの氣持のいゝ古い文明の遺物を救ひ出さうとした。そしてその成功した事を誇つて言つて文藝復興（卽ち文明の再生）と呼んだ。

文藝復興は政治上の運動でもなければ宗教上の運動でもなかつた。心の狀態であつた。文藝復興時代の人々は母なる教會の從順な息子であることには變りがなかつた。王や皇帝や大公やの臣民であつて不平はこぼさなかつた。

けれども、彼等の人生を見る眼は變つてゐた。彼等は別々の着物を着はじめ――別々の言葉を話しはじめ――別々の家で別々の暮しをしはじめた。

彼等はもはやその考へや努力のすべてを、天上界で彼等を待つてゐるといふ幸福な世の事にばかり集中しなかつた。却つて、天國をこの地上に建てようとした。そして、實際をいふと、彼等は立派に

成功したのである。

歷史の「年代」が持つてゐる危險に就いては、わたしはすでにたび〳〵君達に注意した。一體、人人は「年代」をあまり文字通りに取り過ぎる。彼等は中世のことを暗黑と無智との時代として考へる。「カチッ」と時計がいふと同時に、文藝復興時代がはじまつて、都市や宮殿には熱心に知識を求める心が燦爛とした日光のやうに漲り溢れたと考へる。

が、事實としては、そんなはつきりした線を引くことなどはまつたく出來ないことである。十三世紀が中世に屬してゐることは極めて明かである。すべての歷史家が、この點では一致してゐる。けれども、それが果して暗黑と沈滯とのみの時代であつたか？　決してさうではなかつた。人々は恐ろしく元氣であつた。大きな國家は建設されつゝあつた。大きな商業の中心地は發展しつゝあつた。お城の竝び立つた塔や市の公會堂の尖つた屋根の上には高く、新たに建てられたゴシック式の大會堂のほつそりとした尖閣が聳えてゐた。いたるところで世界は動いてゐた。市會の有力な紳士達は、（近ごろ出來たお金のために）自分達の力を自覺するやうになつて來たので、領主達とます〳〵勢力を爭ひつつあつた。同業組合の人達はまた、「多數は力である」といふ重大な事實を知るやうになつて來たので、市會の有力な紳士達と爭ひつゝあつた。王や王の老獪な顧問達はまた、さういふ動搖してゐる中へ釣りに行つて、利益といふぴかぴかしてゐる魚を澤山捕つて、そしてそれを、呆れてぽかんとしてゐる

市會議員や組合員の鼻の先きで料理して食べたりした。

長い夜が來て、しかも、灯影の暗い街がもはや政治上や經濟上の議論をつゞけるのに適さなくなつたりすると、その場に活氣を添へるために、抒情詩人達が武勇談や冒險談や英雄談やあらゆる美しい婦人に忠誠であつた人達の話などをしたりさういふ歌を歌つたりした。そのうちに青年達は進歩ののろいのに我慢が出來なくなつて、陸續と諸大學に集つた。それにもまた話がある。

中世は「世界的に心が向いて」ゐた。と言ふとむづかしく聞えるが、待ちたまへ、今すぐに說明するから。われ〳〵近代人は「國民的に心が向いて」ゐる。われ〳〵はアメリカ人かイギリス人かフランス人かイタリヤ人かであつてイギリス語かフランス語かイタリヤ語かを話し、イギリスかフランスかイタリヤかの大學へ行く。そして、どこか他のところでのみ敎へてゐるやうな或特殊の學科を專攻しようとする時にだけ他國の言葉を學んで、ミュンヘンなりマドリードなりモスコーなりへ行くのである。ところが、十三四世紀の人々は自分達のことをイギリス人とかフランス人とかイタリヤ人とかとは滅多に言はなかつた。「わたしはシェフィールドの、或ひはボルドーの、或ひはジェノアの市民である」と言つた。彼等はみんな一つの同じ敎會に屬してゐたので、まつたく四海同胞の思ひをしてゐたのである。そして、敎育のあるものはみんなラテン語が話せたので、その持つてゐた世界共通語で馬鹿げた言葉の障壁などは取り除いたのだが、それがまた近代ヨーロッパには大きくなつて、小さな國民など

は非常に不利な地位に置かれるやうになつた。今、一例として、寛大でよく笑つた偉大な說敎家で、十六世紀に書物を書いたエラスムスの場合を取つて見よう。彼れはオランダの小さな村の生れであつた。が、ラテン語で書いたので全世界がその聽手であつた。が、もし今日の世に生きてゐたとしたら、オランダ語で書くであらう。それだと、ただ五六百萬の人だけがそれを讀むことが出來るだけである。ヨーロッパやアメリカのその餘のものにわからせるためには、彼れの出版者はその書物を二十種の違つた言葉に翻譯しなければならない。それには莫大な金が要る。出版者はとてもそんな面倒な思ひや危險な思ひをしようとはしないであらう。

六百年前にはそんなことは起りやうがなかつた。人民の大部分はまだ非常に無智であつて讀むことも書くこともまつたく出來なかつた。けれども、鵞ペンを使ひこなすといふむづかしい術に達してゐた人達は、文字の世界共和國といふ、全大陸に擴がつて、言葉なり國民性なりの上に境界のあるのをも知らなければ、その限界を重んじようともしなかつた國に屬してゐた。諸大學がこの共和國の砦であつた。が、近代の要塞とちがつて、それらの砦は國境には沿つてゐなかつた。どこなり一人の敎師と數人の弟子とが一しよに出會つたところにそれは立てられた。ここでまた中世や文藝復興時代がわれわれの時代とはちがつてゐる。今日では、新らしい大學が建てられる時には、その徑路は（ほとんど定つて）つぎの通りである。先づ、或金持がその住んでゐる社會のために何事かをしようと思ふか、さ

もなければ或特別な宗派がその信者の子供達を適當な監督の下におかうとして學校を建てようとするか、さもなければ、國家が醫者や辯護士や教師を必要とするかである。卽ち、大學は銀行に預けられてある巨額の金としてはじまるのである。この金がやがて校舍や實驗室や寄宿舍を建てるのに用ひられる。そして最後に職業教師が雇はれて、入學試驗が行はれて大學はその途にのぼるのである。

ところが、中世においては物事が違つてゐた。まづ、一人の賢い人が「おれは大きな眞理を發見した。この知識を他の者に傳へなければならない」と、かう思つたのである。そこで、その人は何時どことなしに幾人でも聽く者がありさへすればその智慧を說きはじめた。今日の大道商人のやうにである。もしその人が面白い話手であれば、大勢の人が來て立ちどまつた。が、面白くなければ、人々は肩を聳かして步みをつゞけた。そのうちに、幾人かの青年がこのえらい教師の講義を聽きにきまつて來はじめた。彼等は筆記帳と小さなインキ壺と鵞ペンとを持つて來て、肝要であると思はれたところを書きとめた。或日、雨が降つた。教師も生徒達も空いてゐる地下室か「教授」の部屋かに引きあげた。學者は椅子に腰をかけて生徒達は床の上に坐つた。これが大學のはじまりであつた。卽ち、中世の大學は教授と生徒との一つの團體であつて、そのころは「教師」が一切の値打で、彼れの教へてゐた場所である建物などには何の値打もなかつたのである。

一例として、九世紀に起つた事を君達に話すとしよう。ナポリに近いサレルノの町に幾人かのすぐ

れた醫者がゐた。その人達は醫者になりたいと思つてゐる人達を惹きつけたが、それがもとで、爾來ほとんど一千年の間（一八一七年まで）そこにあつたサレルノの大學では、キリスト降誕前五世紀に古代ギリシャでその術を行つてゐたギリシャの大醫ヒポクラテスの智慧を教へてゐた。

また、アベラールといふ、ブリタニイから來た若い司祭が、十二世紀のはじめにパリーで神學と論理學とに關する講義をしはじめた。と、數千人の熱心な青年がその講義を聽きにこのフランスの都へ集つて來た。すると、彼れと意見の違つてゐる他の司祭達がまた一方から出て自分達の考へ方を說明した。パリーは間もなくイギリス人やドイツ人やイタリヤ人やの騷々しい群集とスウェーデンやホンガリヤから來た學生とで充たされて、そして、セイヌ河の中の小さな島にあつた古い會堂のまはりに彼の有名なパリーの大學が出來たのである。

イタリヤのボロニャでは、グラチアンといふ修道士が、教會の規則を知らなければならない職務にあつた人達のために教科書を編纂した。すると、若い司祭や多くの俗人などがヨーロッパぢゆからグラチアンにその考への說明を聽きにやつて來た。そして、その人達が町の家主や宿屋の主人や下宿屋のおかみさんなどに對抗するために一つの團體を作つたのが、卽ち、ボロニャ大學のはじまりである。

つぎには、パリー大學に何か紛擾が起つた。その原因が何であつたかはわれ〳〵は知らないが、とにかく、一團の不平を抱いた教師達がその生徒達と共に海峽を渡つて、居心地のよいところをテーム

ス河畔のオックスフォードといふ小さな村で見つけたので、そこで、かの有名なオックスフォード大學が出來たのである。同じやうに、一二二二年に、ボロニヤ大學に分離があつた。不滿を抱いた教師達が（やはりその生徒達をつれて）パジュアへ移つたので、その時から、この高慢な町は自分の町の大學を自慢してゐる。で、さういふ風に、大學はイスパニヤのバラドーリッドから遠いポーランドのクラカウへ行つたり、フランスのポワチエーからドイツのロストックへ行つたりした。

いかにも、かういふ昔の教授達の教へた事の多くは、對數や幾何の定理やを聽き慣れてゐるわれわれの耳には馬鹿らしく聞えるであらう。が、わたしが明かにしようとしてゐる點は――中世、殊に十三世紀は世界がまつたく靜止してゐた時代ではなかつたといふことである。若い時代のうちには、活氣があり、感激があり、いくらかきまり惡げではあつたがます〳〵疑義を質さうとする心があつた。そしてこの動搖から文藝復興は生れたのである。

ところが、中世の世界の最後の場面に將に幕がおりようとしてゐた時に、淋しい人の姿が一つ舞臺を横ぎつたが、その人のことは、君達もその名ばかりでなく、もつと以上のことを知つてゐなければならない。その人はダンテと呼ばれた。アリギエリ家に屬してゐたフロレンスの法律家の息子で、一二六五年にこの世の光を見た。彼が祖先の町で成長してゐた時に、ジョットーはアッシシの聖フランシスの一代記を聖十字架教會の壁に描いてゐたが、學校へ行つたころには、彼れのぎよつとした目は

しば〳〵血のたまりを見たりした。これはゲルフ黨（法王派）とギベリン黨（皇帝派）との間に斷えず荒れまはつてゐた果てしのない恐ろしい戰爭を語るものであつた。

大人になつた時に、彼れはゲルフ黨となつた。それは父親が彼れの前にゲルフ黨であつたからで、ちやうどイギリスの少年が、ただその父親が或は自由黨であり或は保守黨であつたといふだけで自分も自由黨になり保守黨になるのと同じことである。ところが、數年の後に、ダンテはイタリヤが、一人の支配者の下に統一されなければ、無數の小さな都市の混亂した嫉みの餌食となつて滅びさうなのを見た。そこで、彼れはギベリン黨になつた。

彼れはアルプスのむかうに助けを求めた。有力な皇帝がやつて來て統一と秩序とを回復してくれることを望んでゐた。ところが、哀れや、それは甲斐なき望みであつた。ギベリン黨は一三〇二年にフロレンスから放逐された。その時から一三二一年にラヴェンナの淋しい廢墟の中で死ぬ時まで、ダンテは家なき漂泊者となつて、なさけのパンを富裕な保護者達の――その人達の名は、彼等が不遇な一詩人に深切であつたといふこの一つの事實がなかつたならば、當然忘却のどん底に沈んでしまつたであらうと思はれるやうな、さういふ人達の食卓で食べてゐた。追放の長い年月の間、ダンテは自分が故郷の町で政黨の首領であつたころや、また、毎日アルノ河の土手を歩きながら、可愛いベアトリス・ポルチナリを（彼女はギベリン黨が失脚する十二年前に、他人の妻として死んだ）せめて一と目なりと

も見ようとしたころやの自分と自分の行動とを是認せずにはゐられない氣がした。

彼れはその事業の上では失敗してゐた。生れた町のために忠實に勤めたのだが、腐敗した法廷からは、公債を盜んだといふ罪を歸せられて、フロレンス市の領内に歸つて來たりすれば生きながら火あぶりの刑にされることになつてゐた。そこで、ダンテは自分の良心と自分の同時代の者との前に身の明りを立てるために、一つの想像の世界を作り出して、非常にこまかく、自分が失敗するに至つた事情を述べ、貪慾と淫佚と憎惡とが清淨な可愛いイタリヤを陰險で利己的な僭主達の無情な傭兵共の戰場にしてしまつた情ない有樣を描いた。

彼れは、先づ、一三〇〇年の復活祭の前の木曜日に密林の中で路に迷つて、豹と獅子と狼とが行く手を遮つてゐるところに出つくはしたことから話し出してゐる。彼れが生命はもうないものと諦めた時に、ふと、一つの白い姿が木の間に現はれた。それはローマの詩人で哲學者であつたヴァージルであつて、聖母と高い天上から自分のまことの愛人の運命を見まもつてゐたベアトリスとが助けに寄越したのであつた。ヴァージルはそこでダンテを連れて煉獄から地獄の方へ行く。だん〳〵路は深く〳〵なつて、たうとう彼等がどん底に着くと、そこには魔王が永遠の氷の中に閉ぢ込められて立つてゐて、そのまはりには最も恐ろしい罪人や叛逆者やうそつきや、嘘や僞りで有名になつたり成功したりした者達やがゐる。が、二人の漂泊者がこの恐ろしい場所に行き着くまでに、ダンテは自分の愛する町の

歴史の中で何か知ら一役を演じた人達のみんなに出會つた。皇帝達や法王達も、勇ましい騎士達や泣きわめいてゐる高利貸達も、誰も彼れもがみんなそこに、永遠の刑罰に處せられてゐるものもあれば、救ひの日が來て、煉獄を去つて天國へ行ける時を待つてゐるものもある。

それはめづらしい物語である。十三世紀の人々がしたことや感じたことや恐れたことや祈つたことの一切がわかる案内書である。そしてその全體にわたつて、淋しいフロレンスの亡命者の姿が、自分の絶望の影に永久に附きまとはれながら動いてゐるのである。

と、見よ！　死の門が中世のこの悲しい詩人の上に閉ぢようとしてゐた時に、生の門は文藝復興時代の最初の人となつた子供に開きかけてゐた。それはフランセスコ・ペトラルカといふ、小さなアレッツオの町の公證人の息子であつた。

フランセスコの父親もまたダンテと同じ政黨に屬してゐた。彼れもまた追放されてゐたので、從つてペトラルカはフロレンスから離れたところで生れたのである。十五の歳に彼れは父親のやうに法律家になる爲にフランスのモンペリエへ送られた。ところが、少年は法學生になるのを好まなかつた。彼れは法律を嫌つた。學者になり詩人になりたいと思つた——そして他の何ものよりも學者になり詩人になりたいと思つたので、意志の强い人にしてはじめてよくするやうにして彼れはそれになつた。彼れは長い旅をして歩きながら、フランドルやライン河に沿つた僧庵やパリーやリエージュや最後にロ

ーマで寫本を寫した。それから、彼れはヴォークルーズの荒れた山地の淋しい谷間へ行つて住んで、そこで讀んだり書いたりしてゐるうちに、間もなくその詩とその學問とが非常に名高くなつたために、パリー大學とナポリ王とはその學生達とその臣民達とに敎へに來てくれるやうにと彼れを招いた。この新らしい任に赴く途で、彼れはローマを通らせられた。そこの人達が、半ば忘れられたローマの著作者達の編輯者としての彼れの評判を聞いてゐたのであつた。彼等は彼れを表彰しようと決してゐたので、昔の帝都の公會所で、ペトラルカは詩人の月桂冠を戴かされた。

その時からずつと、彼れの生涯は名譽と賞讃とのはてしのない連續であつた。彼れは人々が最も聞きたいと思つてゐることを書いた。人々は神學上の論爭には飽いてゐた。あはれなダンテは好きなだけいくらでも地獄をさまよひまはつてゐられた。が、ペトラルカは愛のことや自然や太陽のことやを書いて、決して前代の仕入品であつたやうに思はれる陰鬱な事には觸れなかつた。で、ペトラルカが或る町へ來ると、すべての人民が群つて出迎へたので、彼れはまるで凱旋して來た英雄のやうに迎へられた。もしまた彼れが若い友人のボッカチオといふ物語作者を一しよに連れて來たりすれば、いよいよ／＼歡迎された。彼等は二人ともに時代の兒であつて、好奇心に富み、一切のものを一度は讀まうとしたり、忘れられた黴臭い圖書室の中を掘り起してヴァージルなりオヴィッドなりルクレチウスなりその他のむかしのラテン詩人の何人なりのもつと他の稿本を見つけ出さうとしたりした。彼等は善

良なキリスト敎徒であつた。それはいふまでもないことだつた！　誰も彼れもがさうだつた。けれども、いつかは死なねばならないといふだけのことで何も陰氣な顏をして歩きまはつたり穢い上衣を着たりしてゐる必要がどこにある。人生は好いものである。人々は幸福であるやうに作られてゐる。君達はこれを證明して欲しいのか？　よろしい。まづ鋤を執つて土を掘つて見たまへ。何が見つかつたか？　美しい古い彫像である。美しい古い瓶である。むかしの建物のこはれた址である。かういふものはみんな嘗て存在してゐた最大の帝國の人達が作つたものである。その人達は一千年もの間全世界を支配した。彼等は強くて富裕で美しかつた。（ちよつと、アウグスツス帝のあの半身像を見て見たまへ！）勿論、彼等はキリスト敎徒ではなかつたので天國へはひることは出來なからう。せい〳〵うまく行つたところでダンテがこの間訪ねて行つたあの煉獄で日を送つてゐるのだらう。

が、そんなことを誰がかまはう？　昔のローマのやうな世界に住んでゐられゝば、はかないわれわれの身に取つて申分のない天國である。どうせ、われ／＼は一度しか生きない身である。生きてゐる間をこそ樂しく愉快に暮さうではないか。

簡單に言へば、これが多くの小さなイタリヤの都市の曲りくねつた狹い街々を充たしはじめた精神であつた。

君達は「自轉車狂」とか「自動車狂」とか言ふのが何のことかを知つてゐる。誰かゞ自轉車を發明

する。と、何十萬年もの間のろのろと骨を折つて一つの場所から他の場所へ動いてゐた人達は、くるくると素早く樂々とまはつて丘や谷を越えて行くその光景を見て「氣狂ひ」のやうになる。そのうちに上手な技師が最初の自動車をこしらへる。もはやせつせとペダルを蹈むことが要らなくなる。自分はちやんと坐つてゐて、幾滴かのガソリンを代りに働かせればよいのである。

そこで誰も彼れもが自動車を欲しくなる。誰も彼れもがロールスロイスがどうの、フォードがかうの、キャーブレターやメーターやガソリンがどうのかうのと話し合ふ。探檢家達は未知の國の奥深くはひつて行つて石油の新らしい產地を搜さうとする。スマトラやコンゴー國の森林はわれ〳〵にゴムを供給する。ゴムと石油とが非常に貴重なものとなつたために人々はそれを自分の物にしようとして戰爭をする。世界全體が「自動車狂」で、小さな子供達は「かあちやん」や「とうちやん」といふのを覺える前に「ぶう〳〵」と言へるやうになる。

十四世紀のイタリヤの人達は、新たに發見されたローマの埋れた世界の美しさに氣狂ひのやうになつた。間もなく、この狂熱は西ヨーロッパのすべての人々に及んで行つた。知られなかつた寫本が一つ見つかると、それが口實になつて町の休日が出來たりした。一冊の文典を書いた人は今日の世で新らしい發火器を發明する者と同じほどの人氣があつた。人道學者と呼ばれた、(役にも立たない神學上の研究などにその時間を浪費しないで)人間の研究にその時間とその精力とを捧げた學者は、食人種の島をみんな征服した英雄にこれまで與へてゐたよりもずつと大きな名譽と深い尊敬とを以て重んじられた。

この知識を求める氣持が高まつてゐた眞最中に、昔の哲學者や作家を研究するのに非常に都合のいい一つの事件が起つた。トルコ人が新たにまたヨーロッパを攻擊し出したことである。コンスタンチノープルが(元のローマ帝國の最後のかたみの首府が)ひどく壓迫された。一三九三年に、皇帝マニュエル・パレオローグはエンマニュエル・クリソロラスを西ヨーロッパに送つて、ビザンチウムのどうすることも出來ない狀態を說明して援を乞はした。この援けはつひに來なかつた。ローマカトリック敎徒の方では、ギリシヤカトリック敎徒がさういふ目に遭ふのは、邪道に落ちた罰として當然のことであるとむしろ氣味がいゝくらゐに思つてゐたのである。しかし、西ヨーロッパはかうしてビザンチウム帝國の運命には無頓着でゐられたけれども、昔のギリシヤ人には、その移住民がトロイ戰爭の五百年後にボスフォラス海峽に都を建てたりしたといふので非常に興味を持つてゐた。彼等はギリシヤ語を學んでアリストートルやホーマーやプラトーやを讀みたいと思つてゐた。それこそまつたく非常にそれを學びたいと思つてゐたが、書物もなければ文典もなければ敎師もなかつた。さういふ時に、フロレンスの役人達はクリソロラスが來たことを聞いたのである。町の人達は氣狂ひのやうになつてギリシヤ語を學ばうとした。クリソロラスは來て敎へてくれるであらうか? 彼れが承諾して、ギリシヤ語

の最初の教授となつてアルファ、ビータ、ガンマ（註。ギリシヤ語のABC。）を教へることになると、どうだらう！幾百人といふ熱心な青年達が、このアルノ河の町へ陸續とやつて來て、厩やすすけた屋根部屋やに巣をくつて、そして動詞の變化を學んでソホクレスやホーマーの仲間にはひらうとした。

一方、諸大學では、年老いた學者達が、昔の神學や古ぼけた論理學を教へたり、舊約全書の隱れた神祕を說明したり、ギリシヤ語からアラビヤ語、イスパニヤ語を經てラテン語に譯されたアリストートルの變てこな學問を論じたりしてゐたが、これを見てびつくり仰天した。が、つぎには、怒つた。それがいかにもひどくなつて來た。と、青年達は在來の大學の講堂を去つて、「再生の文明」に就いて新式の意見を抱いてゐる熱した目をした「人道學者」のところへ續々と聽きに行き出した。

學者達は官憲のところへ行つた。彼等は苦情を言つた。けれども、いやがる馬に無理に飲ませることが出來ないやうに、いやがる耳に實際興味を持つてゐないことを聽かせることは出來ない。學者達はにはかに立場を失ひ出した。が、あちらこちらでちよつとの間の勝利は得た。彼等はまた、自分達の魂と關係のない幸福を他人が享けるのを忌み嫌つてゐるあの狂信者達と力を併せた。殊に文藝復興の中心であつたフロレンスでは、新舊思想の間に恐ろしい戰があつた。サヴォナロラといふ、美を忌み嫌つて苦々しい不機嫌な顏をしたドミンゴ派の修道士が、中世の殿軍の指揮者であつた。彼は勇ましく戰つた。來る日も來る日も神の怒りの近づいてゐることをフィオレのサンタマリアの大廣間

から呶鳴りつゞけた。「悔改めよ、神を無視した行ひを悔改めよ、神聖でないものを喜んだりしたことを悔改めよ！」と彼れは叫んだ。そのうちに、彼れは空に聲を聞いたり炎々として燃えてゐる劍が閃いたのを見たりした。彼れは小さな子供達に說教して、親達を地獄に墮しつゝあつたやうなさういふ過ちに陷らせまいとした。彼れはまた少年團を組織して、自分こそその豫言者であると言つてゐた大神のために働かした。と、ふと或瞬間に、恐れをのゝいてゐた人達は氣狂ひのやうになつて、あやまつて美と快樂とを愛してゐたことを悔改めることを誓つた。そして、彼等がその書物や彫像や繪畫やを市場に運んで、亂暴な「虛榮の謝肉祭（カーニヴァル）」を行つて神聖な歌を歌ひながら最も神聖でない踊を踊りつつあつた時に、サヴォナロラはその炬火の火を積み重ねてある寶に點けた。

ところが、その灰が冷えると、人々ははじめて失つたものが何であつたかを知つた。この恐ろしい狂信者が彼等にこはさせたものは何物にも增して愛するやうになつてゐたものだつた。そこで、彼等は彼れにそむいた。サヴォナロラは牢獄に拋り込まれた。彼れは拷問された。けれども、彼れは自分のしたことを一つも後悔しなかつた。彼れは誠實な人であつた。神聖な生活を送らうとしたのであつた。自分と意見を共にすることを故意に拒んだ人達を進んで滅さうとしたのであつた。どこでなり惡を見つけたところで根絕しようとするのが彼れの義務であつたのである。そして異教の書物や異教の美を愛することはこの教會の忠實な子の目には惡であつたのである。けれども、彼れはただ一人であつた。

彼れは滅びて去つてゐた時代の戰を戰つたのだつた。で、ローマの法王も彼れを救ふがために指一本をも動かさなかつた。却つて反對に、「忠實なフロレンス人」がサヴォナロラを絞首臺へ引いて行つて、その首を縊つて、その身體を群集の歡呼と喝采との中で燒いたのを褒めた。

それは悲しい終であつたが、しかし、まつたく是非もないことだつた。サヴォナロラは十一世紀では偉人であつたであらう。が、十五世紀では負けた喧嘩の首領たるに過ぎなかつた。で、よかれ惡かれ、中世はこゝに終つて、法王は人道學派となり法王廳はローマとギリシヤの古い事物の最も重要な博物館となつた。

表現の時代

人々は新たに發見した生の喜びに表現を與へることの必要を感じはじめた。彼等はその幸福を詩や彫刻や建築や繪畫や印刷した書物に表現した。

一四七一年に、九十一年の生涯のうちの七十二年を、イーゼル河畔の古いオランダのハンザ同盟都市ツオーラの町ぢかくにあるセント・アグネス山の僧庵の奥深い塀の中で暮してゐた一人の信心深い老人が死んだ。彼れは敎兄トマスとして知られてゐるが、また、ケンペンの村で生れたので、トマス・ア・ケンピスとも呼ばれてゐる。十二歳の時に彼れはデヴェンターの町へ送られた。そこにはゲルハルド・グルートといふ、パリーやコローンやプラーグの諸大學の優れた卒業生で、さまよひまはつた說敎者として有名であつた人が、共同生活組合を建てゝゐた。この會の會員達はみんな身分の低い俗人であつて、キリストのはじめの使徒達のやうな簡素な生活を送らうと力めながら、一方では、それぞのきまつた仕事を大工やペンキ屋や左官として務めてゐた。彼等は一つのすぐれた學校を維持してゐ

て、貧しい親達から生れた有望な少年達に、教父の智慧を學べるやうにした。この學校で、小さなトマスはラテン語の動詞の變化や寫本の寫し方やを學んだのだつた。その後、彼れは僧侶の誓を立てゝ、小さな書物の包を背負つて、ツオーラの町へさまよつて來て、ほつと安堵の太息をつきながら、自分の心を少しも惹かなかつた俗界の上にまつたく戸を立てゝしまつたのだつた。

トマスの生きてゐたのは騒亂と惡疫と頓死との時代であつた。先づ、中央ヨーロッパでは、ボヘミヤで、イギリスの宗教改革者ジョン・ウィクリフの友人で祖述者であるヨハネス・フスの忠實な弟子達が、恐ろしく苦戰しながら、愛師の弔ひ合戰をしてゐた。これより先き、フスはコンスタンスの宗教會議の命令で火炙りにされたのであつたが、その同じ宗教會議は、豫て彼れに安全通過狀を與へた上で、スヰスへ來て、その教義を、折柄教會を改革するために集つてゐた法王、皇帝、二十三人の君牧師、三十三人の大主教と主教、百五十人の僧院長及び百人以上の公侯の前で説明するやうにと言つて呼び寄せたのであつた。

西の方では、フランスがイギリス人を自分の國から追出さうとして百年間も戰つてゐたが、ちやうどその頃、運よくジャンヌ・ダルクが出現したので、全敗から救はれた。そしてこの爭ひが終るや否や、今度はフランスとブルグンドとが互に鎬を削つて、西ヨーロッパの覇權を握らうとして生死の爭ひをはじめた。

南の方では、ローマの法王が南フランスのアヴィニョンに住んでゐる第二の法王の上に天の呪ひを呼び降しつゝあつた。と、相手もまたそれに應じて同じむくいをしてゐた。極東では、トルコ人がローマ帝國の最後の遺物を打ちこはしつゝあつたと共に、ロシヤ人が自分達の主人である韃靼人の勢力を打ち碎かうとして最後の十字軍に出かけてゐた。

けれども、かういふすべてのことを、教兄トマスはその靜寂な庵の中でまつたく聞かずにゐた。彼れは自分の寫本と自分の思想とを持つてそれで滿足してゐた。彼れは神に對する自分の愛を一冊の小さな書物に注いだ。彼れはそれを『キリストに倣ひて』と名づけた。この書は、その後、聖書以外の他のいかなる書物よりも多くの國語に翻譯された。そして、苟くも聖書を研究したほどの人々にはみんな讀まれた。そして、何百萬とも知れない人々に感化を及ぼした。しかもそれは、生活の最高の理想を「一冊の小さな書物を持つて片隅に坐りながら生涯を靜かに送りたい」といふ單純な願の中に現はした人の仕事であつた。

善良な教兄トマスは實に中世の最も純粹な理想を示したのである。周圍を勝ち誇つた文藝復興の諸勢力に、――新時代の到來を聲高く觸れあげてゐる人道學者達に取り圍まれながら、中世は最後の突擊をしようとして力を集めてゐた。修道院は改革された。修道士達は富と惡德とのころもを脱いだ。素樸な、生一本で誠實な人達は、自分達が過ちのない信心深い生活の模範を示して、人民を神のみこ

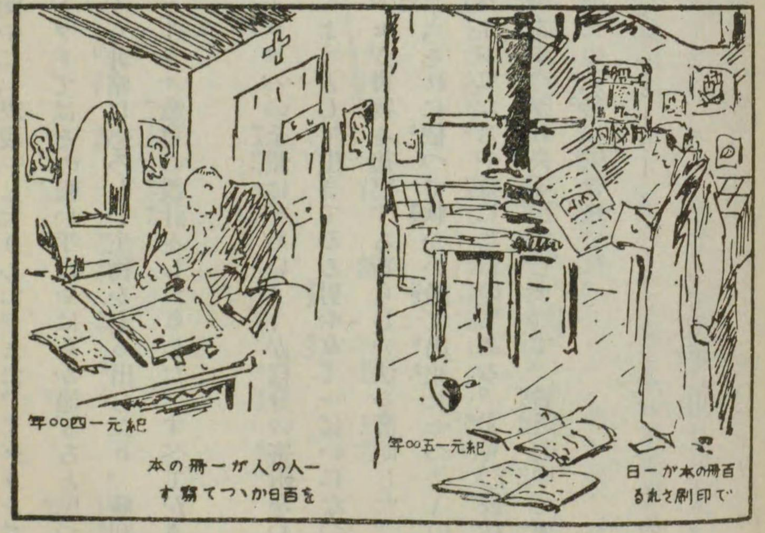
ころにかなつた正しい忍從の生活に引き戻さうと力めてゐた。けれども、すべてがむだだつた。新らしい世界はさういふ善良な人達のそばを駈け拔けた。靜かな瞑想の時代は過ぎてゐた。「表現」の大時代がはじまつたのである。

ここでちよつと、「むづかしい言葉」を澤山使はなければならないのをわたしが殘念に思つてゐることを言はせておくれ。わたしはこの歷史をやさしい言葉で書きたいと思つてゐる。けれども、それが出來ないのだよ。だつて、幾何學の教科書を書くのには斜邊だの三角形だの直角平行六面體だのといふ言葉をつかはない譯には行かない。君達はさういふ言葉が何を意味してゐるかを學ぶか、それがいやなら數學なしでゐなければならない。それと同じやうに、歷史においても、(また、すべての生活においても)君達は結局、變にむづかしい言葉の意味を學ばなければならないやうになるだらう。して見れば、今それをやつてもいゝではないか。

ところで、わたしが文藝復興時代は表現の時代であつたといふのは、つぎのやうな意味である。—人々はもう皇帝や法王が何をせよ何を考へよと彼等に言つた時に、ぢつと坐つて聽手となつてゐるだけでは滿足が出來なくなつたのである。自分達もまた人生の舞臺に立つ役者になりたいと思つたのである。自分々々の考へに「表現」を與へたいと思ひはじめたのである。で、もし誰かがフロレンスの歷史家ニコロ・マキヤヴェリのやうに國を治める事に興味を持つたりすれば、その人はその著書に自

分を「表現」して、成功する國家と有能な支配者に就いての自分の意見を述べた。もしまた一方に繪を書くことの好きな人があれば、その人は繪畫の中に、美しい線や好ましい色彩に對する愛を「表現」して、そしてジョットー、フラ・アンジエリコ、ラファエルと言つたやうな無數の名前を、永續する眞の美を表現してゐる物を愛することを學んだ人々のゐるところではどこでも通用する言葉にした。

もしまたこの色彩や線への愛が力學や動水學に對する興味と結合したりすると、その結果はレオナルド・ダ・ヴィンチとなつた。彼れは繪を書いたり、自分で作つた風船や飛行機で實驗したり、ロンバルヂヤ平原の沼池を排水したり、天と地との間にある一切の物に對する興味と喜び



寫本と印刷された本

とを散文や、繪畫や、彫刻や、巧みに工夫した機關やに「表現」したりした。また、ミケランジエロのやうなすばらしい力を持つた人が、ブラシやパレットではその強い手にやはらか過ぎると思つた時には、彫刻や建築に轉じて、重たい大理石の塊から非常に恐ろしい生物を刻み出したり、勝利を得た教會の光榮を最も具體的に「表現」してゐる聖ペートル教會の設計をしたりした。すべてがさう言つた調子であつた。

で、イタリヤ全體は（そしてすぐと間もなくヨーロッパの全體は）めい〳〵が自分の寄附をわれわれの蓄積した寶である知識や美や智慧の總計に加へようとして生きてゐる男や女で一ぱいになつた。ドイツでは、マインツの町で、ジョン・グーテンベルヒが書物を複寫する新らしい法を發明した。彼れは在來の木版を研究した結果、一つの組織を完成して、それに依つて軟かい鉛で出來た一つ〳〵の文字をだん〴〵と置いて行けば、それが言葉になり全ページになるやうにしたのである。尤も、彼れは間もなくその印刷機の新發明に關する訴訟事件でお金をすつかり失くしてしまつて、貧乏の中で死んだけれども、そのすぐれた發明的天才の「表現」は彼れの死後に生き殘つた。

間もなくヴェニスのアルヅスやパリーのエチエンヌやアントワープのプランタンやバーゼルのフローベンから、苦心して編纂された古典の書物が、グーテンベルヒがはじめて聖書に用ひたゴチック文字で印刷されたり、今日の人が一般に用ひてゐるイタリヤ文字で印刷されたり、或ひはギリシヤ文字

やヘブライ文字で印刷されたりして續々と世の中へ漲り溢れて行つた。

やがて全世界は何なり言はうとしてゐる人々の熱心な聽手となつた。學問が特權のある少數の者に獨占された時代は終つたのである。そして無學の最後の口實は、ハールレムのエルツェヴィエがその廉價な通俗版を出版しはじめた時にこの世界から失くなつた。やがてアリストートルとプラトー、ヴァージルとホレースとプリニ、さう言つたやうな昔の作者や哲學者や科學者やの立派な連中がみんな、いくらでもないお金を拂へば誰のでも忠實な友達にならうとした。實に、人道派はすべての人を印刷した言葉の前に自由平等にしたのであつた。

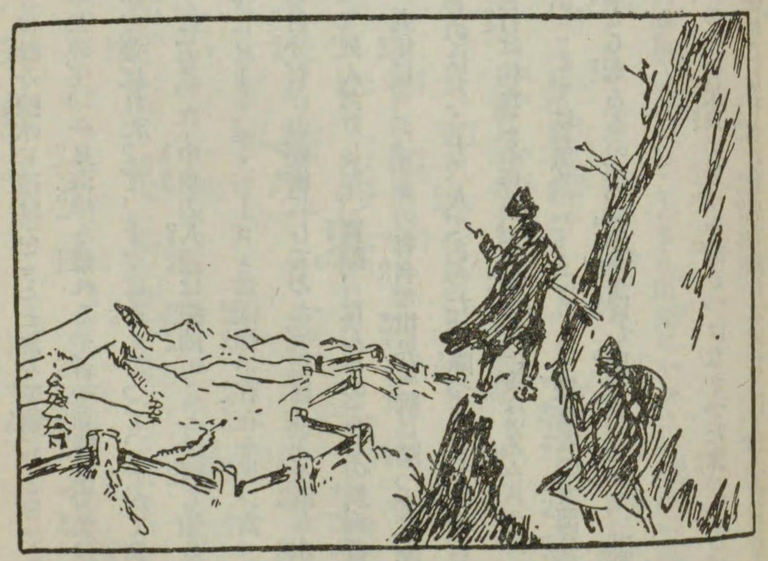
大發見

ところが、かうして人々がその狹い中世の垣根を破つてからは、さまよひまはるにもつと廣い場所が欲しくなつた。ヨーロッパの世界は彼等の功名心に對して小さくなり過ぎたのである。そこで、大發見の航海時代が來た。

十字軍は旅行といふ自由の學科を一つ教へたやうなものであつた。けれども、まだ〳〵、ヴェニスからジャッファへ到るよく知られてゐる蹈み馴れた路の外へは滅多に蹈み込んで行くものはなかつた。十三世紀になつて、ヴェニスの商人であつたポーロ兄弟が、大きな蒙古の沙漠を越えたり月までもとどきさうな高い山々へ登つたりしてうろつきまはつた擧句、やつと支那の大皇帝の宮廷に行き着いた。この兄弟の一人の子のマルコが、二十年以上にわたつた彼等の冒險のいろ〳〵を一冊の書物に書いた。人々はびつくりして、殊にジパング（日本）といふ不思議な島の金の塔の記事には目を見張つた。多くの人々は東方へ行つて、この金の國を見つけて金持になりたいと思つた。けれども、旅行があまり

に遠くて危險でもあつたので彼等はうちに留まつてゐた。

もちろん、海路を取つて行くことはいつでも出來ないことはなかつた。けれども、中世にはさまざまな有力な理由があつて海は非常に人氣がなかつた。まづ第一には、船が非常に小さかつた。マジェランが有名な世界周航の旅に幾年かを費した船でさへも、今日の渡船ほども大きくはなかつたのである。わづかに二十人から五十人の人を乘せたのだが、その人達はきたない船尾の方に住んでゐた。（中は低くて、中にはまつすぐに立つことの出來ないものもあつた）厨の設備は非常に惡く、天氣がちよつとでも荒れたりすると、火をおこすことが出來なかつたので、水夫達はまるで料理も何もされてゐないや



ローポ・コルマ

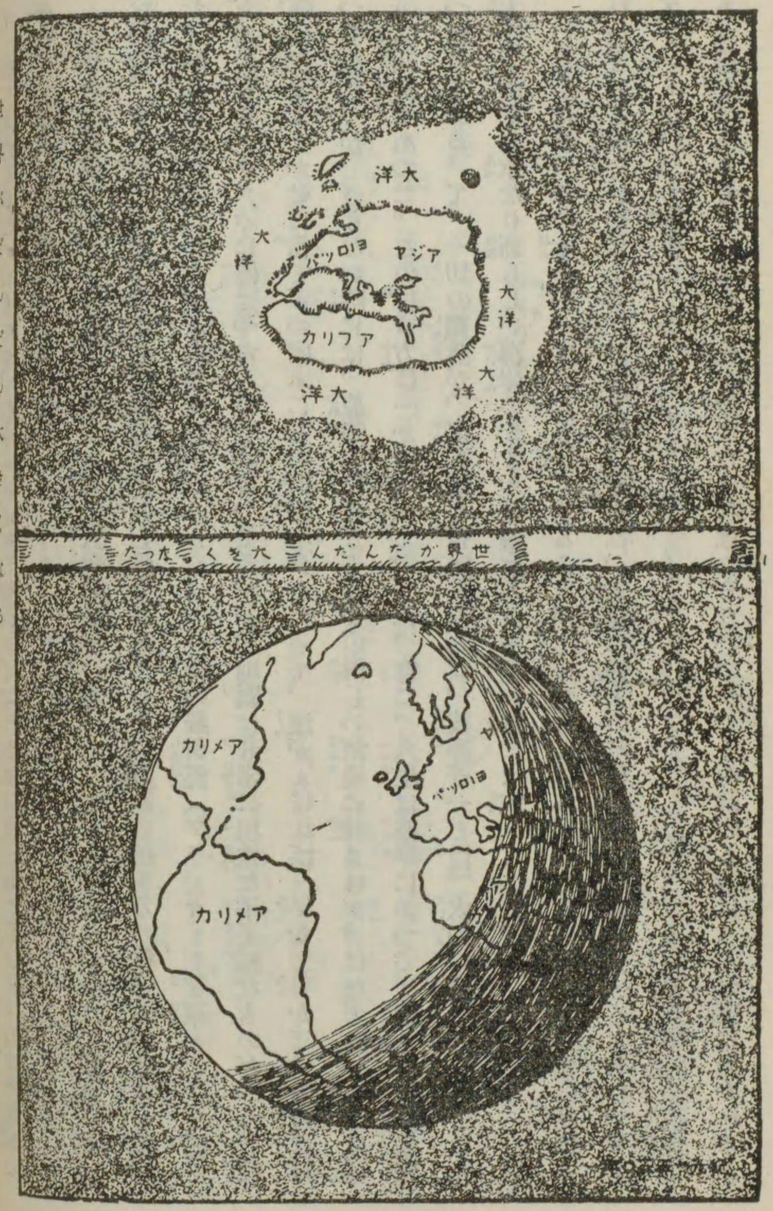
うな物を食べなければならなかつた。中世の人々は鰊を鹽水に漬けることと魚を乾物にすることとは知つてゐた。けれども、鑵詰にしたものはなかつたので、一旦海岸を離れるや否や新鮮な野菜は決して献立表にのぼらなかつた。水は小さな樽に入れて運ばれた。で、すぐに古くなつて、やがて腐つた木や鐵錆の味がついて、つる〳〵したものが一ぱいになつた。中世の人達は黴菌のことは何も知らなかつたので、(尤も、十三世紀の博學な坊さんであつたロージャー・ベーコンは黴菌の存在を思ひ當つたらしくもあるが、しかし、彼れはその發見をそつと自分だけの祕密にしてゐた)しば〳〵不潔な水を飲んで、そして時には乘組員の全部がチブスに罹つて死んだりした。實際、はじめのころの航海者の船上における死亡率は夥しいものだつた。一五一九年にマジェランの有名な世界周航に隨つてセヴィールを出帆した二百人の水夫の中で、歸つて來たものはたゞ十八人であつた。降つて十七世紀になつて、西ヨーロッパと東印度との間に盛んな貿易が行はれたころにも、四割の死亡率はアムステルダムからバタヴィヤへ行つて歸る航海の間にめづらしいことではなかつた。これらの犧牲者の大部分は壞血病で死んだのだが、此病氣は新鮮な野菜の缺亡から起るもので、齒齦を冒し血を腐らせて、患者はしまひにはへな〳〵になつて死んでしまふのである。

かういふ事情を頭におけば、君達にも海が人々の中の最良の分子を惹きつけなかつた譯が分るであらう。マジェランやコロンブスやバスコ・ダ・ガマのやうな有名な發見者達はみんな、四人であつたもの

や、後に人殺しになつたものや、仕事にあぶれた掏摸などからほとんど全部が組立てられた乘組員を率ゐて旅路にのぼつたのである。

これらの航海者達が、今日の氣樂な世界の人達には思ひ浮べることすら出來ないやうな艱難に面しながら、その當てもない事業を成就した勇氣と膽力とはたしかに讃歎に價する。彼等の船は水が洩つた。船具は不細工だつた。十三世紀の中ごろからは、一種の羅針盤(アラビヤと十字軍との手を經て支那からヨーロッパに傳はつたもの)は持つてゐたが、地圖は非常に粗末な不正確なものだつた。彼等は神さまにまかせに當てずつぽふにその進路をきめた。で、運がよければ一年か二年か三年の後に歸つて來た。が、さもない時には、彼等の白骨がどこかの淋しい濱邊に殘された。けれども、彼等は眞の開拓者であつた。その行き方は一かばちかであつた。實に、人生は彼等にあつては華々しい冒險だつたのである。で、一切の艱難が、渴も餓も苦痛もみんな、彼等が一と目、太初以來忘れられてゐた大洋の靜かな水なり新らしい海岸のかすかな輪廓なりを見た時には忘れられた。

わたしはまたこの本を千ページにも長くすることが出來たらと思ふ。はじめのころの發見の話はそれほどにも面白いのである。けれども、歷史は、君達に過去の時代の眞の觀念を與へるために、レンブラントがいつも製作してゐたエッチングのやうでなければならない。卽ち、或る重要な事件や最良であり最大であるものには强い光を投げなければならない。が、その餘のものはみんな蔭におかれるか



世界がだんだん大きくなる

或ひは數行で簡單に說明されるかしなければならない。で、この章では、わたしはただ極めて重要な發見を簡單に書きならべることが出來るだけである。

で、まづ覺えてゐて貰ひたいのは、十四五世紀の間はみんな、航海者達がただ一つの事を仕遂げようとしてゐたといふことである。卽ち、支那帝國やジパング（日本）の島や、その他の香料の出來る不思議な島々やへ行く樂で安全な道を見つけようとしてゐたといふことである。この香料は中世の人人が十字軍の時代から好むやうになつたものであるが、人々がそれをなくてはならないものにしたのは、そのころはまだ冷藏法が知られてゐなかつたので、肉や魚が非常に早く腐つて、胡椒なりにくづくなりをうんとふりかけなければとても食べられなかつたからである。

ヴェニス人とジェノア人とは地中海では大航海者であつたが、大西洋の沿岸を探檢した名譽はポルトガル人のものである。イスパニヤとポルトガルとはムーア人の侵入者との長年の爭ひから發達して來た愛國的元氣に充ちてゐた。かういふ元氣は、一旦それが存在する以上は、容易に新らしい方面へ向かせることの出來るものである。十三世紀に、國王アルフォンソ三世はイスパニヤ半島の西南の隅にあつたアルガルヴェ王國を征服してそれを自分の領土に加へた。つぎの世紀に、ポルトガル人はマホメット敎徒を逆襲して、ジブラルタル海峽を渡つてアラビヤ人の町であつたタリファの向ひ側のセウタやアルガルヴェのアフリカ領の首府であつたタンジエルを占領した。

かくして、彼等は探檢者としてその首途をなすやうに用意されてゐたのである。

一四一五年に、ポルトガルのジョン一世とゴーントのジョンの娘フィリッパとの子で、ヘンリー航海者として知られてゐるヘンリー王子がはじめて西北アフリカを組織的に探檢する準備をした。これより先き、その熱い砂ばかりの海岸はフェニキヤ人やノルマン人に訪ねられたが、彼等はそれを毛深い「野蠻人」(われ〳〵が今日ゴリラとして知るやうになつたもの)の住家として覺えてゐただけだつた。一つまた一つと、ヘンリー王子と部下の船長達とはカナリヤ群島を發見したり――一世紀前にジェノアの船が行つたことのあるマデイラ島を再び發見したり、それまでポルトガル人とイスパニヤ人とに漠然と知られてゐたアゾレス諸島を正しく海圖に記入したり、アフリカの西海岸にセネガル河の河口をかすかに認めて、それをナイル河の西の河口だと思つたりした。たうとう、十五世紀の中ごろまでに、彼等はヴェルデ岬やアフリカ海岸とブラジルとのほとんど中間に位するヴェルデ岬諸島やを發見した。

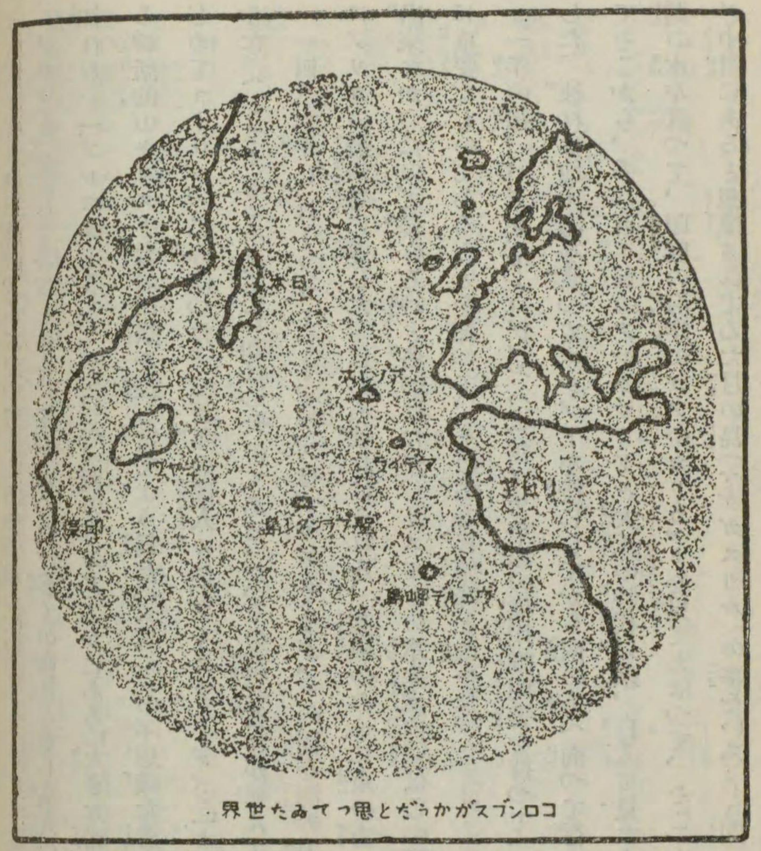
けれども、ヘンリーは大洋の水の探究にばかり身を委ねてゐたのではなかつた。彼れは一方でキリスト僧團の總裁であつた。これは十字軍の生きた遺物といはれた御堂騎士團が――それは一三一二年に、法王クレメンス五世が、フランスのフィリップ美王が自分の國の御堂騎士團員を焚殺してその一切の財産を沒收した機會に乘じて要求した時に廢してしまつたのだが――ポルトガルには續いてゐたのであつた。ヘンリー王子はその僧職の領地からあがる收入で度々の遠征準備をして、そしてサハラ

大沙漠やギネヤの海岸からはひつたところを探檢した。

けれども、彼れはまだ〳〵中世の子であつた。多くの時日を費し莫大の金を浪費したのは、えたいの知れない「プレスター・ジョン」といふ、「西の方のどこかにある」大きな帝國の皇帝であるといはれてゐる神話的のキリスト教の司祭を搜し當てよう爲だつた。この不思議な君主の話は十二世紀の中頃にはじめてヨーロッパに傳はつた。三百年の間人々は「プレスター・ジョン」とその子孫を見つけようとしてゐた。ヘンリーもその搜索に加はつたのである。が、その謎は彼れが死んでから三十年の後に解かれた。

一四八六年に、バーソロミュト・ヂアズはプレスター・ジョンの國を海の方から見つけようとしながら、アフリカの最南端に達した。はじめ彼れはそれを、强風のために東の方へ航海をつゞけて行くことが出來なかつたので暴れる岬と名づけたが、リスボンの水先案内達はこの發見が印度への航路を搜す上に重要なものであることを知つて、その名を喜望峰と改めた。

一年の後、ペドロ・ド・コヴィルハムはメヂチ家の信用證明書を持つて、一同じ目的の下に陸路を出發した。彼れは地中海を渡つてエジプトを後にしてから南の方へ向つて行つた。アデンに着いて、そしてそこから、千八百年前のアレクサンドル大王の時代以來、白人で見たものは殆どなかつたペルシヤ灣の水を渡つて、印度の海岸のゴアやカリカットを見てまはつて、そこで、アフリカと印度とのちやうど中間にあると想像されてゐた月の島(マダガスカル)の事をいろ〳〵聞いた。そこから彼れは引返し



コロンブスがかうだと思つてゐた世界

て、ひそかにメッカへ行つたりメヂナへ行つたりしてから、再び紅海を渡つて、一四九〇年にプレスター・ジョンの王國を發見した。プレスター・ジョンといふのはアビシニヤの王のことに外ならなかつたが、その先祖がキリスト教を採用したのは實に四世紀のことで、スカンヂナヴィヤへキリスト教の宣教師がはひつて行つた七百年も前であつた。

かういふ度々の航海が

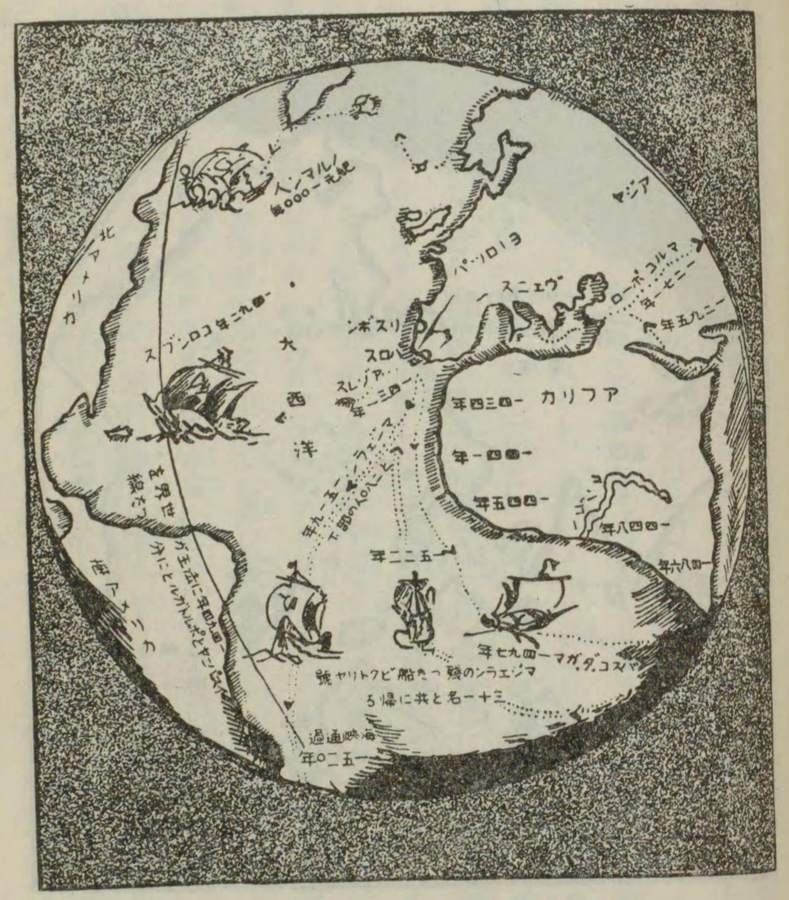
ポルトガルの地理學者達や製圖師達に、印度へ東方の海路で達することは出來るけれども、しかしそれは決してらくなことではないといふことを悟らせた。そこで、大議論が起つた。ある人々は探檢を喜望峰の東へつゞけようとした。他の人々は「いや〳〵、われ〳〵は大西洋を越えて西の方へ行かなければいけない。さうすれば支那へ行けるだらう」と言つた。

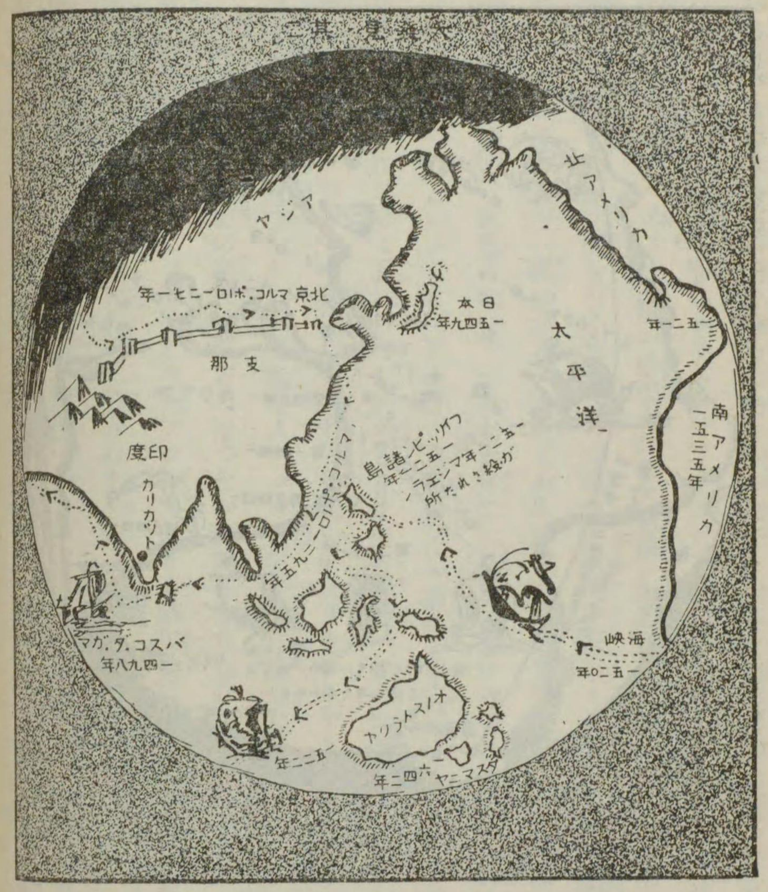
ここで明かにしておきたいことは、當時の知識ある人達が地球は煎餅のやうに平たいものではなくて圓いものであるといふことをかたく信じてゐたことである。プトレメウスの天動說は、紀元二世紀に生きてゐたエジプトの大地理學者クラウディヤス・プトレメウスが發明して說明を加へたもので、中世の人々の單純な要求を充たすには足りてゐたが、文藝復興時代の科學者達にはもう久しく棄てられてゐた。彼等はポーランドの數學家ニコラウス・コペルニクスがその研究の結果として地球は太陽をめぐつてゐる幾つかの圓い遊星の一つであると信じてゐたその說を容れてゐた。尤も、この發見は宗教吟味を——十三世紀にフランスとイタリヤとにゐたアルビジョア派とワルド派との異說（私有財產を信じないでキリストのやうに貧しく暮さうとした、まことに敬虔な人達の非常に溫和な異說）が、ちよつとの間ローマの司教達の絕對權を冒した時に設けられたローマ法王の裁判を——恐れて、三十六年間も發表されないでゐた。（出版されたのは一五四三年、彼れが死んだ年であつた。）けれども、地球の圓いといふことは熟練な航海者の間には一般に信じられてゐたので、そこで、わたしが前に言つた

やうに、彼等は東方の路と西方の路との長處をめい〳〵論じ合つたのである。

西方の路の主張者の中にクリストファー・コロンブスといふジェノアの水夫があつた。彼れは羊毛商の息子であつた。パヴィヤ大學の學生となつて數學と幾何學とを專攻したやうである。やがて彼れは父の商賣にはひつたが、間もなくわれ〳〵は彼れが東地中海のキオスへ商用で旅行してゐるのを見る。その後、イングランドへ渡つたといふ話であるが、それが羊毛を捜しに北方へ行つたのか船長として行つたのかわれ〳〵は知らない。一四七七年の二月に、コロンブスは（彼れの言葉を信ずれば）アイスランドへ行つたといふことであるが、事實はフェル群島まで行つただけらしい。ちやうど二月の寒い眞最中のことだつたので誰にしてもアイスランドと間違へさうなことである。ここでコロンブスは、十世紀にグリーンランドへ移住したり十一世紀にアメリカへ（レイフの船がラブラドルの海岸へ吹きつけられたので）行つたりした勇敢なノルマン人の子孫に逢つた。

それらの遠い西方の植民地がどうなつたかは誰も知らなかつた。レイフの弟のトルスタインの寡婦の夫になつたトルフィン・カールセフンのアメリカ植民地は、一〇〇三年に建てられたが、三年後にエスキモー人と不和になつたために續かなかつた。グリーンランドの方は、一四四〇年以來、移住民達から何の便りもなかつた。多分、グリーンランド人はみんな、そのころノルウェー人の半分を死なした黑死病のために死んでしまつたのらしい。それはとにかく、「遠い西の方の大きな國」といふ言傳へは


大西洋
アフリカ
年四三四一
年一四四一
年五四四一
年八四四一
年六八四一
年二二五一
年七九四一
年〇二五一
年五九二一
年五九一一
年五九一一
年一三九一
年一三九一
年一三九



大發見——東半球

年）からずつと彼れは印度へ行く西方の路の探求に身を委ねた。彼れはその航海の案をこまかく立てて見てポルトガルとイスバニヤとの宮廷へ送つた。ポルトガル人は、自分達が東方の航路を獨占してゐるつもりでゐたので、彼れの案には耳を傾けなかつた。イスパニヤでは、アラゴンのフェルヂナンドと

カスチルのイサベラとが一四六九年に結婚してイスパニヤを一つの王國にした時で、ムーア人を其最後の根據地であるグラナダから追拂はうと一心になつてゐた。危險な遠征などに使ふ金はなかつた。あればいくらでも兵士達のために入用だつた。

古來、自分の意見のために、この勇敢なイタリヤ人のやうに必死となつて戰はなければならなくされたものもめづらしかつた。けれども、コロンブスの話はいかにもよく知られてゐるので繰返すには及ぶまい。ムーア人は一四九二年の一月二日にグラナダを開城した。同じ年の四月に、コロンブスはイスパニヤの王と王妃との契約に署名した。八月三日、金曜日に、彼れは三艘の小さな船と八十八人の乘組員とを率ゐてパロス港を出帆した。乘組員の多くは囚人であつて、もしこの遠征に加はるならば刑罰は赦してやると言はれたのであつた。十月十二日、金曜日の朝の二時に、コロンブスは陸地を發見した。一四九三年の一月四日、コロンブスはラ・ナビダッドの小さな要塞に殘つた四十四人の者に別れを告げて（その中の一人だに生きては再び見られなかつた）歸路に向つた。二月の半ばにアゾレス島に着いて、そこでポルトガル人に牢屋へたゝつ込むと言つて嚇かされた。一四九三年の三月十五日に、彼れはパロスに着いて、連れて來た印度人（といふのは、印度の離れ島のどれかを發見したものと彼れは信じてゐたので、土人を赤色印度人と呼んだからである）と一しよに急いでバルセロナへ行つて恩人達に、自分の成功したことと支那やジパング（日本）の金や銀への路が今は兩陛下の御意

のまゝであることとを告げた。

氣の毒なことに、コロンブスはつひに本當の事は知らかなつた。晩年になつて、第四回目の航海に、南アメリカの本土に觸れた時に自分の發見に何か間違のあつたことに氣がつかなければならない筈だつた。ところが、彼れはヨーロッパとアジヤとの間には大陸などはまつたくなくて、自分は支那へ直通の路を見つけたものとかたく信じながら死んで行つた。

一方、ポルトガル人は、東方の航路にばかり終始してゐて、ずつと運がよかつた。一四九八年に、バスコ・ダ・ガマはマラバールの海岸に着いて、そして香料を積んでリスボンへ無事に歸つて來ることが出來た。一五〇二年に彼れは二度目を行つた。けれども、西方の路を行つた探檢の仕事はまことに思はしくなかつた。一四九七年と一四九八年とに、ジョン・カボットとその子のセバスチャン・カボットとが日本への路を發見しようとしたが、彼等はただ雪に鎖された海岸やニューフアウンドランドの岩が、五百年以前に、はじめてノルマン人に見られたのと同じまゝであるのの外は何も見なかつた。アメリゴ・ヴェスプッチは、イスパニヤの水先案内長となつたフロレンス人で、その名から新大陸の名は來たのであるが、彼れはブラジルの海岸は探檢したが、東印度らしいものは見つけなかつた。

一五一三年に、コロンブスが死んでから七年經つて、やつと本當の事がヨーロッパの地理學者達にわかりはじめた。ヴァスコ・ナンネッツ・ド・バルボアがパナマの地峽を越えて、有名なダリエンの峰に登

つて、そして、他の大洋の存在を暗示してゐるやうな渺茫とした水の擴がりを見たのである。

つひに、一五一九年に五艘の小さなイスパニヤの船から成る船隊が、ポルトガルの航海者フェルヂナンド・ド・マジェランの指揮の下に西方へ向つて（東方の路はまつたくポルトガル人の手中にあつて競爭が出來なかつたので）香料島を搜しに出帆した。マジェランはアフリカとブラジルとの間で大西洋を横斷して南方へ進んだ。そしてパタゴニヤ（大きな足をした人達の國）の最南端と火の島（ファイア・アイランド）と名づけたのは、土人が住んでゐる唯一のしるしである火を、ある晩、水夫達が見つけたからである）との間の狹い水道に達した。ほとんど五週間の間、マジェランの船はその海峽を吹きまくつてゐる恐ろしいあらしと吹雪との中に漂つてゐた。と、叛逆が水夫達の中に起つた。マジェランは恐ろしく嚴しい態度でそれを鎭壓した上、部下の二人を上陸させて、そこに殘つてゆつくりと自分達の罪を後悔させた。やつと、あらしが歇んだ。水道が廣がつた。マジェランは新らしい大洋へはひつた。浪は穩かで鏡のやうだつた。彼れはそれを平和な海（太平洋）と名づけた。そして、なほ西の方へと進んだ。彼れは九十八日の間陸を見なかつた。部下の者達は餓と渴との爲にほとんど死にさうになつて船の中の鼠を食つたが、鼠がまつたくゐなくなると今度は帆の片端をしやぶつて、やつと嚙むやうな餓を凌いだ。

一五二一年の三月に彼等は陸を見た。マジェランはそれをラドローンズ（泥棒の意である）の國と名づけたが、それは、土人達が手當り次第に何でも盜んだからである。そして、なほまた西の方へ香料

島へと進んだ！

再び陸が見えた。一群の淋しい島々である。マジェランはそれを主君チャールス五世の子フィリップ――歴史の上には不愉快な記憶を殘したフィリップ二世――の名を取つてフィリッピン群島と呼んだ。はじめマジェランは欵待されたが、キリスト教に改宗させようとして船の大砲を使つたので、土人のために、幾人かの船長や水夫と共に殺された。生き殘つた者達は殘りの三艘のうちの一艘を燒き棄ててまたその航海をつゞけた。彼等はモルッカ諸島――目ざして來た有名な香料島――を見つけ、ボルネオを見てチドルに着いた。そこで、二艘のうちの一艘は、この上使ふにしては水がはひり過ぎるので、乘組員と共にあとに殘つた。で、ビクトリヤ號はセバスチヤン・デル・カノが指揮の下に印度洋を横斷し、オーストラリヤ（十七世紀の前半にオランダの東印度會社の船がこの荒涼とした平坦な陸地を探檢した時まで發見されなかつた）の北海岸は見落して、非常な艱難の後にイスパニヤに着いた。

これがすべての航海のうちで最も顯著なものだつた。それは三年かゝつた。非常に多くの人と金とを犧牲にして成就されたのであつた。けれども、この航海に依つて地球は圓いものであるといふことと、コロンブスが發見した新らしい陸地は印度の一部ではなくて別の大陸であるといふことが實證されたのであつた。その時からずつと、イスパニヤとポルトガルとは印度貿易とアメリカ貿易との發達にその全力をつくした。この競爭者の間に戰爭の起るのを防ぐために、法王アレクサンドル六世（自

ら異教者であると公言しながらこの最も神聖な職に選まれた唯一の人）は深切にもグリーンヰッチの西經五十度に依つた境界線で世界を二つの等しいものに分けた。いはゆる一四九四年のトルデシラスの分割である。そこで、ポルトガル人はこの線の東に、イスパニヤ人は西に、おの〳〵その植民地を設けることになつた。これがアメリカ大陸はブルジルの外は全部がイスパニヤ領となり、印度の全部とアフリカの大部分とはポルトガル領となつて、その後イギリスやオランダの移住民が（法王の決定などに頓着せずに）これらの領地を奪ひ取つた十七八世紀までつゞいた所以である。

コロンブスの發見の報がヴェニスのリアルト（即ち、中世の株式取引所）に傳はると、忽ち恐しい恐慌が起つた。株も公債も四五割下落した。が、間もなく、コロンブスが見つけたのは支那への路ではなかつたことが分ると、ヴェニスの商人達はほつと安堵の太息をついた。ところが、ダ・ガマやマジェランの航海が、東方の水路で印度へ行くことが出來ることを實際に證明した。そこで、中世と文藝復興時代との二大商業中心地であつたジェノアとヴェニスとの支配者達は、コロンブスの言葉に耳を傾けなかつたことを後悔しはじめた。けれども、もう遲かつた。彼等の地中海は一つの内海になつた。印度や支那との陸上貿易は言ふにも足りない程度のものに衰微した。昔のイタリヤの榮華は去つた。大西洋は商業の新しい中心となり、從つてまた文明の中心となつた。そしてそのままで今日に及んでゐる。

ところで一つ、どんなにか不思議に文明が、あのずつとの昔、五千年以前に、ナイルの谷の住民が

歴史の記錄を書きはじめた時から進んで來たかを見て御覽。ナイル河から、それはメソポタミヤ（河と河との間の國）へ行つた。それからクリート、ギリシヤ、ローマの番が來た。內海は貿易の中心となつて、地中海に沿つた諸都市は藝術や科學や哲學や學問の住家となつた。十六世紀に再びそれは西へ移つて、大西洋に接してゐる國々を地球の主人公にした。

世界戰爭がヨーロッパの大國民に及ぼした結果が大西洋の重みを非常に減じたといふものがある。彼等は文明がアメリカ大陸を橫斷して新らしい住家を太平洋に見つけるであらうと見込んでゐる。けれども、わたしはこれを疑つてゐる。

西方への旅と共に船は次第に大きくなつて、航海者の知識もだん〳〵廣くなつて行つた。ナイル河やエウフラテス河の平底船はフェニキヤ人、エーゲ人、ギリシヤ人、カルタゴ人、ローマ人の帆船と取りかへられた。つぎにはこれらのものが棄てられてポルトガル人やイスパニヤ人の橫帆裝置の船になつた。やがてそれもまたイギリス人やオランダ人の全帆裝置の船のために大洋から驅逐された。

けれども、今日においては、文明はもう船にたよつてゐない。航空機が帆船や汽船の代りをしてゐる。それがこの後もつゞくであらう。つぎの文明の中心は航空機と水力との發達の如何によつて定まるであらう。そして、海は再び小さな魚族の靜かな住家となつて、むかし、彼等が人類の一等はじめの先祖達と共にその深い住家を分つた時のやうになるであらう。

佛陀と孔子

ポルトガル人やイスパニヤ人の發見は西ヨーロッパのキリスト教徒を印度や支那の人々とぢかに接觸させることになつた。彼等も勿論キリスト教がこの地上で唯一の宗教でないことは知つてゐた。マホメット教徒もあれば北アフリカの異教の蠻族のやうに棒や石や枯木を拜んでゐるものもあつた。ところが、印度と支那とで、キリスト教徒の征服者達は、別にまた數百萬の者が、かつてキリストのことなど聞いたこともなければまた聞かうともしないで、自分達は自分達の數千年來の宗教を、西方のものよりずつとよいものと思つてゐるのを見出した。この書物は人類の物語であつて、ヨーロッパ人と西半球とに限つた歴史ではないのだから、君達もまた、その人達の教とその人達の模範とが、この地上における〳〵の旅仲間の大多數の者の行爲や思想に感化を與へつゞけてゐる二人のことをも相當に知つてゐなければならない。

印度では、佛陀が偉大な教師と認められてゐる。その事蹟は面白いものである。彼はキリスト降誕前六世紀に、大ヒマラヤ山脈の見えるところで生れた。このヒマヤラ山は、そのまた四世紀前に、アリヤン人種（といふ名は印度ヨーロッパ人種の東方の支族が自分でつけたものである）の偉大な指

導者の中の隨一人であるザラツストラ（或ひはゾロアスター）が、部下の者に、この世は惡神アーリマンと善神オルムズとの絶間のない爭鬪に外ならないといふことを敎へたところである。佛陀の父は釋迦族の中の有力な首長で淨飯王と言つた。母は摩耶夫人といつて、隣國の王の娘であつた。彼女はごくまだ若い少女のころに結婚した。けれども、多くの月が遠い山脈の向うに沈んで行つても、彼女の夫は自分の後を嗣いでその國を治むべき世嗣がなくてゐた。が、やつと、彼女が五十歲の時にその日が來たので、彼女は自分の赤子がこの世に生れて來る時には自分の故鄕の人々の間にゐようとして出發した。

が、摩耶夫人がその幼い時代を過したコリヤン族の國までの旅路は長かつた。ある夜、彼女はルンビニー園の涼しい木立の中で休んでゐた。そこで彼女の息子は生れた。息子は悉達多といふ名をつけられたが、われわれは彼れを佛陀として知つてゐる。それは「聖者」の義である。

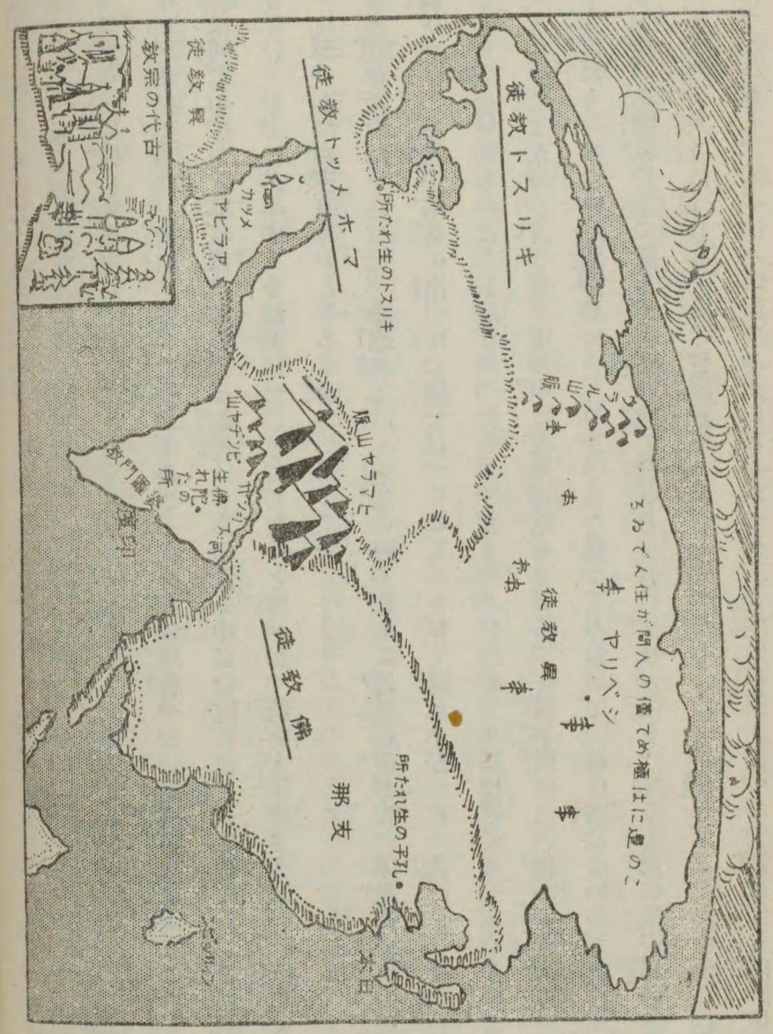
時が經つにつれて、悉達多は成長して美しい若い王子となつた。そして十九歲になつた時に、從妹の耶輸多羅姬と結婚した。つぎの十年間は、あらゆる苦痛やあらゆる惱みから遠ざかつて、王宮の奧深いところで、父の後を嗣いで釋迦族の王となる日を待ちながら暮してゐた。

ところが、三十歲の時に、馬車を王宮の門の外へ驅つて行つて、ふと、一人の年老いた、勞働のためこ疲れはてた、その弱い四肢ではとても人生の重荷を運ぶことなど出來さうもないやうな人を見た。

悉達多は御者の車匿にその老人を指さしたが、車匿は、あゝいふ貧乏なものはこの世の中にはいくらでもあつて、誰も一向かまひつけないのだと答へた。若い太子は非常に悲しかつたが、何も言はずに歸つて妻や父や母と共に住んで幸福にならうとした。しばらく經つて後に彼れは二度目に王宮を出た。彼れの馬車は恐ろしい病氣に罹つて惱んでゐる一人の人に出會つた。悉達多は車匿にこの人の惱みの原因は何であるかと尋ねた。ところが御者は、この世の中には病人は大ぜいあるが、これはどうしやうもないことでもあれば、また大したことでもないと答へた。若い太子はさう聞いた時に非常に悲しかつたが、また家族の者のところへ歸つた。

幾週間か經つた。ある晩、悉達多は川へ水浴に行くために馬車を命じた。不意に彼れの馬が、死人の腐りかけた身體が路傍の溝の中に横たはつてゐるのを見て跳ねあがつた。若い太子は、いままでかういふものを見せられたことがなかつたので、ぎよつとしたが、車匿はこんなつまらないことを氣にかけるものではないと言つた。世の中は死人で充ちてゐる。生者必滅はこの世の掟である。何一つとして永遠なものはない。墓がわれ〳〵のすべてを待つてゐるので、逃れ路はないのである。

その晩、悉達多が家に歸ると音樂を以て迎へられた。彼れが出かけてゐる間に妻が男の子を生んだのであつた。人々は今しも王家の世嗣が生れたのを知つたところで、喜んで、太鼓を鳴らして祝つてゐた。けれども、太子はその喜びを共にしなかつた。人生の幕があがつて、彼れは人間の生存の恐ろ



世界の三大宗教

しさを知つたのである。死人の姿や惱めるものの姿が恐ろしい夢魔のやうに彼れにつきまとつてゐたのである。

その夜は月が明るく輝いてゐた。悉達多は目覺めていろ〳〵の事を考へはじめた。生存の謎が解かれるまではまたと再び幸福になれさうもなかつた。彼れは自分が愛してゐるすべての者から遠く離れたところでそれを解かうと決心した。そこで、そつと耶輸陀羅が赤兒と共に眠つてゐる部屋へ行つた。それから忠實な車匿を呼んで從ふやうにと言つた。

二人は一しよに夜の闇にまぎれて出て行つた。一人は魂の安息を求めるために、他の一人は愛する主人に忠義な家來であるために。

印度の人民の間を悉達多は數年の間さまよひ歩いてゐたが、ちやうどそのころ彼等は變りかけてゐた。彼等の先祖、卽ち土着の印度人は、戰爭好きのアリヤン人（われ〳〵の遠い親類）のために苦もなく征服されてしまつたので、爾來、アリヤン人が數千萬のすなほな小さな銅色人の支配者になり主人になつてゐた。その權力の座をいつまでも維持するために、彼等は人民をいろいろの階級に分つて、次第に非常に嚴しい「姓階」（註。社交、宗教、職業等を同じくする人々の世襲的階級であつて、他と交らない。）の制度が土人の上に厲行された。征服者である印度ヨーロッパ人の子孫は最高の「姓階」、卽ち軍人と貴族との階級に屬してゐた。つぎには僧侶の姓階が來た。これらの下に百姓と商人とがつづいた。ところが、パーリアと呼ばれた古來

の土人はいやしい悲慘な奴隷の階級を成して決して奴隷以外のものになることなど望まれなかつた。

人民の宗教までが姓階に關係してゐた。むかしの印度ヨーロッパ人はそのさまよひ歩いた數千年の間にいろ〳〵な不思議な事件に出會つてゐた。これらの事が吠陀といふ書物の中に集められてゐた。この書物の言葉は梵語と呼ばれるもので、ギリシャ語やラテン語やロシヤ語やドイツ語やその他四十餘もあるヨーロッパ大陸のいろ〳〵な言葉に密接に關係してゐる。上の三つの階級のものはこれらの聖典を讀むことが出來た。けれども、パーリア（卽ち最も低い階級のいやしいもの）はその內容を知ることを許されなかつた。貴族なり僧侶の階級の者なりがもしパーリアに聖典を學ぶことを敎へでもしようものならそれこそ大變だつた！

で、印度の住民の大部分はみじめな暮しをしてゐた。この地上が彼等にはほとんど何等の喜びをも與へなかつたので、苦患からの救ひはどこか他のところで見つけなければならなかつた。彼等は想ひを來世の幸福に凝らしてそこから多少の慰めを得ようとした。

そこでブラアマが（一切衆生の父で、生と死の最高の支配者であると印度人は思つてゐた）完成の最高の理想として禮拜された。ブラアマのやうになることが、卽ち富や權力に對する一切の欲望をなくなすことが、生存の最も高尙な目的であると思はれた。神聖な思想の方が神聖な行爲よりも大事なものと思はれたので、多くの人々は荒野へ行つて木の葉を食べてその肉體を餓ゑさせて、そしてその

魂を智であり善であり慈悲であるブラアマのかたじけない榮光を默念することで養はうとした。

悉達多は、さういふ隱遁者達が騷がしい町や村から遠く離れたところで眞理を求めてゐるのを度々見てゐたので、自分もその人達のやうにしようと決心した。彼れは髮を切つた。眞珠やルビーを外して別れの言葉と共に、いつも忠實であつた車匿に託して家族の許へ送り返した。一人の從者もなしに、若い王子はそれから荒野へはひつて行つた。

間もなくその尊い行ひの噂が山々に擴がつた。五人の青年が彼れのところへ來て、彼れの悟りを聽かせてくれるやうにと願つた。彼れはもし彼等が自分に隨ふならば師匠にならうと言つた。みんなが同意したので、彼れはみんなを山の中へ連れてはひつて、六年の間、ビンヂャ山の淋しい峰々の間で自分の知つてゐることをみんな說いて聞かせた。ところがこの修業期間の終りになつて、彼れは自分が完成の域にはまだ〳〵遠いことを感じた。棄てて來た世間がやはりまだ彼れを誘惑してゐた。そこで彼れは弟子達に告げて自分の許を去らした後で、四十九晝夜のあひだ斷食して、古い木の根元に坐つてゐた。つひに彼れはその報いを受けた。五十日目の晩の薄闇の中に、ブラアマがその姿を忠實なしもべに現はしたのである。その時からずつと、悉達多は佛陀と呼ばれて、人間をその不幸なはかない運命から救ひ出すために來た聖者として尊敬された。

その後の四十五年間を、佛陀はガンジス河の谷間で送りながら、一切の人にやさしくすなほにする

やうにといふその單純な教を說いてゐた。紀元前四八八年に、彼れは高齡になつて、幾百萬の人々に慕はれながら死んだ。彼れは自分の教を一つの階級のもののためには說かなかつた。一等低い階級のパーリアでさへ彼れの弟子となることが出來た。

ところが、これは貴族や僧侶や商人達の氣に入らなかつたので、彼等はその全力を擧げて、一切の生物の平等を認めて人々に一層幸福な境涯における再生（受肉）の希望を與へてゐる教を滅さうとした。そして滅してしまふや否や、彼等は印度の住民に勸めて、斷食したり難行したりして罪の深い肉體を苦しめる婆羅門教の古い教に歸らせようとした。けれども、佛教は滅しつくされなかつた。おもむろに、佛陀の弟子達はヒマラヤの谷を越えてさまよひながら支那へ移つた。彼等は黃海を越えて教祖の悟りを日本の住民に傳へた。そして、暴力を用ひてはならないと言つた偉大な師匠の教に忠實に從つた。今日ではいよ〳〵多くの人が佛陀を自分達の教師と認めて、その數はキリストとマホメットとの信者を合せたよりももつと多くなつてゐる。

一方孔子は、支那のむかしの賢者であるが、彼れの話は簡單である。彼れは紀元前五五〇年に生れた。靜かな、氣高い、無事な生活を送つてゐたが、その當時の支那には强い中央政府がなかつたので、支那の住民は山賊や强盜共の好きなやうにされてゐた。この山賊や强盜共は町から町へと行つて、掠奪したり、盜んだり、人殺しをしたりして、北支那や中央支那の繁華な平野を餓ゑた人々の荒野に化

してゐた。

孔子は自分の國人を愛してゐたので、彼等を救はうとした。が、暴力を用ひることが大して有效だとは思はなかつた。彼れは極めて平和な人だつた。また、新らしい法律を多く發したところで人民をよくすることが出來るとも思はなかつた。ただ一つの可能な救ひは心の變化から來るといふことを知つて、彼れは東アジヤの廣い平野に住んでゐる幾百萬の同胞の品性を變へるといふ一見のぞみのない仕事に手を着けはじめた。支那人はもと〳〵宗教（われ〳〵がその言葉を解するやうな）には大した興味を持つてゐなかつた。彼等は太古の民と同じやうに惡鬼や幽靈を信じてゐた。けれども、彼等は一人の豫言者をも持たなければ、また、一つの「天啓の眞理」をも認めてゐなかつた。孔子は實に、偉大な道德上の指導者の中で、幻影をも見なければ、神の使として來たものだと宣言もしなければ、また、かつて一度として、天上の聲に依つて靈感を得たと言ひもしなかつた唯一の人である。

彼れは實によく物のわかつた深切な人で、どちらかといへば淋しい漂泊の旅をつゞけながら、いつも離さなかつた笛の憂鬱な音色に心を託してゐたのであつた。彼れは認められることを願はなかつた。人が自分に從つたり或ひは自分を崇拜したりするのを求めなかつた。彼れはわれ〳〵に古代ギリシヤの哲學者達を、殊にストイック派の哲學者達を――ただ心に疚しくないといふ意識と共に來る魂の平和の外は何の報酬をも望まないで、正しく暮し、正しく考へることを念としてゐた人々を――想ひ

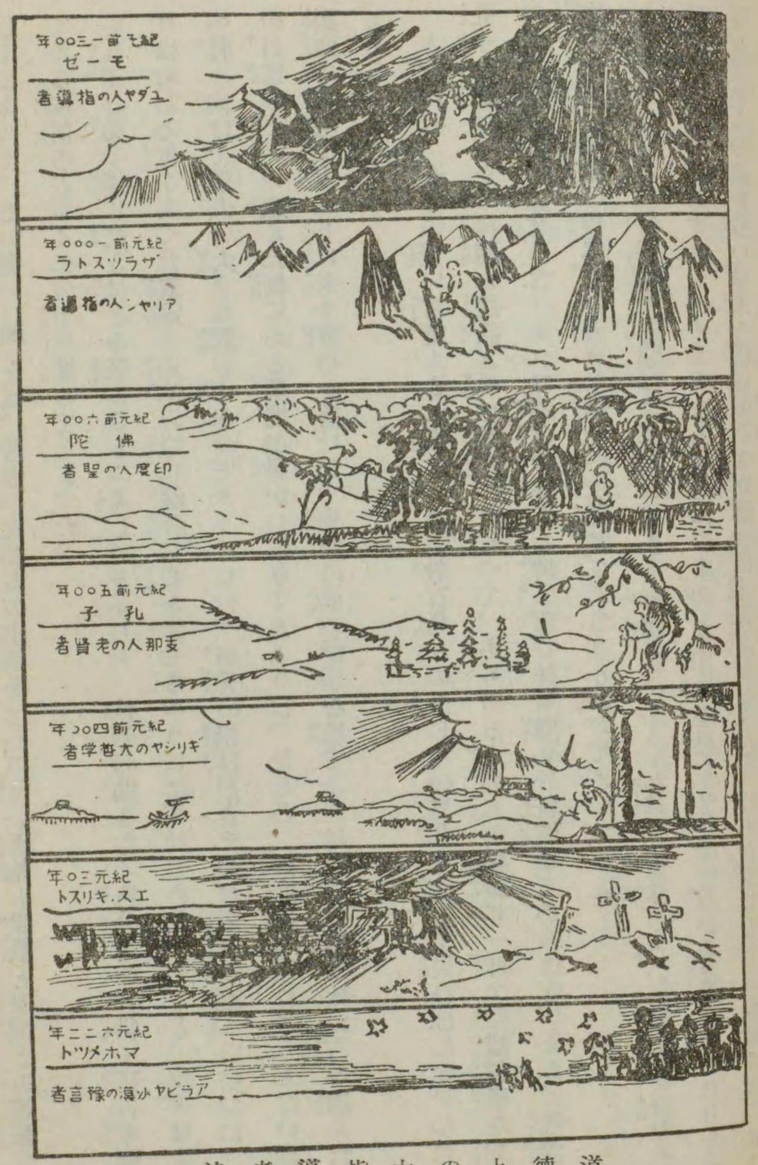
起させる。

孔子は非常に寛容な人だつた。わざ〳〵老子を訪ねて行つたりした。老子は他の偉大な支那の先覺者で、「道教」――はじめて金誡を支那の言葉にしたもの――といふ哲學系統の創始者である。

孔子は何人にも憎みを示さなかつた。彼れは極度の沈着の德を敎へた。眞の價値ある人は、孔子の敎に從へば、怒のために激したりするやうなことがなく、いかなる運命が身に降りかゝらうとも堪へ忍んで、凡そ起つて來る事は何事でも、何等かの方法で、最善を目ざしてゐるものであるといふことを悟つてゐる聖賢達のやうに諦めるといふのである。

はじめはほんの僅かな弟子しか彼れにはなかつた。が、だん〳〵その數が殖えた。紀元前四七八年に、彼れが死ぬ前には、支那の王や諸侯達が幾人もその弟子となつてゐた。キリストがベツレヘムに生れたころには、孔子の哲學はすでに多數の支那人の精神の糧の一部となつてゐた。そして、爾來ずつと彼等の生活を感化しつゞけてゐる。が、その純粹な本來の姿ではない。大抵の宗敎が時が經つと共に變るものである。キリストは謙遜と柔和と世俗の野心から離れることとを說いたのだが、ゴルゴタの事件から十五世紀經つた後には、キリスト敎會の首長はベツレヘムの淋しい廐とは何の關係もないやうな建物を建てるために無數の富を費してゐた。

老子は金誡を敎へたのに、三世紀も經たないうちに、無智の群集は彼れを非常に殘酷な實在の神と



道德上の大指導者達

してしまつて、その賢い誡をば、普通の支那人の生活を一つの長い恐怖と畏敬と戰慄との連續にしてゐる迷信のがらくたの下に埋めてしまつた。

孔子は弟子達に父と母とを敬ふことの美しさを示した。彼等は間もなく自分達の子供や孫の幸福よりはむしろ世を去つた親達の追憶の方に餘計に心を寄せるやうになりはじめた。わざと、彼等は未來へ背を向けて過去の大きな闇の中をのぞかうとした。祖先の崇拜がきまつた宗教の法式になつた。山の日當りのいい肥えた側にある墓地を動かしたりするよりは、むしろ、到底何も穫れさうもない他の斜面の不毛な岩の上に米や麥やを蒔いた。先祖の墓の神聖を瀆すよりはむしろ飢ゑ死ぬ方を選んだのである。

と同時に、孔子の賢い言葉もまた東アジヤの數百萬人の上にその感化を決して失ひはしなかつた。孔子の教は、その深邃な說話と鋭い觀察とでもつて、あらゆる支那人の精神に一味の常識哲學を加へてその全生涯を感化した。それは湯氣の滿ちた地下室に住む賤しい洗濯屋であらうと、また、奧深い宮殿の高い城壁の中に住む大きな領土の支配者であらうと同じであつた。

十六世紀になつて、西歐の熱烈ではあつたがやゝ野蠻なキリスト教徒が東洋の古い教と面を合せた。はじめのイスパニヤ人やポルトガル人は佛陀の平和な彫像を見たり孔子の尊い畫像を眺めたりしたが、これらの遠い昔の微笑を湛へてゐる立派な豫言者達をどうしていいか少しも知らなかつた。そこ

で無造作に考へて、これらの變な神々は偶像崇拜の異教の何かを現はしてゐるただの惡魔に過ぎないものであつて、教會のまことの子等の尊敬には價しないものであるときめてしまつた。そして、佛陀なり孔子なりの精神が香料や絹の貿易を妨げるやうに見えたりすると、ヨーロッパ人はいつでも小彈や葡萄彈でその「惡勢力」を攻擊した。このやり方はたしかに非常な不利益を招いた。そして、惡感といふ不愉快な遺產をわれ〳〵に殘したが、この感情は近い將來には少しもよくなりさうもない。

宗教改革

人類の進歩は永久に前後に搖れてゐる巨大な振子に比較するのが一等よい。文藝復興時代の宗教に對する冷淡と文學美術に對する熱情とのあとには、宗教改革時代の文學美術に對する冷淡と宗教に對する熱情とが來た。

勿論、君達も宗教改革のことは聞いてゐよう。また、少數ではあつたが勇ましい巡禮の群が、「信仰の自由」を得るために大洋を渡つて行つたことをも考へるだらう。だん〳〵時が經つにつれて、いつの間にか、(殊に、われ〳〵新教の國では)宗教改革は「思想の自由」と同じ意味になつて來た。マルチン・ルーテルは進歩の前衞軍の首領と目されてゐる。けれども、歴史が、われ〳〵の光榮ある先祖達に與へられたお世辭の連續よりも以上のものであつて、ドイツの歴史家ランケの言葉を借りて言へば、「實際に起つた」事を發見しようとするものであるとすれば、過去の多くの事は非常に違つたものになつて來る。

およそ人生の事でまつたく善てあるとかまつたく惡てあるとかいふものは、極めて少い。黑か白かのはつきりしてゐるものは極めて少い。で、あらゆる歴史上の事實の善の側と惡の側とのすべてを眞に說明するのが正直な歴史家の義務である。われ〳〵はみんな個人的の好き嫌ひを持つてゐるのでこれをするのは非常にむづかしい。けれども、出來るだけ努めて公平にして、偏見などにあまり動かされないやうにしなければならない。

一例としてわたし自身の場合を取つて見よう。わたしは眞の新教國中の眞の新教の中心地で成長した。十二歳になるころまでは嘗て一人の舊教徒をも見なかつた。で、はじめて彼等に出會つた時には非常に不愉快な氣がした。いくらか恐れもした。わたしは、アルバ公がオランダの人民をルーテル派やカルビン派の新說から矯め返さうとした時に、數千人のものがイスパニヤの宗教吟味のために燒殺されたり絞殺されたり手足を切斷されたりした話を知つてゐた。それがみんなわたしには生き生きと見えてゐた。まるで前の日にでも起つたことのやうに思はれた。それがまた起らないものでもなかつた。もう一度セント・バーソロミューの夜(註。一五七二年八月二十四日、その例祭の夜に、フランスのパリーで新教徒を大に虐殺したこと。)が來て、あはれな小さなわたしを、ちやうど氣高いコリニー提督の身に起つたやうに、寢卷のままで虐殺して、そして死骸を窓から拋り出すまいものでもなかつた。

その後しばらくしてから、わたしは舊教國へ行つて幾年かの間住んでゐた。わたしはその國の人達

がわたしの以前の同國人よりもずつと氣持がよく、ずつと寛大で、同じやうに聰明なのを知つた。わたしは大いに驚いて、はじめて宗教改革には舊教の見方も新教の見方とまつたく同じやうにあつたことを發見した。

勿論、十六七世紀の人達は、實際に宗教改革の渦中に住んでゐたので、そんな風には物事を見なかつた。自分達はいつも正しく、敵はいつも不正であつた。それは首を絞るか絞られるかの問題だつたので、兩方共に絞る方になることをえらんだ。これは人間として當然のことで、それがために咎めを受けようはないのである。

今、一五〇〇年に——記憶し易い年で、その年に皇帝チャールス五世が生れた——見えてゐた世界の方へ目を轉ずると、われ〳〵が見る有樣はかうである。中世の封建の無秩序がだん〳〵なくなつて、あとには秩序ある中央集權の王國が出來てゐる。すべての君主の中で最も勢力のあるのは、その時まだ搖籃の中の赤兒であつた大チャールスである。彼はフェルヂナンドとイサベラとの孫であり、また、最後の中世の騎士であるハプスブルグ家のマキシミリヤンとその妻のマリイ——チャールス剛膽公といふ、覇氣に富んだブルグンド公で、フランスとの戰には勝つたが、獨立したスヰスの農民のために殺された人の娘——との孫である。で、子供のチャールスは期せずして地圖の大部分の、即ち、父母、祖父母、伯叔父、從兄弟姉妹及び伯叔母のドイツ、オーストリヤ、オランダ、ベルギイ、イタリヤ及びイスパニヤにある全領土に、彼等のアジヤ、アフリカ及びアメリカにある全植民地を合したものの世嗣となつた。が、妙な因緣で、彼れはガンのフランドル伯の城で——ドイツ人が最近ベルギーを占領してゐた間、牢獄として使つたあの城で——生れたので、イスパニヤ王でありドイツ皇帝でありながら、フランドル人の訓練を受けてゐる。

父は死んで、(毒殺されたと一般には言はれてゐるが、それはまだ證明されてゐない)母は氣が違つてゐたので、(死んだ夫の遺骸を納めてある柩を持つて領内をぐる〳〵とまはつてゐる)子供は叔母のマアガレットの嚴しい薫陶に任されてゐる。ドイツ人やイタリヤ人やイスパニヤ人や無數の新らしい人種やを餘儀なく支配しながら、チャールスは成長してフランドル人に、即ちカトリック教會の眞の信者になるが、しかし、宗教上の異說を容れないといふやうなことはまつたく嫌つてゐる。彼れは少年としてもまた大人としても、どちらかと言へばなまけ者である。けれども、運命のまはり合せで、世界がちやうど宗教上の熱情の渦中にある時に世界を支配するやうになつてゐる。で、斷えずマドリードからインスブルックへ急いだりブリュージからウィーンへ急いだりしてゐる。彼れは平和を愛し靜寂を愛してゐながら常に戰つてゐる。五十五歳の時に、われ〳〵は彼れがまつたくいやになつた人類の方へ、さも憎らしさうに、さも馬鹿らしさうに、その背を向けてゐるのを見る。それから三年後に、彼れは非常に疲れた失望した人になつて死んでゐる。

これでチャールス皇帝のことは濟んだ。教會、卽ち世界の第二の大勢力はどうか？　教會も中世のはじめに、異教徒を征服して彼等に敬虔な正しい生活のすぐれてゐることを示さうとして立つたころは非常にちがつてゐる。第一に、教會は富裕になり過ぎてゐる。法王はもはや貧しいキリスト教徒の群の牧者ではない。彼れは大きな宮殿に住んで美術家達や音樂家達や名高い文學者達に取りまかれてゐる。その教會や禮拜堂は新らしい繪で蔽はれてゐて、その繪の中の聖徒達は實際に必要であるより以上にギリシヤの神々のやうな恰好をしてゐる。法王はその時間を國事と美術とに不平均に分つてゐる。國事はその時間の一割を取つてゐる。他の九割はローマの彫像や、近ごろ發見されたギリシヤの瓶や、新らしい夏別莊の設計や、新らしい芝居の稽古などといふ本當の興味の方へ向けられてゐる。大司教達や樞機員達は法王のまねをしてゐる。司教達は大司教達をまねようとしてゐる。けれども、村の司祭達は依然として忠實にその務めを盡してゐる。彼等は不德な世界や美だの快樂だのを愛する異教じみた事やから遠ざかつてゐる。また、修道士達が素朴に貧しく暮すといふ昔の誓を忘れてしまつて、世間の非難さへあまり惹起さなければ平氣で樂しく暮さうとしてゐるやうに見える修道院からも離れてゐる。

最後に、一般の人民がゐる。彼等は今までのいつよりもずつと安樂に暮してゐる。ずつと榮えてゐる。ずつといゝ家に住んでゐる。彼等の子供達はずつといゝ學校へ行つてゐる。彼等の町々は以前よ

りもずつと美しくなつてゐる。彼等の銃砲は彼等をその舊敵と——數世紀の間彼等の貿易にいかにもひどい稅を課してゐた泥棒貴族達と——同等なものにしてゐる。これで宗教改革時代の主要な役者のことは濟んだ。

今度は一つ、文藝復興がヨーロッパに何をしたかを見よう。さうすれば、君達にも學問や藝術の復興につゞいてどうでも宗教問題の復興が來なければならない所以が分るであらう。文藝復興はイタリヤにはじまつた。そこからそれはフランスへ擴がつた。イスパニヤでは——五百年にわたつたムーア人との戰爭のために、人民が、凡そ宗教上の事といへばむやみに熱狂的にむやみに偏狹になつてゐたので——まつたく成功しなかつた。範圍はだん〳〵廣く〳〵なつて行つたが、しかし、一旦アルプスを越えるや否や、文藝復興は變化を受けた。

北ヨーロッパの人民は非常に違つた氣候のうちに住んでゐるので、南方の人民とはまつたく反對の人生觀を持つてゐた。イタリヤ人は戶外のうららかな空の下に住んでゐた。彼等に取つて笑つたり歌つたり樂しくしたりしてゐることは容易であつた。が、ドイツ人、オランダ人、イギリス人、スウェーデン人はその時間の大部分を室內で暮しながら、氣持のいい小さな家の閉した窓を打つ雨の音を聽いてゐた。彼等はさうむやみには笑はなかつた。何事をももつとまじめに取つた。彼等は自分達の不滅の靈魂をいつも感じてゐる事をじやうだんにしたりするのを好まなか

つた。文藝復興の「人道的」な部分は、卽ち書物や、古代作家の研究や、文法や教科書は非常に彼等の興味を惹いた。けれども、昔のギリシヤやローマの異教文明に一途に歸ることは――それがイタリヤでは文藝復興の主要な結果の一つであつたが――彼等の心を恐ろしさで一ぱいにした。

けれども、法王職や樞機員會議（註。ローマ法王廷の七十樞機員から成る會議）はイタリヤ人でほとんど全部が組織されてゐたので、彼等は教會を樂しいクラブに變じて、そこで人々は美術や音樂や劇やを論じたが、宗教のことには減多に及ばなかつた。これがために、まじめな北方とずつと文明ではあつたがのんきで無頓着な南方との割目はます〳〵大きく〳〵なつて來たが、でも、だれも教會を脅かしてゐた危險などには氣がつかなかつたやうである。

なぜ宗教改革がスウェーデンなりイギリスなりに起らないでドイツに起つたかといふことを說明するに足るいくつかの小さな理由はある。ドイツ人はローマに對してむかしから怨みを持つてゐた。皇帝と法王とのはてしのない爭ひが相互にいやな氣持を起さしてゐた。他のヨーロッパの國々では、政府が强い國王の手中におかれてゐたので、支配者はいざと言へば司祭達の貪慾に對して自分の臣民を保護することが出來た。が、ドイツでは影のやうな皇帝がごた〳〵の絕えない小君主の群を支配してゐたので、すなほな市民達は一層直接に司教や管長などの好きなやうにされてゐた。これらの高僧達は文藝復興時代の法王達の遺樂であつたあのすてきに大きな教會堂のために巨額の金を集めようとしてゐた。ドイツ人は自分達が罰金でも取られてゐるやうな氣がしたので、勢ひそれを好まなかつた。

それに、稀にしか擧げられない事實であるが、ドイツは印刷機の出來たところであつたといふこともある。北ヨーロッパでは書物が廉く、聖書はもはや司祭だけが所持して說明する神祕な寫本ではなくなつた。父親にも子供達にもラテン語のわかる多くの家族の常用書であつた。で、教會の規則に反したことではあつたが、うちぢゆうのものがそれを讀みはじめた。と、司祭達が彼等に話してゐた多くの事が、聖書の本文に依ると、いくらか違つてゐるのを發見した。そこで疑ひが起つた。人々は疑問を尋ねはじめた。そして疑問は、それが答へられない時には、ともすれば大變な面倒を惹き起すものである。

攻擊がはじまつたのは、北方の人道派の人達が修道士達に對して火蓋を切つた時からである。心の奧の奧では、彼等はまだ〳〵多くの尊敬を法王には抱いてゐたので、その法王さまには鋒先を向けなかつた。けれども、怠惰な、無智な修道士達が、その富裕な修道院の建てめぐらした塀のかげに住んでゐたので、それをばまづ的にした。

が、この戰爭の指揮者は、まつたく奇態なことに、非常に忠實な教會の子であつた。ゲラルド・ゲラルドズーン、卽ちデシデリウス・エラスムス（と、いつも呼ばれてゐる）はオランダのロッテルダムに生れた貧しい少年であつて、トマス・ア・ケンピスが卒業したと同じデヴェンターのラテン語學校で教育

を受けた。彼れは司祭となつて、しばらくの間、或修道院に住んでゐた。その後、諸方を旅行して見聞したことを書いたりした。彼れがはじめて公刊小冊子の作者（今日ならば雜誌記者である）として立つた時に、世間はちやうどその時出版された『無名な人々の手紙』といふ匿名の書簡集を非常に面白がつてゐた。これらの手紙の中には、中世末期の修道士達の一般に愚鈍で傲慢であつた事が今日のはやり唄か何かを思ひ出させるやうな變なドイツ化したラテン語のへぼくた歌で暴露されてゐた。エラスムス自身は非常に博學なまじめな學者であつて、ラテン語にもまたギリシヤ語にも達してゐて、はじめて信用の出來る新約全書の翻譯を――ギリシヤ語の原文の訂正版と竝べてラテン語に翻譯したものを――われ〳〵に與へた人である。けれども、ローマの詩人サルストと同じやうに、彼れは「唇に微笑を含んで眞理を說く」ことからわれ〳〵を妨げるものは何もないといふことを信じてゐた。

一五〇〇年に、トマス・モーア卿をイギリスに訪ねた時に、彼れは數週間かかつて『愚人讃美』といふ滑稽な小冊子を書いて、その中で修道士達と彼等を輕信してゐる追隨者達とを滑稽といふあらゆる武器の中で一番危險なもので攻擊した。この小冊子は十六世紀の一番よく賣れた本であつた。ほとんどあらゆる國語に翻譯されたので、人々は自然とエラスムスの他の書物にも注意し出した。これらの他の書物の中では、彼れは敎會の多くの弊害の改革を唱道して、キリスト敎の信仰を大に復活させようとする自分の事業を助けてくれるやうにと仲間の人道派の人達に訴へてゐた。

けれども、これらの結構な計畫からは何の效果も來なかつた。エラスムスはいかにも中庸を得た寬大な人だつたので、敎會の敵の多數のものの氣に入らなかつたのである。彼等はもつとしつかりした指揮者の出るのを待つてゐた。

そこへ來たのがマルチン・ルーテルである。

ルーテルは北ドイツの農夫であつたが、非常にいい、頭と非常にいい度胸とを持つてゐた。大學に學んで、エルフルト大學のマスター・オブ・アーツの學位を得たが、後に、ドミンゴ派の修道院にはひつた。その後、ウィッテンベルヒの神學校の敎授になつて、故鄕サクソニヤの面白くもない農家の少年達に聖書を說きはじめた。ひまな時間が澤山あつたので、彼れはそれを舊新約全書の原文の研究に使つた。と、間もなく、キリストの言葉と法王や司敎達が說いてゐる言葉との間に大變な相違があるのを知りはじめた。

一五一一年に、彼れは公用でローマへ行つた。ボルジヤ家から出た法王アレクサンドル六世は、息子や娘のためをはかつて自分が金持になつた人だが、この時はもう死んでゐた。その後繼者のユリウス二世は、非難するところのない人格の人であつたが、その時間の大部分を戰爭と建築とに費してゐて、このまじめなドイツの神學者に敬虔の念を起させなかつた。ルーテルはひどく失望した人になつてウィッテンベルヒに歸つて來た。ところが、もつと惡いことがつづいて起らうとしてゐた。

巨大なセント・ペートル教堂は、法王ユリウスが自分の無辜の後繼者達に完成させようとしてゐたものであつたが、まだ半分も出來ないうちに、すでにもう修繕の必要が起つて來た。ところが、アレクサンドル六世が法王の財産をすつかり使ひつくしてゐたので、一五一三年にユリウスの後を繼いだレオ十世は、破産しかゝつてゐた。で、現金を集めるといふ故智を襲つた。彼れは「罪障消滅符」を賣りはじめた。罪障消滅符は一片の羊皮紙であつて、一定の金額を出してそれを買へば、罪ある者に、煉獄で費さなければならないことになつてゐる時間を減らしてくれるのであつた。これは中世末期の信條に依ればまつたく正しい事であつた。死ぬ前に本當に悔改めた者の罪を赦す力を教會が持つてゐる以上は、教會はまた、聖徒だちへ執成して、靈魂が暗い煉獄の中で淨化されなければならない間の時間を短くする權利をも持つてゐるといふのである。

が、不幸であつたことはこれらの罪障消滅符を金で賣らなければならなかつたことである。けれども、さうすれば容易に收入の道が得られた上に、いかにも貧しくて拂へなかつた者には、ただでもやれた。

ところで、たまゝ一五一七年に、サクソニヤで罪障消滅符を賣る獨占の地方がヨハン・テッツェルといふドミンゴ派の坊さんに與へられた。このヨハンは押しの強い賣手であつた。實をいふと、少し熱心すぎた。その商賣じみたやり方で小さな公國の信心深い人達をすつかり荒らしてしまつた。と、ル

ーテルは、正直な人だつたので、非常に怒つて、いきなりむてつぽうな事をした。一五一七年の十月三十一日に、彼れは城内の教會堂へ行つて、その戸の上に、罪障消滅符を賣ることを攻擊した九十五箇條の意見を書いた一枚の紙を貼つたのである。これらの箇條書きはラテン語で書かれてゐた。ルーテルは騷動を起すつもりは少しもなかつたのである。彼れは革命家ではなかつたのである。彼れは罪障消滅符の制度に反對して、それに就いて自分の考へてゐることを同僚の教授達に知つて貰はうと思つたのである。けれども、これはまだ僧侶や教授などの間のうち〳〵の事であつて、俗人の社會に向つて是非を問はうとしたのではなかつたのである。

が、不幸にして、その頃はちやうど世間全體が當時の宗教上の事件に興味を持ちはじめた時だつたので、何事を論じても、たちまちまじめな精神上の動搖を惹き起さずにはゐなかつた。二ケ月も經たないうちに、全ヨーロッパはサクソニヤの坊さんの九十五箇條を論じてゐた。誰も彼れもがみんなどちらかの味方になつた。名もないつまらぬ神學者といふ神學者がみんな自分の意見を發表した。法王廳の當局者は驚いた。彼等はウィッテンベルヒの教授に命じてローマへ來てその行爲の辯明をせよと言つた。が、ルーテルはフスが嘗てどんな目に遭つたかをよく覺えてゐた。彼れはドイッを出なかつた。で、破門を以て罰せられた。と、ルーテルは法王の令狀を喝采する群集の前で燒き棄ててしまつたので、その時から、彼れと法王との間の平和はもはや到底望まれなかつた。

自分には何の氣もなかつたのに、ルーテルは、いつか、不平を抱いたキリスト教徒の大軍の指揮者となつてゐた。ウルリッヒ・フォン・フッテンのやうなドイツの愛國者は彼れの保護に駈けつけた。ウィッテンベルヒやエルフルトやライプチヒの學生達はもし官憲がルーテルを投獄しようとでもするなら彼れを保護しようと申出た。サクソニヤ選帝侯（註。ドイツ皇帝を選擧する權利を持つてゐる諸侯のこと。）は更にまたこの熱心な青年達を保護した。で、何の害もルーテルがサクソニヤの地に留まつてゐる限りは加へられやうがなかつた。

これらのことが起つたのは一五二〇年のことである。チャールス五世は時に二十歳で、世界の半分の支配者として、法王とは親善な關係でゐなければならなかつた。帝はライン河畔のウォルムス市に國會を召集して、ルーテルに出席してその常軌を逸した行爲の辯明をするやうにと命じた。ルーテルは——今はドイツの國民的英雄であつた——行つた。彼れは嘗て書いたことなり言つたことなりをただの一語も取消すことを拒んだ。彼れの良心はたゞ神の言葉でだけ支配された。彼れはその良心のために生きもし死にもしようとした。

ウォルムスの國會は、熟議の上で、ルーテルを神と人との前に法律上の保護を奪はれた人であると布告して、そして總てのドイツ人に、彼れに住家なり食物なり飲物なりを與へる事を禁じ、また、この卑怯未練な異教徒が書いた書物のたゞの一語をも讀むことを禁じた。けれども、大改革者は何の危險にも遭はなかつた。北方のドイツ人の多數のもののためにその布告は極めて不正な亂暴至極な文書とし

して破毀された。非常に安全に、ルーテルはサクソニヤ選帝侯に屬してゐるワルトブルグ城に匿まはれたので、彼れは、そこで、法王のあらゆる權力を無視しながら、聖書の全部をドイツ語に翻譯して、人々がみんな自分で神の言葉を讀んで知る事の出來るやうにしようとした。

この時には、宗教改革はもはや靈的な宗教的な事柄ではなくなつた。近代の教會の建物の美しさを憎んでゐた人達はこの不安な時代に乘じて、自分達にわからなかつたので好まなかつたものを襲つて打ちこはした。貧乏になつてゐた騎士達は過去の損失を埋合さうとして修道院に屬してゐる領地をひッたくつた。不平を抱いてゐた諸侯達は皇帝の不在に乘じて自分達の勢力を張らうとした。餓ゑてゐる百姓達は、半きちがひの煽動者達の指圖のまゝに、時こそ來れと領主達の城を襲つて、むかしの十字軍士のやうな狂熱を以て掠奪したり人殺しをしたり火を放つたりした。

眞の混亂狀態が帝國の全體に擴がつた。諸侯の中の或ものはプロテスタント（註。ルーテルの一派はさう呼ばれた。プロテストは抗辯の意）となつてカトリック（舊教）の臣民を迫害した。他のものはカトリックのままでゐてプロテスタント（新教）の臣民を絞首した。一五二六年のスパイエルの國會はこの君臣の間の難問題を解決しようとして、「臣民はすべてその君主と同じ宗派たるべし」といふ命令を下した。これがドイツを無數の敵對してゐる小さな公國や侯國をならべた將棋盤のやうなものにして、正しい政治上の發達を數百年の間さまたげたやうな形勢を馴致するもととなつた。

一五四六年の二月にルーテルは死んで、二十九年前に罪障消滅符を賣ることにその有名な反對を宣言したその同じ教會に葬られた。實に、三十年と經たないうちに、のんきに笑ひさざめいてゐた文藝復興の世界は、宗教改革といふ論じたり爭つたり蔭言を言つたり討論したりしてゐる社會に變へられたのである。法王の支配した全世界的の靈の帝國が忽然として滅びてしまつたので、西ヨーロッパの全部は戰場と化して、そこで新教徒と舊教徒とは互に殺し合つたが、それは、われ〳〵現代人にはちやうど古代のエトルリヤ人の神祕的な碑文と同じやうに到底理解することの出來ない或神學上の教義をそれ〴〵宣揚しようとしたためであつた。

宗教戰爭

宗教大論爭の時代

十六七世紀は宗教的論爭の時代であつた。

もし君達が氣をつけるならば、君達は自分達の周圍のほとんどすべての人がいつも「經濟上のことを話してゐる」のを、卽ち賃銀だの勞働時間だの同盟罷工だのといふやうな自分達の社會生活に關係のあることを話してゐるのを見出すだらう。なぜなら、それが今日の時代の最も興味のある話題だからである。

が、一六〇〇年あるひは一六五〇年ごろの小さな子供達はもつとずつと運が惡かつた。彼等は「宗教」以外のことは何も聞かなかつた。彼等の頭は「宿命」だの「化體」（註。聖餐のパンと葡萄酒とがキリストの肉と血とに變化すること。）だの「自由意志」だの、その他、舊教でも新教でも、「まことの信仰」のはつきりと言へない點を表はしてゐる無數の變な言葉だので充たされてゐた。親達の氣持次第で彼等は舊教徒なりルーテル教徒なりカルビン教徒なりツウィングリ教徒なり再禮教徒（註。この宗派では大人の洗禮を以て神聖とするので、子供の時に洗禮を受けたものでも成人してから再び洗禮を受けさせる。）なりに洗禮された。そしてそれ〴〵の神學をルーテルの作つた『オウグスブルグの教義問答』

宗教戰爭

なり、カルビンの書いた『キリスト教の根本原理』なりから學んだり、また、イギリスの國教の祈禱書の中に印刷されてある三十九箇條の教條を覺えたりした。そして、これらのものこそ「まことの信仰」を表はしてゐるものであると告げられた。

彼等は、いく度も結婚したイギリス國王ヘンリー八世が教會の財産を根こそぎ横領して、自らイギリス教會の首長となつて、古來法王の權利であつた司教や司祭の任命權を自分のものにしたといふ話を聞いた。彼等は誰かが土牢やさま〴〵の拷問部屋を持つてゐる宗教吟味所のことを話すたびにうなされるやうな思ひをしたり、また、亂暴なオランダの新教徒の群が何の抵抗力もない十餘人の老司祭をつかまへて、ちがつた信仰を公言したものを殺すといふ喜びだけで彼等を絞殺したといふ、前の宗教吟味所にも劣らぬ恐ろしい話を聞かされたりした。不幸であつたことは、この二つの相爭つてゐる黨派の力がちやうど相匹敵してゐたことである。さもなければ、この爭ひはもつと早くきまりがついたであらう。ところが、八世代もにもつゞいて、非常に複雜なものになつたので、わたしが君達に話すことが出來るのはただ極めて重要な事柄だけであつて、その餘の事は宗教改革の數多の歴史のどれかから知るやうにして貰はなければならない。

新教徒の大改革運動につづいて思ひきつた改革が教會の内部にも行はれた。これまでの法王達は、たゞ道樂半分の人道主義者であつて、ローマやギリシヤの古物をひねくつてゐるに過ぎなかつたが、

その人達は引つこんで、その代りには、自分達の手に置かれた神聖な務めを果たすことに一日二十時間を費すやうなまじめな人達が來た。

修道院の長い間のだらけかけた幸福も終りを告げた。坊さん達や尼さん達は日の出と共に起きて、神父達のことを學んだり、病人を看護し瀕死の人を慰めたりしなければならなくされた。宗教吟味所は晝夜警戒して、危險な教義が印刷物によつて擴められないやうにした。ここではいつも哀れなガリレオを擧げるのが例になつてゐる。彼れはその滑稽な小さな望遠鏡で天體を説明するのに多少輕率に過ぎたところがあり、また、遊星の運行に就いて教會の定説にまつたく反してゐた或意見を口にしたりしたので監禁された。けれども、法王や僧侶や宗教吟味所に公平であるためには、新教徒もまた舊教徒と同じやうに科學や醫學の敵であつて、等しく無智と頑迷とをまつかふに振りかざして、物事を自分のために研究してゐる人達を人類の最も危險な敵と見做したことを述べなければならない。

中でもカルビンは、偉大なフランスの宗教改革者で、ジュネーブの暴君(政治上でも精神上でも)であつたが、フランスの官憲がミカエル・セルヴェツス(イスパニヤ生れの神學者で、醫者で、最初の大解剖學者ヴェサリウスの助手として有名になつてゐた人)を絞殺しようとした時に援助したばかりでなく、セルヴェツスがやつとフランスの牢獄から遁れてジュネーヴに逃げて來ると、カルビンはこの著名な人を牢獄に抛り込んで、ぐづ〳〵と裁判を長びかしたあとで、たうとう彼れの異端を理由として、科學

者としての名聲には少しも頓着せずに火炙りの刑に處してしまつた。

まづ、かう言つた調子であつた。われ〳〵はこの問題に關するたしかな統計はいくらも持つてゐないが、しかし、大體において、新教徒の方が舊教徒よりもずつと早くこの競技に飽いてしまつたので、自分の信仰のために燒殺されたり絞殺されたり首を刎ねられた善男善女の大部分は、非常に強くて且つまた非常にはげしかつたローマの教會の方の犧牲になつた。

元來、寛容といふことは、（君達がもつと年を取つてからもこれは覺えてゐておくれ）ごく最近にはじまつたもので、今日のいはゆる「近代」の人々でさへ寛容であるのは自分達に大して關係のないことだけにとどまつてゐる。たとへば、アフリカの土人に對しては寛容であつて、佛教徒にならうがマホメット教徒にならうがかまはない。なぜなら、佛教でもマホメット教でも自分達に何のかゝはりもないからである。ところが、自分達の仲間であつた自由貿易主義者で高い保護稅法に反對してゐたものが關稅改革派にはひつて、今度は輸入稅を主張すると聞くと、彼等の寛容ははたと消えて、ちやうど十七世紀の傳來の舊教徒（或ひは新教徒）が、いつも敬愛してゐた自分の一番の親友が新教（或ひは舊教）教會の恐ろしい異端を信ずるやうになつたと知らされた時に使つたとほとんど同じ言葉を使ふのである。

「異端」はごく最近まで病氣のやうに思はれてゐた。今日われ〳〵は、誰かが自分の身體や家の掃除

を怠つて、自分や子供達をチブスなり他の豫防の出來る病氣なりの危險にさらしてゐるのを見ると、衞生課へ知らせてやる。と、衞生吏は警察の手を藉りて、全社會の安全に危險なこの人を隔離する。十六七世紀には、異端者、卽ち新教なり舊教なりの立つてゐる根本の原理を公然と疑ふやうな男なり女なりは、チブスの保菌者よりももつと恐ろしい脅威と考へられた。なるほど、チブスは肉體を滅すかも知れない。けれども、異端は、彼等の言ふところに依れば、不滅の靈魂をたしかに滅すのである。で、物事のきまつた秩序をみだるものを警察に警告するのはすべての善良な正しい市民の義務であつて、さうすることを怠つたものは、今日で言へば、同じ借家人がコレラなり疱瘡なりに罹つてゐるのを發見しながら電話を一つ近所の醫者にかけないものと同じやうに非難されたのである。

もう一二年もすれば君達は豫防療法のことを澤山聞くであらう。豫防療法といふのは、ただ、われわれの醫者が、患者が病氣になつてから行つて癒すのをいふのではないのである。反對に、患者と患者がまつたく健康な時に住んでゐる周圍の狀態とを研究して、そして病氣の原因になりさうなものをみんななくなすために、塵芥を掃除したり、食べてもいゝものといけないものとを敎へたり、攝生法の要領をいくらか與へたりするのである。いや、それどころではない。これらの深切な醫者たちは學校へまでやつて來て、子供達に齒磨き楊枝の使ひ方や風邪を引かないやうにする法やを敎へてくれる。

十六世紀には（わたしが、今、君達に話したやうに）肉體の病氣よりも靈魂を脅かす病氣の方をず

つと重大に考へたので、そこで靈魂の豫防療法の制度を組織したのである。まづ、子供がやつとはじめて言葉を綴れるだけに大きくなるや否や、眞の（たゞそれだけが眞の）信仰の原理を敎へた。が、間接にはこれがヨーロッパ人の一般の進歩のためにいゝ事であつた。新敎國には間もなく方々に學校が建つた。學校では非常に貴重な時間の多くを『敎義問答』の說明に使つたが、しかし、神學の外に他の事をもいろいろ敎へた。殊に讀むことを奬勵したので、勢ひ印刷業を大に盛んにしなければならなかつた。

ところが、舊敎徒もまたそれに負けなかつた。彼等も多くの時間と考へとを敎育に使つた。殊にこの事では、敎會は新たに組織された「耶蘇會」といふ團體が無二の親友で味方であるのを見出した。この有名な團體の創立者はイスパニヤの兵士であつたが、よくない冒險生活を送つたあとで發心して、そこで、敎會のために盡さなければならないやうな氣がした人であつた。これはちやうど前に罪を犯した多くのものが、自分達の過ちを救世軍のために示されてから、もつと不幸な者たちを助けたりするといふ事業に殘りの生涯を捧げるのと同じであつた。

このイスパニヤ人は名をイグナチウス・ド・ロヨラと言つた。アメリカ發見の前の年に生れた。負傷して、生涯の跛となつて、病院にはひつてゐた時に聖母とキリストとのまぼろしを見たが、それが彼れに前半生の惡行を棄てさせた。彼れは聖地へ行つて十字軍の事業を完成しようと決心した。ところが、エルサレムへ行つて見ると、それがとてもだめなことが分つたので、西へ歸つて來て、ルーテル一派の異端との戰に力を盡さうとした。

一五三四年に彼れはパリーのソルボンヌ大學で學んでゐた。七人の他の學生と共に彼れは一つの宗敎團を創立した。八人の者は互に淨い生活を送ることと、富を求めないで正義を勵むことと、身も心も擧げて敎會のために捧げることとを誓つた。數年後にはこの小さな宗敎團が堂々とした組織に發達して、法王ポール三世に依つて「耶蘇會」として承認された。

ロヨラはもと軍人であつた。で、規律を重んじたので、上長の命令には絕對に服從するといふことがイエスイタ組合（註。耶蘇會のこと）の異常な成功の主要な原因の一つになつた。彼等は敎育を重んじた。殊に、敎師となるものには最も徹底した敎育を與へた後でなければ、ただの一人の生徒にさへ話させなかつた。彼等は學生達と一しよに住んで、その遊戯にも加はつた。彼等はやさしい心づかひで彼等を監視した。そしてその結果として、新らしい時代の者を、ちやうど中世初期の人々のやうにまじめに宗敎上の義務を果たした眞のカトリック敎徒に育てあげた。

けれども、この利口なイエスイタ組合はその努力をみんな貧しい者の敎育にばかりは費さなかつた。彼等は有力なものの宮殿へもはひつて行つて、未來の皇帝や國王達の家庭敎師になつた。そしてこれがどういふことになつたかは、今にわたしが三十年戰役のことを話す時に君達にも自然とわかるであ

らう。が、この恐ろしい最後の宗教的狂熱の爆發する前に、澤山まだ他の事が起つてゐる。

チャールス五世は死んでゐた。ドイツとオーストリヤとは弟のフェルヂナンドに讓られてゐた。その他の領土はみんな、イスパニヤもネーデルランドも印度もアメリカも息子のフィリップの有に歸してゐた。フィリップはチャールスとチャールスのいとこであつたポルトガルの王女との子であつた。かういふ結婚から生れる子供達は得て變態になり易いものである。フィリップの子のドン・カルロスは（後に父親の同意の下に殺されたが）不幸にも狂人であつた。フィリップはまつたくの狂人ではなかつたが、その教會に對する熱心さは宗教氣狂ひに近かつた。彼れは天が自分を人類の救主の一人に任じたと信じてゐた。であるから、誰でも頑固で陛下と同じ考へを持つことを拒むものは、卽ち人類の敵であることを自分で承認して、彼れの例が他の敬虔な人達の靈魂を腐敗させまいために撲滅されなければならなかつた。

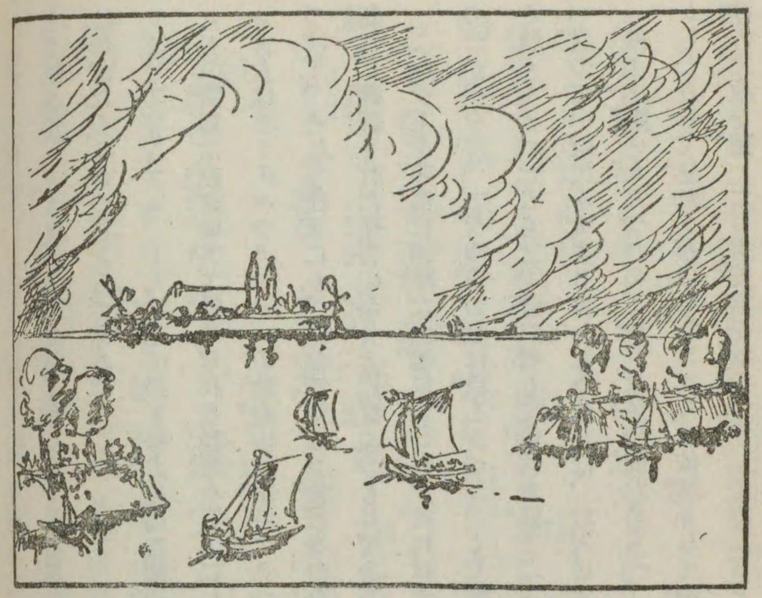
勿論、イスパニヤは非常に富んだ國であつた。新世界の金銀がみんなカスチラとアラゴンとの國庫に流れ込んだ。けれども、イスパニヤは變な經濟病にかゝつてゐた。この國の農民は非常によく働く男達ともつとよく働く女達とであつた。けれども、その上の階級のものは、いかなる種類の勞働をも極端に輕蔑して、陸海軍人か文官かになる外は何もしなかつた。ムーア人はまた、非常に勤勉な職人であつたのだが、とうの昔に國外へ放逐されてゐた。その結果として、イスパニヤは世界の寶庫であ

りながら、依然として貧しい國だつた。なぜなら、その金をみんな、麥やその他の生活上の必需品——それをイスパニヤ人は自分達で作り出すのを怠つたので——と取り換へるために外國へ送り出さなければならなかつたからである。

で、フィリップは、十六世紀の最も勢力のある國民の支配者ではあつたが、その收入にはネーデルランドの繁華な商業地方で集められる稅金を當てにしてゐた。ところが、これらのフランドル人やオランダ人はルーテルやカルビンの教義の信奉者であつて、その教會堂からは一切の肖像や聖畫を取り片づけて、そして法王にも、自分達はもう彼れを自分達の牧者とは思はないで、自分達の良心の指圖と新たに翻譯された聖書の命令とに從ふつもりであると言ひ送つてあつた。

これが王を非常に困難な立場においた。彼れはオランダの臣民の異端を忍ぶことはとても出來なかつたが、と言つて、彼等の金は欲しかつた。もし彼等を新教徒になるにまかしてその靈魂を救ふ手段を執らなかつたならば、神に對して義務を缺くことになる。が、もし、宗教吟味所をネーデルランドへ送つて、臣民を火炙りにしたりすれば、收入の大部分を失ふであらう。

優柔不斷の人だつたので彼れは長い間ためらつてゐた。やさしくしたり嚴しくしたり約束したり嚇かしたりして見た。が、オランダ人は依然として頑强で、相變らずルーテル派やカルビン派の說教者達の說教を聽いたり讃美歌を歌つたりしてゐた。フィリップは絕望のあまり「鐵人」といはれたアルバ



堤防を決してライデンを救ふ

公を遣つて、これらの強情な罪人共にこちらの條件を承諾させようとした。アルバ公は着くと早々、彼れが到着前にうまく國外へ逃げ去らなかつた首領達を捕へて首を刎ねた。

一五七二年に、（フランスの新教徒の首領達があの恐ろしいセント・バーソロミューの夜にみんな殺されたと同じ年に）彼れは多くのオランダの町を襲つて、他の町の者への見せしめに住民を虐殺した。つぎの年にはオランダの工業の中心地であるライデンの町を包圍した。

そのうちに、北ネーデルランドの七つの小さな州がいはゆるユトレヒト同盟といふ防禦同盟を結んで、ドイツ皇帝チャールス五世の祕書官であつたオレンジ公ウィリヤムを陸軍の

統領及び「海の乞食」として知られてゐた海賊を働く水夫共の司令官とした。と、ウィリヤムは、ライデンを救ふために、堤防を切つて、淺い内海をつくり出して、平底船だの艀だのといふ、泥の中を漕いだり押したり引いたりしてやつと町の城壁に達したやうなもので編成された變な海軍の力を藉りてその町を救つた。

これこそ、實に、天下無敵のイスパニヤ王の軍隊が慘澹たる敗北をしたはじめてあつた。それが世界を驚かしたのは、ちやうど日露戰爭で、日本の奉天の勝利がわれ〳〵の時代のものを驚かしたのと同じである。で、新教徒軍は新たに勇氣を得たので、フィリップは新らしい手段を案出してこの叛逆の臣民達を征服しようとした。彼れは薄馬鹿の宗旨狂を金で雇つてオレンジ公ウィリヤムを暗殺させた。ところが、自分達の首領が死んだのを見ても七州の民は屈服しなかつた。却つて反對に、はげしく怒つた。一五八一年にヘーグに開かれた七州議會（七州の代表者達の會合）は極めておごそかに「惡王フィリップ」を廢して、これまで「神の庇護に依る王」に委されてゐた統治の權を自分達のものにした。

宗教戰爭

これは政治上の自由を得ようとした大爭鬪史の中でも非常に重要な事件である。大憲章の署名で終つた貴族の激昂よりももつとずつと先きへ行つたものであつた。これらの市民達は言つた。「王と臣民との間には暗默の了解があつて、双方共に或つとめを果たし或きまつた義務を負ふべきである。で、もしどちらかがこの協定を守ることを怠れば、他方はそれが消滅したものと見做す權利がある」と。

一七七六年にジョージ三世のアメリカの臣民達も同じ結論に達した。しかし、彼等と支配者との間には三千マイルの大洋があつたが、このオランダの七州議會はイスパニヤ軍の銃聲の聞える中で、復讐しようとしてゐるイスパニヤ艦隊を斷えず恐れながら、この決議を（失敗した時には死ぬ覺悟で）したのである。

天下無敵のイスパニヤ艦隊がオランダとイギリスとを征服しようとしてゐるといふ話は、新敎徒の女王エリザベスが舊敎徒の「血のメリイ」の後を嗣いだ時には、もう古いものだつた。幾年もの間、前方の水夫達はその事を言つてゐた。と、十六世紀の八十年代になつて、その噂が本物になり出した。リスボンにゐた水先案内達の言ふところに依ると、イスパニヤとポルトガルとの波止場といふ波止場ではみんな船を造つてゐるといふのである。そして南ネーデルランド（ベルギー）では、パルマ公が大遠征隊を集めてゐて、艦隊が到着次第にオステンドからロンドンとアムステルダムとへ輸送しようとしてゐるといふのである。

一五八八年に、無敵艦隊は北へ向つて出帆した。けれども、フランドル海岸の港々はオランダの艦隊が封鎖し、海峽はイギリスの艦隊が守つてゐたので、南方の穩かな海に慣れてゐたイスパニヤ人は、この狂風の吹きすさぶ北方の天候の中でどう舵をとつていゝか分らなかつた。で、一旦敵船に襲はれ暴風雨に襲はれるや否や無敵艦隊がどうなつたかは、君達に語る必要はない。わづかに數艘の船が、

アイルランドの方をぐるつとまはつて、この恐ろしい敗北の話をしに逃げ歸つた。が、その他はみんな滅びて北海の底に横はつてゐる。

實際、天下はまはり持ちである。今度はイギリスとオランダとの新敎徒が戰爭を敵の領土の方へ持つて行つた。十六世紀が終らうとする前に、ハウトマンは、リンスチョーテン（ポルトガル政府に仕へてゐたオランダ人）の書いた小冊子をたよりにして、たうとう印度への路を發見した。で、その結果、大きなオランダ東印度會社が設立されて、アジヤやアフリカにあるポルトガルやイスパニヤの植民地に對する戰爭がまつたくまじめに着々とはじめられた。

この植民地の略取がはじまつたばかりのころであつた。妙な訴訟事件がオランダの法廷に起つた。十七世紀のはじめに、ヴァン・ヒームスケルクといふオランダの船長が――印度へ行く東北の航路を發見しようとしてノヴァ・ゼンブラ島（註。北氷洋にある島。）の氷結した海岸で一と冬を過した探檢隊の頭領として有名になつた人だが――マラッカ海峽でポルトガルの船を一艘捕獲したのである。君達は法王が世界を二つに等分して、その一半をイスパニヤ人に、他の一半をポルトガル人に與へたことを覺えてゐるだらう。で、ポルトガル人は自分達の印度諸島をめぐつてゐる水をも勿論自分達の所有の一部と思つてゐたので、殊に、その時には、ネーデルランド七州聯合國と戰爭中でもなかつたので、私立のオランダの貿易會社の船長が自分達の領土へはひつて來て船を奪つたりする權利のないことを主張した。そ

して訴訟を起したのである。オランダ東印度會社の重役達はグロチウスといふ著名な若い辯護士を賴んで自分達の方の辯護をさせた。彼れは大洋はだれが通らうと自由であるといふ驚くべき抗辯をした。陸上から發射した砲彈がとどく距離の外へ一旦出た以上は、海はあらゆる國民のあらゆる船舶が自由に通つてい、天下の公道である。いや、（グロチウスに從へば）でなければならないものである。これが、實に、この驚くべき說が法廷で公然と論ぜられた最初であつた。が、他のすべての航海國民には反對された。殊に、このグロチウスの有名な「公海」論の主意をくつがへすために、イギリス人のジョン・セルダンは、その有名な「領海」論を書いて、王者が自分の國をめぐつてゐる海を自分の領土に屬してゐるものと見做すのは當然の權利であると論じた。今、わたしがこれをこゝにお話しするのは、この問題がいまだに決定されないで、現にこの間の大戰爭の時にもさまぐ〳〵な面倒や紛擾を惹起したからである。

イスパニヤ人とオランダ人やイギリス人との間の戰爭に立ち歸つて見ると、二十年も經たないうちに極めて大切な印度や喜望峰やセイロン島の植民地も、支那の沿岸や日本の沿岸にまであつた植民地も、みんな新敎徒の手に歸してゐた。一六二一年に西印度會社が設立されて、それがブラジルを征服したり、北アメリカにはニュー・アムステルダムと名づけた要塞をヘンリー・ハドソンが一六〇九年に發見した河の河口に築いたりした。

これらの新らしい植民地がイギリスとオランダ共和國とを富ましたことは非常なものだつたので、兩國は陸上の戰をするためには外國兵を傭つておいて、自分達は專ら商業貿易に從事した。彼等には新敎徒の叛亂が獨立と繁榮とを齎したのである。けれども、ヨーロッパの他の多くの國々では、それは恐怖の連續に外ならなくて、それに比べればこの間の大戰爭すらまだ〳〵日曜學校生徒達のおとなしい行軍ぐらゐなものであつた。

三十年戰役は一六一八年に始まつて一六四八年の有名なウェストファリヤ條約で終つたのだが、それは一世紀の間にだん〳〵と增大して來てゐた宗敎的憎惡の極めて當然の結果であつた。それは、わたしが今言つたやうに、恐ろしい戰爭であつた。あらゆる人が他のあらゆる人と戰つて、そして、そのあらゆるものがまつたく疲れきつてもはや戰ふことが出來なくなつた時にはじめてその戰が終つたのであつた。

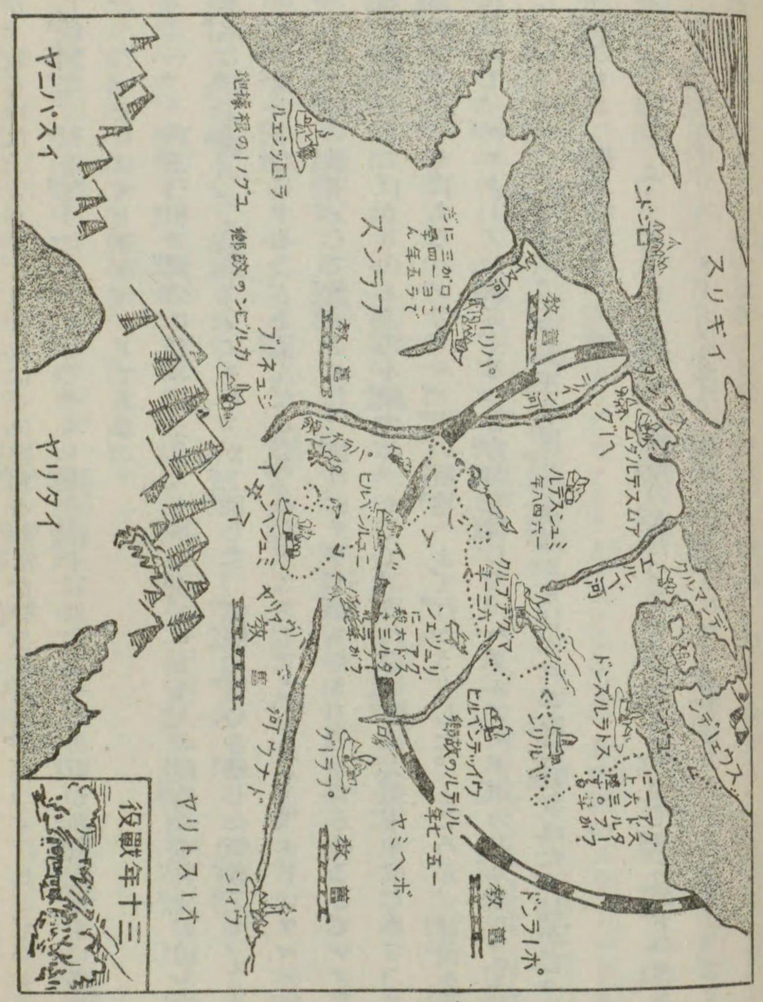
わづか三十年ばかりのうちに、中央ヨーロッパの多くの部分は荒野と化して、そこでは餓ゑた農夫達が死んだ馬の肉をもつと餓ゑてゐる狼と奪ひ合つた。ドイツ全體の町と村との六分の五は破壞された。西ドイツのファルツ選帝侯領は二十八回劫掠された。そして千八百萬の人口は四百萬に減じた。

戰爭はハプスブルグ家のフェルヂナンド二世が皇帝に選まれるとほとんど同時にはじまつた。彼れはイエスイタ組合が最も意を用ひて敎育しただけあつて、敎會に對して飽くまで從順な信心深い舊敎徒で

あつた。まだ青年であつたころに、一切の宗派と一切の異端とを自分の領土から撲滅しようといふ誓を立てたが、フェルヂナンドはその能力のあらん限りを盡してそれを守つた。彼れが皇帝に選擧される二日前に、彼れの主要な敵手である新教徒のフレデリック――ファルツ選帝侯でイギリス國王ジェームス一世の女婿――がボヘミヤ王に選まれたが、これがフェルヂナンドの氣持をまつかふから蹂みにじつたのであつた。

すぐにハプスブルグ家の軍隊はボヘミヤへ進發した。若い王はこのおそるべき敵を防ぐために援を求めたがだめだつた。オランダ共和國は助けたいとは思つてゐたが、ちやうど自分の方もハプスブルグ家のイスパニヤ軍と必死の戰をしてゐたので、どうすることも出來なかつた。イギリスのスチュアート家はまた、遠いボヘミヤのあぶない冒險事業に人と金とを使ふよりはむしろ國内に自分達の絶對權を强くしようと、その方に身を入れてゐた。で、數ケ月の戰の後に、ファルツ選帝侯は脆くも追拂はれてその領土は舊教徒のバヴァリヤ公に與へられた。これが大戰爭のはじまりである。

その時、ハプスブルグ家の軍隊は、チリーとワレンスタインとに率ゐられて、行く〳〵ドイツの新教徒の地を征伐しながら進んでゐたが、たうとうバルト海の岸へまで行つた。舊教國を隣に持つことは新教徒のデンマルク王には容易ならぬ危險に感じられた。そこで、クリスチャン四世は敵が自分に對してさうまだ强くならない前に攻擊して自分を防がうとした。で、デンマルク軍はドイツへ進入し


スリギイ
ジュ
ダンジルデスムア
ハルバ河
ハルツ山
ドンズルラトス
シリル
ヒルベンティイウ
ヤミヘボ
ドンライボ
教會
ヤリトスイオ
ヤリタイ
ヤニバスイ
ヤリ教
ヤリ河ウナ
ニイウ
ヤンヘンニ
ブイネュジ
ヒルベンルニ
ヒルベンルニ
ヒルベンルニ

たが、敗られた。ワレンスタインはその勝利を非常な勢ひと強暴とでつゞけたので、デンマルクはつひに餘儀なく和を乞うた。かくしてバルト海の沿岸にはたゞ一つの町が新教徒の手に殘されたばかりになつた。それはストラルズンドである。

そこへ、一六三〇年の夏のはじめに、スウェーデン王でロシヤ人の侵略から自分の國を守つた人として有名なヴァサ家のグスターフ・アドルフが上陸した。無限の野心を藏した新教王で、スウェーデンを北方の大帝國の中心にすることを望んだりしてゐたグスターフ・アドルフは、ヨーロッパの新教の諸侯達にルーテル派の救主として歡迎された。彼はチリーがちやうど、やつとのことでマグデブルグ市の新教徒を虐殺したばかりのところを破つた。そこで、彼れの軍隊は大進軍をはじめて、ドイツの中心を通つてイタリヤにあるハプスブルグ家の領地へまで行かうとした。ところが、背後を舊教軍に脅かされたので、グスターフは俄にぐるつと方向を轉じて、ハプスブルグ軍の主力をリュツェンの會戰で破つた。が、不幸にしてスウェーデン王は自分の軍隊からはぐれた時に殺された。しかし、ハプスブルグ家の勢力もまた挫かれた。

フェルヂナンドは、もと〳〵疑深い性質の人だつたが、ここに至つて忽ち部下の者を疑ひはじめた。總司令官のワレンスタインは彼れの教唆で暗殺された。舊教徒のブルボン家は、フランスを支配してゐて競爭者であるハプスブルグ家を憎んでゐたが、この事を聞くと、新教徒のスウェーデン人と同

盟を結んだ。ルイ十三世の軍隊はドイツの東部へ侵入して、そしてチュレンヌとコンデとはその名聲をスウェーデンの將軍バネルやワイマルの名聲と共に高くしながら、ハプスブルグ家の領地で虐殺したり掠奪したり燒拂つたりした。これが大に名聲と富とをスウェーデン人に齎したので、デンマルク人に嫉みを起させることになつた。新教徒のデンマルク人は、そこで、新教徒のスウェーデン人に宣戰したが、これは、スウェーデン人の同盟者である舊教徒のフランス人の宰相であつた樞機員リシュリューが、ちやうどその時ユグノー（卽ちフランスの新教徒）から一五九八年のナントの勅令で保證されてゐた公然禮拜の權利を奪つたからであつた。

この戰爭もまた、かういふ種類の爭ひのいつもの例で、何一つ決定しなかつたうちに、一六四八年のウェストファリヤ條約で局を結ぶことになつた。舊教國はやはり舊教國のままであつて、新教國もまたルーテルやカルビンやツウィングリの教義を信奉したままであつた。スキスとオランダとの新教徒は獨立した共和國として承認された。フランスはメッツとツールとヴェルダンとの三市とアルサスの一部とを取つた。神聖ローマ帝國は人民もなければ金もなく、希望もなければ勇氣もなく、まるで案山子みたいなものになつて存在をつゞけてゐた。

三十年戰役が仕遂げたたゞ一つの善事は消極的のものであつた。それは舊教徒をも新教徒をもがつかりさせて再び戰爭をやつて見ようといふ氣を起させないやうにしたことである。で、それ以來、彼

等は互に平和でゐる。けれども、これは宗教的感情や神學上の憎惡がこの地上から除かれたことを意味してゐない。反對である。なるほど、舊教徒と新教徒との間の爭鬪は止んだが、派のちがつた新教徒同士の間の爭ひは今までと同じやうにやはり烈しくつゞいた。オランダでは、宿命（神學のきはめて曖昧な點で、しかも君達の曾祖父の目には非常に重大であつた）の眞の性質に就いての意見の相違から爭ひが起つて、たうとうオールデンバルネヴェルトのジョン――オランダの政治家で、その獨立の最初の二十年間、共和國の成功のために懸命になつて働いた上に、その組織的大天才を揮つて印度貿易會社をも起した人――の首をはねるに至つた。イギリスでも、この反目から內亂が起つた。

が、わたしはヨーロッパの一國王がはじめて法律上の手續を經て死刑に處せられるに至つたこの事件を君達に話す前に、まづイギリスの以前の歷史に就いて少しく言はなければならない。この本では、わたしは現在の世界の狀態を解り易くするやうな過去の出來事だけを君達に話さうとしてゐる。もしわたしが或る國々をまつたく擧げないとしても、それはわたしが何か內所で嫌つたりしてゐるからではない。わたしはノルウェーやスヰスやセルビヤや支那にあつた事をも話したいとは思つてゐる。けれども、これらの國々は十六七世紀のヨーロッパの發展には大した影響を與へなかつた。で、わたしは丁寧におじぎをして彼等のそばをば通り過ぎる。が、イギリスはちがつた立場にゐる。この小さな島の人達が過去五百年の間にしたことは世界の隅々にまで及んで歷史の進路をつくつた。で、イギリス

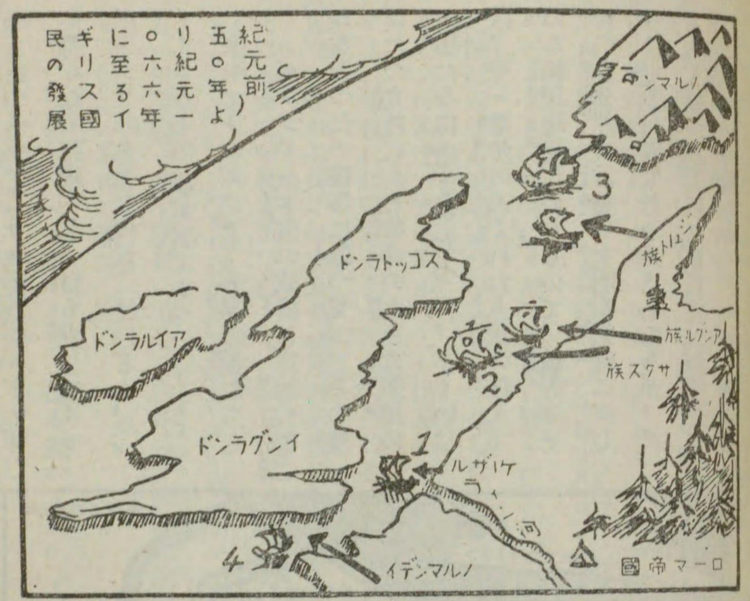
史の背景を完全に知つてゐなければ、君達は新聞で讀むことをも本當には理解することが出來ないのである。であるからして、どうしてイギリスが、他のヨーロッパ大陸の國々がまだ專制君主に支配されてゐた時に、議會政治を發達させるやうになつたかといふことを君達も知つてゐる必要がある。

イギリスの革命

帝王の「神權」と神權でこそないがもつと道理にかなつた「議會の權利」との爭ひが結局チャールス王の災厄となつた次第

ケーザルは、西北ヨーロッパの最初の探檢者であつたが、紀元前五五年にイギリス海峽を渡つてイングランドを征服した。爾來、四世紀の間、この國はそのままローマの領土であつた。が、蠻族共がローマを脅かしはじめた時に、駐屯軍は本國を守るために邊境から呼び返されて、ブリタニヤの島は政府もなければ守りもないところになつた。

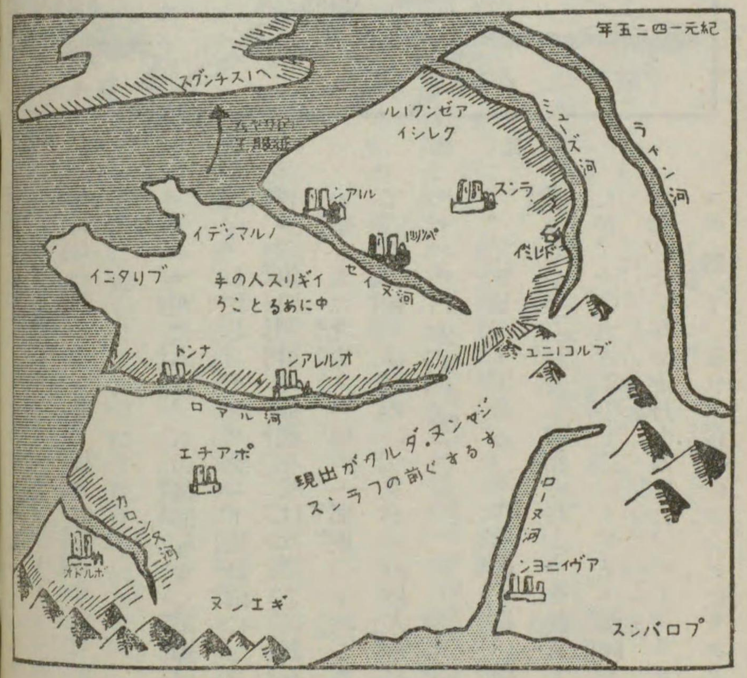
この事が北ドイツの飢ゑたサクス族の間に知れるや否や、彼等は北海を渡つて、この豐かな島に住みついた。そして幾つもの獨立したアングロサクソン王國（かう呼ばれたのは初めの侵入者であるアングル人卽ちイギリス人とサクス人との名を取つたのである）を建てたが、これらの小さな王國は絕えず互に爭つてゐて、どの王も聯合國の首長として立つほどに強くはなかつた。五百年以上の間、メルシヤだのノーサムブリヤだのウェセックスだのサッセックスだのケントだの東アングリヤだのと言つたやうな諸國は、いつも、さまざまなスカンヂネヴィヤの海賊共から襲擊されてゐた。が、つひに十一



世紀になつて、イングランドはノルウェーや北ドイツと共にカヌート大王の大デンマルク帝國の一部となつて、獨立の跡方もなくなつた。

デンマルク人は、その後間もなく追拂はれたが、しかし、イングランドは自由になるや否や、第四回目の征服を受けた。この新らしい敵もまた北方人の他の一部族の子孫であつて、十世紀のはじめにフランスに侵入してノルマンヂー公國を建てゝゐたものたちだつた。ノルマンヂー公ウィリヤムは、長い間、羨ましさうな目をして海のむかうを眺めてゐたが、一〇六六年の十月にイギリス海峽を渡つた。その年の十月十四日に、ヘースチングスの戰で、彼れは最後のアングロサクソン

王であつたウェセックスのハロルドの軍を苦もなく打破つて、自ら立つてイングランドの王となつた。けれども、ウィリヤムもその繼承者であつたアンジュー家やプランタジェネット家の者たちもイングランドを本當の故郷とは思つてゐなかつた。彼等に取つては、この島はただ大陸にある彼等の大きな領地の一部たるに過ぎなかつた。――いはば、やゝ進歩のおくれた人民の住んでゐる植民地見たいなもので、彼等はそれに自分達の言葉や文明を無理に押しつけてゐたのであつた。ところが、だん〴〵經つうちに「植民地」のイングランドは「母國」のノルマンヂーに追



百年戰役

ひついて來た。と同時に、フランスの國王達はこの優勢な隣人であるノルマンイギリス人を――事實また、フランス國王に取つては不從順な臣下に外ならなかつたので――必死になつて追拂はうとした。百年の戰爭の後に、フランス人はジャンヌ・ダルクといふ一少女の指揮の下に「外國人」を自分達の國土から追出した。ジャンヌ自身は、一四三〇年のコムピエーギュの戰で捕虜となつて、彼女を捕へたブルグンド人のためにイギリス兵に賣られたので、魔法使として焚刑に處せられた。が、イギリス人の大陸における足場はつひにしつかりしなかつたので、彼等の王達は、やつと、その時間のすべてをブリテンの領土の方へ使ふことが出來るやうになつた。この島の封建貴族達もまた、麻疹と疱瘡と同じやうに中世には普通であつたあの愚にもつかない黨爭を事としてゐたので、そして、古い地主達の大部分はこれらのいはゆる薔薇戰役の間に殺されてしまつたので、王達に取つてその王權を伸張することは極めて容易であつた。で、十五世紀の終ごろには、イングランドは強い中央集權の國となつて、チュードル家のヘンリー七世に支配されてゐた。この王の有名な裁判所は、卽ち恐ろしい思ひ出を持つた「星室廳」は、殘存してゐる貴族達が國の政治の上に自分達のむかしの勢力を挽回しようとする一切の試みを極端に壓迫した。

一五〇九年に、ヘンリー七世の後を嗣いでその子のヘンリー八世が位に卽いたが、その時からイギリスの歷史は新らしい意義を得た。といふのは、この國が中世風の島でなくなつて近代風の國家とな

つたからである。

ヘンリーは宗教には深い興味を持つてゐなかつた。が、自分の幾度もの離婚の中の一つに就いて法王と不和になつたのを進んで利用して、ローマからの獨立を宣言してイングランドの教會を「國教教會」――そこでは、俗界の支配者はまたその臣民の精神上の首長でもあるといふのである――の最初のものにした。この一五三四年の平和な宗教改革は、チュードル家に、これまで長い間ルーテル派の多くの布教者達からはげしい攻撃を受けてゐたイギリスの僧侶達の支持を與へた上に、修道院の從來の所領の沒收に依つて王權をも增大した。と同時に、それはまたヘンリーをして商人達やその家族の者たちの間にも人氣を博さした。といふのは、元來これらの者達は、ヨーロッパの他の國々から廣く深い海峽で引き離されてゐる島の自尊心の高い榮えた住民として、「外國の」ものは何んでもかでも非常に嫌つてゐたので、從つてまた、イタリヤの司教などに自分達の正直なブリテン魂を支配させたくなかつたからである。

一五四七年にヘンリーは死んだ。で、王位は十歲になつたばかりの小さな息子が嗣いだ。この子供の後見人達は、近代のルーテルの教義を愛してゐたので、全力を擧げて新教徒のために盡した。ところが、この少年はまだ十六歲にもならない前に死んだので、姉のメリー――イスパニヤのフィリップ二世の妃――がその後を繼いだ。と、メリーは新らしい「國教教會」の司教達を火刑に處して、その他

のやり方でも夫のイスパニヤ王の例にならつた。

幸ひに彼女は一五五八年に死んで、ヘンリー八世とアン・ボレインとの娘であるエリザベスが後を繼いだ。アン・ボレインはヘンリーが六たび結婚したうちの第二番目の妃であつて、彼れの氣に入らなくなると首を刎ねられた人である。エリザベスもまた牢獄の中でしばらくの間を過した後に、神聖ローマ皇帝の賴みで僅に放免された人だつたので、舊教やイスパニヤの事に就いては極めて好意を持つた敵だつた。父親と同じやうに宗教の事には冷淡だつたが、また父親と同じやうに人を見る明に富んでゐて、その治世の四十五年間を王家の勢力を强めることと自分の國の歲入や所領を殖やすこととに費した。尤も、これは彼女のまはりに集つた多くの人達が極めて上手に彼女を輔佐したからで、エリザベス時代を非常に意義のある時代にしたのはその人達の力が大に與つてゐるのである。

けれども、エリザベスはその王位にまつたく安んじてはゐられなかつた。彼女には競爭者が――極めて危險な競爭者があつた。スチュアート家のメリーである。メリーはフランスの女公爵とスコットランド王との娘で、フランス王フランシス二世の寡婦で、メヂチのカザリン（セント・バーソロミューの夜の虐殺をやらせた人）の嫁で、後にイングランドの王位に登つてスチュアート朝の始祖になつた少年の母親であつた。彼女は熱心な舊教徒で、エリザベスの敵であつた人々の方へ進んで味方した。が、政治上の手腕を缺いてゐたのとカルビン教徒の臣民達を罰するに用ひた手段が手荒であつたのとがも

とになつて、スコットランドに革命が起ると餘儀なくメリーはイングランドの領内に避難した。十八年の間、彼女はイングランドに留まりながら、自分に避難所を與へてくれてゐる婦人に對して絶えず陰謀を企てゝゐたので、その婦人は、たうとう「スコットランドの女王の首を刎ねるやうに」といふ自分の信任してゐる顧問官達の勸めに從はなければならなかつた。

その首が一五八七年に正しく「刎ね」られると、それがもとでイスパニヤとの戰爭が起つた。が、イングランドとオランダとの聯合艦隊がフィリップの無敵艦隊を破つたことは、われ〳〵がすでに見て來た通りであつて、二つの大きな反舊教派の勢力を打破らうとしてもくろまれた打擊は、有利な商業上の冒險を生み出すことになつたのであつた。

といふのは、今こそやつと、長年の躊躇のあとで、イギリス人とオランダ人とは印度やアメリカを侵略して、新教徒の同胞がイスパニヤ人の手から受けてゐた不法な壓迫に復讐するのが自分達の當然の權利であると考へたからである。イギリス人はコロンブスの一番はじめの繼承者の中にもゐたのであつた。イギリスの船はヴェニスの水先案内者ジョン・カボットが指揮の下に、實に一四九六年に北アメリカ大陸を最初に發見し且つ探檢したのであつた。ラブラドルやニューファウンドランドは植民地としてはさう大したものではなかつた。けれども、ニューファウンドランドの沿岸はイギリスの漁船隊には澤山な獲物を與へてくれた。一年後の一四九七年には、同じカボットがフロリダの沿岸を探檢し

た。

そこへ、ヘンリー七世とヘンリー八世との忙しい時代が來て、外國の探檢などに使ふ金はなかつたのである。ところが、エリザベスの治下になつて、國は平和でありメリー・スチュアートは牢獄にはひつてゐたので、水夫達はあとに殘して行く者たちの運命には何の心配もなく港を離れて行くことが出來た。エリザベスがまだ子供であつた時分に、ウィルービイが北岬の先きの方まで冒險をつゞけて行つたが、その船長の一人であつたリチャード・チャンセラーは、印度へ行ける航路を搜さうとしてなほも東へ進んで行つて、ロシヤのアルハンゲルに漂着して、そこで、この遠いモスコー帝國の神祕的な支配者達と外交上や商業上の關係を結んだのであつた。で、エリザベスが治世の初めのころには、この航海は多くの他の者達に依つて續けられた。商人の冒險者達は「株式會社」の利益をはかりながら、方々に貿易商會の基礎を置いたが、それが後の世紀になつて植民地に發達した。なかばは海賊、なかばは外交官であつたエリザベス朝の水夫達は、ただ一回の好運な航海に進んで一切のものを賭して、船艙に積めるものなら何でもかでも密賣買したり、利益以外の一切のものには一樣に無感情で人間をも商品をも賣買したりしながら、イギリスの國旗と處女女王の名聲とを世界の隅々にまで運んで行つた。と、一方では、ウィリヤム・シェークスピヤが國内で女王を樂しませたり、イングランドの最上の智慧や才能のある者達が女王と力を協せて、ヘンリー八世の遺した封建領土を近代の國家に變へよう

としたりしてゐた。

一六〇三年に老女王は七十歳で死んだ。彼女のいとこちがひが――祖父ヘンリー七世の玄孫で、彼女の競爭者であり敵であつたメリー・スチュアートの息子が――後を繼いでジェームス一世となつた。なんといふ幸ひであつたらう、彼れは自分が大陸の競爭者達のやうな運命からのがれた國の支配者になつてゐるのを知つた。實際、ヨーロッパの新教徒と舊教徒とが互に相手の勢力を打破つて自分の方の信條だけで一切を律しようといふ望みもない爭ひをしながら殺し合つてゐた時に、イングランドは平和であつて、ルーテルかロヨラかといふやうな極端には走らずに、悠々と「宗教改革」をしたのであつた。それがこの島王國に、次いで來た植民地の爭奪に非常に有利な地位を與へたのである。これはまたイングランドに、國際事件における指揮者の地位をも與へたのだが、この國はそれをずつと今日までも維持してゐる。かのスチュアート家との間に起つた不祥な事變さへもこの正則な發達を止めはしなかつた。

スチュアート家は、チュードル家の後を繼いだが、もと〳〵イングランドに取つては「外國人」であつた。彼等はこの事實を感じもしなければ理解もしなかつたやうである。が、土着のチュードル家なら馬を盜んでも咎められなかつたが、「外來の」スチュアート家の者だと馬具に目をつけただけでさへ一般のものから非常にいやがられずにはゐなかつた。老女王のエリザベスは自分の好きなやうに勝手

に國を支配した。もつとも、概して言へば、正直な（及び、さうでもない）イギリスの商人達のふところに金がはひるやうな政策をいつも執つてゐた。それ故、女王は感謝の念に滿ちた人民達の心底からの支持をいつも受けてゐた。で、小さな自由が議會の權利や特權の何かと共に奪はれても、女王の強い成功した對外政策が齎した外部の利益のために喜んで看過されてゐた。

外見上はジェームス王も同じ政策をつゞけてゐた。けれども、彼れは偉大な先代のあゝまで際立つた特徴であつた個人的情熱に缺けてゐた。外國貿易はやはり奬勵された。舊教徒は何の自由をも許されなかつた。けれども、イスパニヤがイングランドに樂しげな微笑を見せて平和な關係を結ばうとすると、ジェームスも微笑し返すやうに見えた。大多數のイギリス人はこれを好まなかつたが、ジェームスが自分達の王だつたので默つてゐた。

間もなく、そこへ不和の他の原因が生じた。ジェームス王と一六二五年に位を嗣いだその子のチャールス一世とは共に王の「神權」說をかたく信じて、臣民達の望みなどは聞かうとせずに、自分達が適當と思つたやうにその領土を支配しようとした。この思想は新らしいものではなかつた。法王達は、いろ〳〵な點でローマ皇帝の（といふよりはむしろ、全世界を包含する唯一不可分な國家を目ざしたローマ帝國の理想の）繼承者であつたが、彼等は常に自ら「地上に於けるキリストの代理者」を以て任じ、世間もまたそれを認めてゐた。何人も神がこの世界を適當と思つたやうに支配する權利を疑ふ

ものはなかつた。その當然の結果として、ほとんど何人も神の「代理者」が同じ事をして群民の服從を求める權利を疑はうとはしなかつた。なぜなら、法王は宇宙の絶對支配者の直接の代理者であつて全能の神にのみ責任を負ふものだからである。

ルーテルの宗教改革が成功を示した時に、これまで法王に附與されてゐたこれらの權利が、新教徒になつた多くのヨーロッパの君主達に承け繼がれた。彼等は自分自身の國の教會の首長として、自分自身の領土の範圍内では「キリストの代理者」であることを主張した。人民はかうして一歩を進めた自分達の支配者の權利を疑はなかつた。彼等がそれを受け容れたのは、ちやうどわれ〳〵が今日、代議制度が唯一の合理的な正しい政體であると思はれるのでその思想を受け容れるのと同じであつた。

であるから、ルーテル教なりカルビン教なりがジェームス王のしば〳〵聲高く繰返した「神權」の主張に對して特別な慣怒の情を起したといふのは正しくない。帝王神權説にイギリス人が不信を表した眞の理由は別に根據があつたに違ひない。

帝王の「神權」がはじめて事實の上で否認されたのは、一五八一年に、ネーデルランドの七州議會が彼等の合法の君主であるイスパニヤ王フィリップ二世を廢棄した時である。「王が契約を破つたので、それで、王は不忠實な召使と同じやうに暇を出されたのである」と彼等は言つた。その時以來、王の臣民に對する責任といふこの特殊な思想が北海の岸に住んでゐる多くの國民の間に擴がつた。それに

は彼等は非常に都合のいゝ位置にゐた。富んでもゐた。中央ヨーロッパの奥の方の貧しい人民達は、支配者の親兵の自由になつてゐたので、そんな問題をとやかう論じようものなら忽ち近くの城の深い土牢の中へ拋り込まれなければならなかつた。けれども、オランダやイングランドの商人達は大きな陸海軍を維持するに必要な資本を持つてゐたし、「信用」といふ全能な武器の扱ひ方を知つてもゐたので、さういふ恐怖は少しも感じなかつた。彼等は進んで自分達の金の「神權」を以てハプスブルグ家なりブルボン家なりスチュアート家なりの「神權」に對抗した。彼等は自分達の金貨や銀貨でもつて國王の唯一の武器であつたへまな封建式の軍隊に勝てることを知つてゐた。で、他の國民達が默つて忍んでゐなければ斷頭臺の露と消える覺悟をしなければならないやうなことをも敢てしたのである。

スチュアート家が自分達の好き勝手に振舞ふ權利があるといふ主張の下に、臣民に對する責任などはまつたくかまはないで、イングランドの人民を惱ましはじめた時に、イングランドの中流階級はまづ下院を防禦の第一線としてこの王權の濫用に對抗した。王權は屈服することを拒んで、王は議會を解散した。十一年の長い間、チャールス一世は獨りで支配した。彼れは多くの人民が不法と認めたやうな稅を課したりして、イギリス王國をまるで自分一個の所領地でもあるやうに取扱つた。彼れの左右には惡を勸めた顧問官もあるにはあつたが、われ〳〵はまた彼れがその確信を實行する勇氣を持つてゐたことをも言はなければならない。

不幸にして、チャールスは自分の忠實なスコットランドの臣民達の援助を受ける代りに、却つてその長老派（プレスビテリヤンといふカルビンの新教を奉ずる一派）と不和を釀した。で、自分の意志には大に反したことであつたが、現金の必要に迫られたので、餘儀なくたうとうまた議會を召集した。それは一六四〇年の四月に集つたが、王に惡意を示した。で、數週間で解散された。新らしい議會が十一月に召集された。今度のはじめのよりは一層御し難かつた。議員達は「神權の政府」か「議會の政府」かの問題を飽くまでも戰つて決しなければならないことを理解した。彼等はまづ王の重立つた顧問官達を攻擊してそのうちの六人を死刑に處した。また、自分達の承認を經ないでは解散させないといふことを聲明した。つひに、一六四一年の十二月一日には、「大諫奏書」といふ、支配者に對する人民の多くの不平を巨細に書きつらねたものを王に提出した。

チャールスは自分の政策に對する援助を地方の方で見つけることを望みながら、一六四二年の一月にロンドンを去つた。そこで、どちらも軍隊を組織して、王の絕對權と議會の絕對權との間に公戰の準備をした。この爭鬪の間に、清教徒といふ（英國國教教徒であつて、極端にその教義を清淨にしようと力めてゐた）イングランドの最も有力な宗教の一派が、急に目立つて來た。オリヴァー・クロンウェルに率ゐられたこの「虔信者」の聯隊は、その鐵のやうな訓練とその目的の神聖なことを深く信じてゐたのとで、間もなく非政府黨の全軍の模範となつた。二度チャールスは敗られた。一六四五年のネ

ースビーの戰の後に、彼れはスコットランドへ逃げた。スコットランド人は彼れをイングランド人に賣つた。

ついでスコットランドの長老派がイングランドの清教徒に對する陰謀と叛亂との時代が來た。一六四八年の八月に、プレストンパンズの三日間にわたつた戰の後に、クロンウェルはこの二度目の內亂にも結末をつけて、エヂンバラを占領した。そのうちに、彼れの士卒達は、宗教上の論爭をこの上つゞけたりして時間を空費するのに飽いて、自分達が主動者になつてどし〳〵實行しようと決心した。で、まづ議會から自分達清教徒の見解に同意しなかつたものをみんな追ひ出した。そこで、あとに殘つたものだけで組織した「ランプ」（註。臀の義である）議會は王を國事犯人としてその罪を問うた。上院は判事となることを拒んだ。特別裁判が開かれて、それが王に死刑を宣告した。一六四九年の一月三十日に、チャールス王はホワイトホールの窓から靜かに歩んで斷頭臺にのぼつた。その日こそ、實に、「主權を持つた人民」が、その選出した代表者の手に依つてではあつたが、はじめて、近代の國家に於ける自分の地位を理解しそくなつた支配者を死刑に處したのである。

チャールスの死につゞいた時代は通例オリヴァー・クロンウェルの名をつけて呼ばれてゐる。はじめはイングランドの非公式の執政であつたが、一六五三年に彼れは公然と保護總督となつた。そして五年間支配した。彼れはこの期間を通じてずつとエリザベスの政策をつゞけた。で、イスパニヤが再び